

**地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が
親の成長を促すプロセス分析と
支援者の役割に関する調査研究**

平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

NPO 法人 子育てひろば全国連絡協議会

目次

| | | |
|--------------------------------|--|-------|
| 第1章 | 地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究の目的と概要 | 1 |
| I. | 本調査研究の目的と背景 | 1 |
| II. | 本調査の実施内容 | 1 |
| III. | 本調査の結果の概要 | 3 |
| IV. | プレ／ポスト調査の結果 | 14 |
| V. | 総合考察 | 16 |
| 第2章 | 量的調査（質問紙調査） | 18 |
| I. | 調査の目的 | 18 |
| II. | 調査の方法 | 18 |
| III. | 調査の結果 | 20 |
| IV. | 利用者対象の調査結果 | 29 |
| V. | 総括 | 36 |
| 第3章 | 質的調査（聞き取り調査） | 39 |
| I. | 調査の目的 | 39 |
| II. | 調査の方法（調査対象と調査手続き） | 39 |
| III. | 拠点における「寄り添い型支援」と「親としての成長」に関する調査の内容と結果のまとめ | 41 |
| 第4章 | 短期縦断調査（プレ／ポスト型） | 78 |
| I. | 調査の目的 | 78 |
| II. | 調査の方法 | 78 |
| III. | 調査の結果 | 79 |
| IV. | 総括 | 91 |
| 第5章 | 文献調査 | |
| 「寄り添い型支援」に関する文献調査 | | 93 |
| 資料編 | | 96 |
| I. | 量的調査 調査票 | 97 |
| II. | 量的調査の結果 | 101 |
| III. | 聞き取り調査項目 | 120 |
| IV. | プレ／ポスト 調査票 | 127 |
| ※研究メンバーと執筆者 | | |
| 坂本純子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長） | 第1章 | 研究代表者 |
| 伊藤篤（甲南女子大学 教授） | 第2章 | |
| 鶴宏史（武庫川女子大学 准教授） | 第3章 | |
| 倉石哲也（武庫川女子大学 教授） | 第3章 | |
| 中條美奈子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事） | 第3章 | |
| 奥山千鶴子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長） | 第4章 | |
| 岡本聡子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事） | 第5章 | |

第1章 地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究の目的と概要

I. 本調査研究の目的と背景

子ども・子育て支援および少子化対策の一環として、平成20（2008）年度に厚生労働省によって創設された地域子育て支援拠点事業は、主に乳幼児を育てる親が子どもとともに利用できる身近な子育て支援施設を中心として地域の子育ち・子育て支援サービスを提供する取組として、その整備が進められてきた。

少子化社会対策大綱では、平成31（2019）年度までに全国8,000箇所の整備目標が掲げられており、平成29（2017）年度交付金ベースで全都道府県に7,259箇所に至っている。また、事業創設当初から実施要綱において、地域子育て支援拠点事業では、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、②子育て等に関する相談、援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施を「基本4事業」と位置づけて、利用する親子の主体性を尊重する支援が展開されてきている。

子育ての不安感や負担感、孤立感などがますます高まる中で、地域子育て支援拠点事業は、地域子ども・子育て支援事業の一つとしても位置づけられることとなり、子育て家庭にとって最も身近な地域における子育て支援の中核的機能を果たす取組として、その重要性が増しており、その役割の充実に大きな期待がかけられている。

本調査研究では、地域子育て支援拠点において重視されている「利用者が親として自らを変容させていく過程を見守り支える」という特性を「寄り添い型支援」と概念化し、これが、子育て中の親の不安感や負担感、孤立感をどのように軽減するのか、子育て中の親が本来持っている強み（力）をどのように育み、「親としての成長」を促すのかを明らかにすることで、地域子育て支援拠点事業の支援の質の向上に資する知見を得ることを目的とした。

II. 本調査の実施内容

1. 調査概要

本調査研究では、検討委員会を設置し、全国で地域子育て支援拠点事業を実施する504カ所の支援拠点の支援者（職員）とその利用者（親）を調査対象とし、以下のような手順によって実施された。

<調査手順>

- (1) 「寄り添い型支援」に関する先行研究調査
- (2) 地域子育て支援拠点における「親としての成長」と「寄り添い型支援」の仮説的定義の導出
- (3) 量的調査の支援者・利用者、それぞれの対象への調査内容と質問項目の検討と決定、調査の実施、結果のとりまとめ
- (4) 聞き取り調査の支援者・利用者、それぞれの対象への調査内容と質問項目の検討と決定、調査員のための説明会の開催、調査の実施、結果のとりまとめ
- (5) 並行して、プレ／ポスト調査を実施
- (6) 量的調査と聞き取り調査、プレ／ポスト調査の結果の分析、検討
- (7) 考察

<調査対象>

全国の地域子育て支援拠点事業 504 箇所の支援者（職員）1～2 名とその利用者（親）10～20 名を対象とした。なお、量的調査において郵送調査の対象とした拠点は 53 箇所、インターネット調査の対象とした拠点は 451 箇所であった。聞き取り調査とプレ／ポスト調査は、郵送調査の対象とした 53 箇所から協力を得られた 25 箇所を対象とした。

<抽出方法>

調査対象の 504 箇所は、前年（平成 29 年）度子ども・子育て支援推進調査研究事業「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」において、全国の地域子育て支援拠点 6,446 箇所の中からランダム抽出した 1,210 箇所のうち、有効回答を寄せた 548 箇所の中から、基本 4 事業の質的向上に「取り組んでいる」または「積極的に取り組んでいる」と回答した拠点を抽出した。また、前年度調査において「質的向上を図る実践事例」を提供し、報告書に掲載された 53 拠点を、郵送による量的調査と聞き取り調査、プレ／ポスト調査の主な対象とした。

<調査方法>

- ①量的調査（対象：支援者・利用者）：郵送とインターネットによるアンケート調査
- ②聞き取り調査（対象：支援者・利用者）：調査員が支援拠点に訪問して実施
- ③プレ／ポスト調査（対象：5 拠点の支援者・利用者）：
 - A. ①と同様の量的調査を、郵送で 2 回実施
 - B. ②と同様の聞き取り調査を、1 回訪問実施

<回収結果>

- | | | |
|-----------|-----------|---------------------------------|
| ①量的調査 | 支援者 | 259 票（インターネット調査 185、郵送調査 74） |
| | 利用者 | 1,322 票（インターネット調査 691、郵送調査 631） |
| ②聞き取り調査 | 支援者 | 20 人 |
| | 利用者 | 20 人 |
| ③プレ／ポスト調査 | A. 量的調査 | 支援者 5 票 |
| | | 利用者 45 票（うち有効回答 41 票） |
| | B. 聞き取り調査 | 支援者 5 人 |
| | | 利用者 4 人 |

<調査期間>

- | | | |
|-----------|-----------------------------|---------------------------------|
| ①量的調査 | 平成 30 年 10 月 1 日～10 月 31 日 | |
| ②聞き取り調査 | 平成 30 年 10 月 15 日～10 月 30 日 | |
| ③プレ／ポスト調査 | A. 量的調査 | 1 回目：平成 30 年 10 月 1 日～10 月 13 日 |
| | | 2 回目：平成 31 年 1 月 4 日～1 月 19 日 |
| | B. 聞き取り調査 | 平成 31 年 1 月 20 日～1 月 31 日 |

Ⅲ. 本調査の結果の概要

1. 地域子育て支援拠点における「親の成長」と「寄り添い型支援」の定義

本調査研究に取り組むにあたり、「地域子育て支援拠点における『親としての成長』と『寄り添い型支援』」を仮説的に定義するため、検討委員会において知見を持ち寄り討議し、下記の仮説的定義を導き出した。

・地域子育て支援拠点における「親としての成長」

親が、日々の子育てや子育てで生じた葛藤や困難に向き合う中で、自らのこれまでの経験を活かしつつ、力添えを受け入れたり、必要に応じて他者に頼るなど、子育てに関する自己決定の経験を通して、わが子への感受性や応答性を高めること。また、こうした経験を通して、わが子以外の子どもへの存在に気づき、共に養育に関わろうと認識し、行動しようとするプロセス。

・地域子育て支援拠点における「寄り添い型支援」

地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者が、共に相互にエンパワメントし合う活動。

なお、検討に際して、比較的新しい「寄り添い型支援」という表現について、近年においてその概念を定義または示唆する研究がなされていないかの先行研究の論文調査を、鶴と岡本が文献検索システム CiNii などをを用いて行った。

2008年のリーマン・ショック以降の生活困難者支援で「寄り添い型支援」という表現は盛んに使用されていたが、その概念や定義を主題として取り上げた論文は見当たらなかった。「寄り添い型支援」に近似的な表現として「伴走型支援」が先行して使用されていたことが調査によって捉えられたことから、「寄り添い型支援」に「伴走型支援」を加えて検索した論文を、「寄り添い型支援」の仮説的定義に検討の際に参考とした。（詳細は第5章 文献調査に掲載）

2. 量的調査の結果

本調査の詳細は、第2章で詳しく述べる。本章では結果の概要のみを記載する

(1) 調査の概要

①調査項目

支援者と利用者（保護者）への調査票の質問項目の作成にあたり、「地域子育て支援拠点における『親としての成長』と『寄り添い型支援』」の仮説的定義を踏まえた。

支援者対象の調査の質問項目数は34とした。9項目のフェイスシートに続き、主に支援者がどのように支援を展開しているのか（寄り添い型支援が展開されているのかも合わせて）を問う25項目を設定した。

利用者対象の調査の質問項目数は33とした。8項目のフェイスシートに続き、利用する拠点の支援者の対応や拠点の雰囲気などをどのように評価しているかを尋ねる質問を8項目設定した。さらに、拠点利用によって自身や子ども何を得られたか・どのように変化したかを尋ねる質問を17項目設定した。

※調査票は、巻末の資料ページに掲載。

②回収結果

支援者 259票（インターネット調査185、郵送調査74）

利用者 1,322票（インターネット調査691、郵送調査631）

(2) 結果の概要

支援者と利用者を対象とした量的調査結果から、「寄り添い型支援」と「利用者の親としての成長」、および両者の関係性について分析した結果の概要は、次のとおりである。

※調査結果の単純集計は、巻末の資料ページに掲載。

①支援者の「寄り添い型支援」について

拠点の支援者による支援内容（実態）を4件法で尋ねた23項目に関する因子分析の結果から、支援者の行っている支援は、4つの側面（因子）から構成されることが示された。寄与率の高かった因子順に、因子名とそれを構成する項目内容を整理したもの（項目そのものではない）を以下に示す。

第1因子：対人援助技術の活用

「利用者との対等な関係」「利用者同士の支え合いや協力の促進」

「利用者の自信や他者への共感性を高める働きかけ」「利用者自身の経験を活かす支援」

「利用者の自己決定を尊重した支援」「子どもの最善の利益の尊重」

「子どもの他者信頼への配慮」「支援者自身の成長につながる支援活動」

第2因子：受容的・共感的姿勢

「受容と共感的態度」「利用者の家庭における子育ての実態の理解」

「日頃からいつでも相談を受け入れる態度」「利用者の孤立防止・不安感の軽減の重視」

「子どもの理解と親と共にその成長を見守る姿勢」

第3因子：知る・学ぶ機会の提供

「利用者を対象とした情報の提供や講習会の開催」 「地域連携の推進」

「利用者同士の語り合い促進」

第4因子：個別ケースの共有と対応

「ケース記録」 「ケース会議の重視」

第1因子に含まれる内容は幅広いものの、いわゆるソーシャルワークで重視されている姿勢や観点が含まれており、私たち研究メンバーが事前に定義した「寄り添い型支援」のうち「ピア及び支援者との相互作用の活用」「親と支援者が共に相互にエンパワメントし合う」に該当する。第2因子に含まれる内容は、まさに「寄り添い型支援」の定義のうち「受容の連鎖」に該当している。

一方、第3因子に含まれる内容は「知る・学ぶ機会の提供」と整理でき、従来から拠点で重視されている標準的な支援である。第4因子を構成する2項目は、利用者への直接的な対応・働きかけというよりも、拠点における相談・援助の管理・運営的側面が中心となっている。以上から、第3・4因子は「寄り添い型支援」を表したのものとは言えないと判断される。

これら4つの因子得点に基づいてクラスター分析をおこなった結果、第1因子および第2因子の因子得点平均値が正の値を示した群（クラスターII）に属する支援者は、支援者全体の約45%を占めていた。要因複合度指標から判断すると、これらの支援者は、4つの支援全体にわたって不十分な段階から、まずは個別ケースの共有・対応が可能となり、次に受容的・共感的な姿勢で支援できるようになり、最終的に「寄り添い型支援」の2因子を含めたすべての側面の支援が展開するようになるという過程をたどることが想定できる。

②利用者の「親としての成長」について

拠点の利用者の自身の変容、すなわち「親としての成長」に関して4件法で尋ねた17項目に関する因子分析の結果から、利用者の親としての成長は、3つの側面（因子）から構成されることが示された。寄与率の高かった因子順に、因子名とそれを構成する項目内容を整理したものを以下に示す。なお、利用者とは、子は第1子のみ、拠点以外の施設等を利用していない母親である。

第1因子：エンパワメント

「子育てを助けてくれる存在の認識」 「育児に関して自分なりの解決法や価値観がある」

「わが子への成長・発達への理解や関心・わが子への愛情」

「子育てでつらいのは自分だけではない」 「自分も他者も共に子育てを頑張っている」

第2因子：交流の広がり・深まり

「自身が育児仲間と知り合えた」 「育児仲間と日常的に会話するようになった」

「子どもに友人ができた」 「他者の子どもに働きかけるようになった」

「他の親子の力になりたいと思うようになった」

第3因子：自己有用・有能感

「自分の情報・経験は他者の役に立つ」 「面倒なことでも行おうと思う」

「自分の本当の気持ちを話せる」

第1因子には多様な要素が含まれているが、自分なりの育児に向かう積極的な姿勢や他の保護者とともに育児にかかわろうとする姿勢とが見られるので、それらを合わせて「エンパワメント」された状態だと判断した。「親としての成長」の定義のうち「力添えを受け入れる・必要に応じて他者に頼る」「自己決定の経験」「わが子への感受性や共感性を高める」「わが子以外の親と共に関わろうとする認識・行動」にあたる。

第2因子に含まれる内容は、「親としての成長」の定義の「わが子以外の子どもの存在に気づく」「他の親と共に養育にかかわろうとする認識・行動」に相当しているが、その契機は前者の3項目で代表される「親と子が互いに知り合いになる」という交流の広がりである。そして、後者の2項目は交流が深まった成果と判断できることから、この因子を「交流と広がり・深まり」と命名した。

第3因子は、他者の役に立つことであれば、自ら主体的に取り組もうとする姿勢であり、その背景には自らの経験・能力等が他者の役に立つという自信の表れであると判断し、この因子を「自己有用・有能感」があると判断した。「親としての成長」の定義との関連性で言えば、「自らのこれまでの経験を活かす」「自己決定の経験」「共に養育に関わろうとする認識・行動」にあたる。

③利用者の「寄り添い型支援」に対する認識と「親としての成長」との関連について

利用者による拠点や支援者に対する評価8項目の結果を利用して「寄り添い型支援」と「親としての成長」との関連性の分析を行った。

これら8項目（利用者調査における第9項目～第16項目）は、「職員（拠点の支援者）は、利用者をホスピタリティに満ちた態度で迎え入れ、普段から交流の場において利用者と親しく関わっており、利用者の気持ち・悩みを共感的に受け止めてくれるため、気軽に相談しやすく、子ども同士のトラブルにも配慮してくれ、子育ての解決法を押し付けられているというよりも子育てを支えられていると感じる」という内容を問う質問で構成されており、これら全体に対して肯定的に評価すればするほど、その利用者は自分が「寄り添い型支援」を受けていると感じていると判断できることから、これら8項目を単純加算した合計得点の平均値を算出し、低評価群と高評価群とに分け、それぞれの「親としての成長」に関する3つの因子得点を比較した。

その結果、いずれの因子得点も高評価群のほうが有意に低評価群よりも高いことが明らかとなり、「寄り添い型支援」を受けていると認識している利用者の方が、親としての自らの成長を「エンパワメント」「交流の広がり・深まり」「自己有用・有能感」という側面において明確に認識していると結論づけることができた。

3. 聞き取り調査の結果

本調査の詳細は、第3章で詳しく述べる。本章では結果の概要のみを記載する

(1) 調査の概要

①調査対象

平成 29 年度に「NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会」が厚生労働省より補助を受けて実施した「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」における 1 次調査（郵送調査）において「質の向上に取り組んでいる」と回答した 504 拠点の中で平成 29 年度調査報告書に事例として掲載された 54 拠点の中から、今回協力を得られた全国各地の 20 拠点（表 1-1）を対象に、支援者 1 名と利用者 1 名に対して、インタビューガイドに基づく半構造化された聞き取り調査を行った。

表 1-1 調査の対象とした 20 拠点の設置自治体とその人口

| 設置自治体 | | | 市区町人口 | 設置自治体 | | | 市区町人口 |
|-------|------|--------|---------|-------|-----|--------|---------|
| 1 | 北海道 | 札幌市豊平区 | 222,315 | 11 | 長野県 | 長野市 | 377,967 |
| 2 | 岩手県 | 盛岡市 | 293,676 | 12 | 長野県 | 上田市 | 158,111 |
| 3 | 埼玉県 | 新座市 | 165,342 | 13 | 岐阜県 | 大垣市 | 161,461 |
| 4 | 千葉県 | 松戸市 | 496,571 | 14 | 静岡県 | 静岡市葵区 | 250,041 |
| 5 | 東京都 | 武蔵野市 | 146,399 | 15 | 三重県 | 鳥羽市 | 18,784 |
| 6 | 神奈川県 | 横浜市港北区 | 345,913 | 16 | 大阪府 | 枚方市 | 402,466 |
| 7 | 神奈川県 | 大和市 | 235,816 | 17 | 大阪府 | 富田林市 | 111,837 |
| 8 | 新潟県 | 上越市 | 193,275 | 18 | 香川県 | 坂出市 | 51,517 |
| 9 | 石川県 | 加賀市 | 67,207 | 19 | 高知県 | 仁淀川町 | 5,366 |
| 10 | 福井県 | 福井市 | 264,326 | 20 | 福岡県 | 福岡市城南区 | 132,306 |

※各自治体 web サイト公表値（2019 年 1 月現在）

②調査項目

支援者と利用者（保護者）への調査票の質問項目の作成にあたり、「地域子育て支援拠点における『親の成長』と『寄り添い型支援』」の仮説的定義を踏まえた。

支援者を対象とする聞き取り調査では、拠点を利用し始めた利用者に対して、11 項目について利用者の考え方や行動に期待する変化と、その変化をもたらすために支援者が行った支援、利用者相互の関係を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援を具体的に質問した。次に、親への支援を通じた、支援者自らの変化についても質問し、自身の変化が拠点での支援にどのように活かされているのかについても質問した。支援者自身が「親としての成長」をどのようなものと捉えているのか、またそのために自身が考える地域子育て支援拠点の支援の望ましいあり方についても質問した。

利用者を対象とする聞き取り調査では、拠点を利用し始めてからの自身の考え方や行動の変化について11項目で質問し、こうした変化が拠点の利用に関係があるかを具体的に聞き取った。次に、拠点を利用し始めてから、自分の役割（親、妻、地域の一人、職業人など）に関して考え方や行動が変化したかと、拠点利用との関係性を具体的に質問した。

※聞き取り調査の項目は、巻末の資料ページに掲載。

③分析方法

聞き取り調査で得た内容から「寄り添い型支援」と「親としての成長」に該当する文書セグメントを抽出し、支援内容ごとに意味の類似性に基づき表札を付帯し、KJ法により、小項目・中項目・大項目にわたる3段階の分類作業を行い、表札間の関係性を考察し、図解化した。

(2) 結果の概要

支援者と利用者を対象とした質的調査から、「寄り添い型支援」と利用者の「親としての成長」、および両者の関係性について分析した結果は、次のとおりである。

①地域子育て支援拠点の支援者が考える「寄り添い型支援」と「親としての成長」との関係

質的調査の分析の結果、地域子育て支援拠点の支援者が考える「寄り添い型支援」とは、大きく4つの支援で構成されており、それぞれの支援は下記のような内容を含んでいた。

「寄り添い型支援」を構成する4つの支援

1. 拠点という場の力を使って行った支援

- 場の雰囲気の重視
- 安心できる雰囲気の醸成・環境設定
- 交流を促す雰囲気の醸成・環境設定
- 支え合い、育ち合う場や機会の提供
- 気づきを促し、強みを発揮できる場の提供・環境設定

2. 支援者と利用者との相互作用を活用した支援

- 主体性を尊重した実践
- 安心感を与える関わり
- わが子理解の促進
- 身近な相談相手
- 日常会話の活用
- 受容的・共感的な関与
- 状況や心情を踏まえた関わり
- 力を引き出す関わり
- 地域とのつながりの創出
- 力の獲得

3. 利用者相互の関係性を用いて行う支援

- 他の利用者を巻き込んだ歓迎
- つながり合いの促進
- 気づき合い・学び合いの促進
- 経験活用の促進
- キーとなる利用者の見極め
- 主体的な交流の支援
- 交流の見守り

4. その他の支援(寄り添い型支援を支える活動)

- 支援者間での共通理解
- 地域支援ネットワークの形成

地域子育て支援拠点における「寄り添い型支援」とは、「地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者がともに相互にエンパワメントし合う活動」と定義され、利用者の「親としての成長」を、次ページの図1-1のような構造と展開で促していることが捉えられた。

「寄り添い型支援」の構造と展開

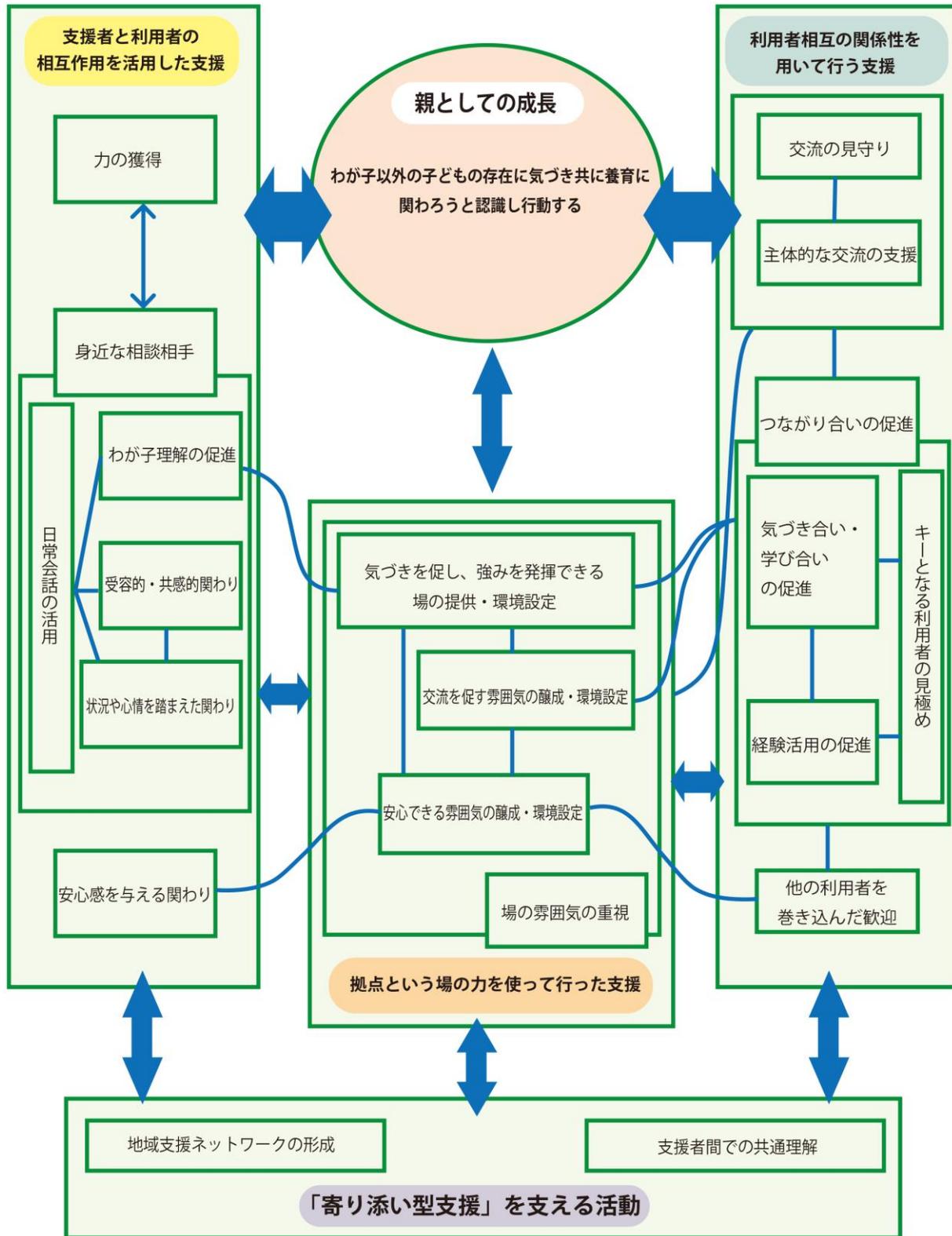


図 1-1 「寄り添い型支援」の構造と展開

②地域子育て支援拠点の利用者が『親として成長』する意味

「親としての成長」に関する質問項目に対する回答、という形式で聞き取り調査した利用者の声によって導き出され生成された概念は、次の 13 のカテゴリーに分類された。

「親としての成長」概念を構成する 13 のカテゴリー

1. 安全基地と安全な避難場所の獲得
2. 親の愛着対象の認識と獲得
3. セルフケアの意識
4. 養育力の獲得
5. 他者に頼る力
6. 子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得
7. 経験を活かした自己実現への意識の高まり
8. 肯定的な養育イメージの獲得
9. 親世代との関係の見直し
10. 将来展望の獲得
11. 配偶者との関係の見直し
12. 職業観の獲得
13. 他者への貢献意識の獲得

拠点利用開始当初の親の気持ち（不安を含む）と行動、拠点を積極的に利用するようになった親の気持ちや行動を想像しながら全体を見ると、独立している 13 のカテゴリーは一連の繋がりと捉えられ、次ページ（図 1-2）のような「親としての成長」の概念図によって示すことができた。

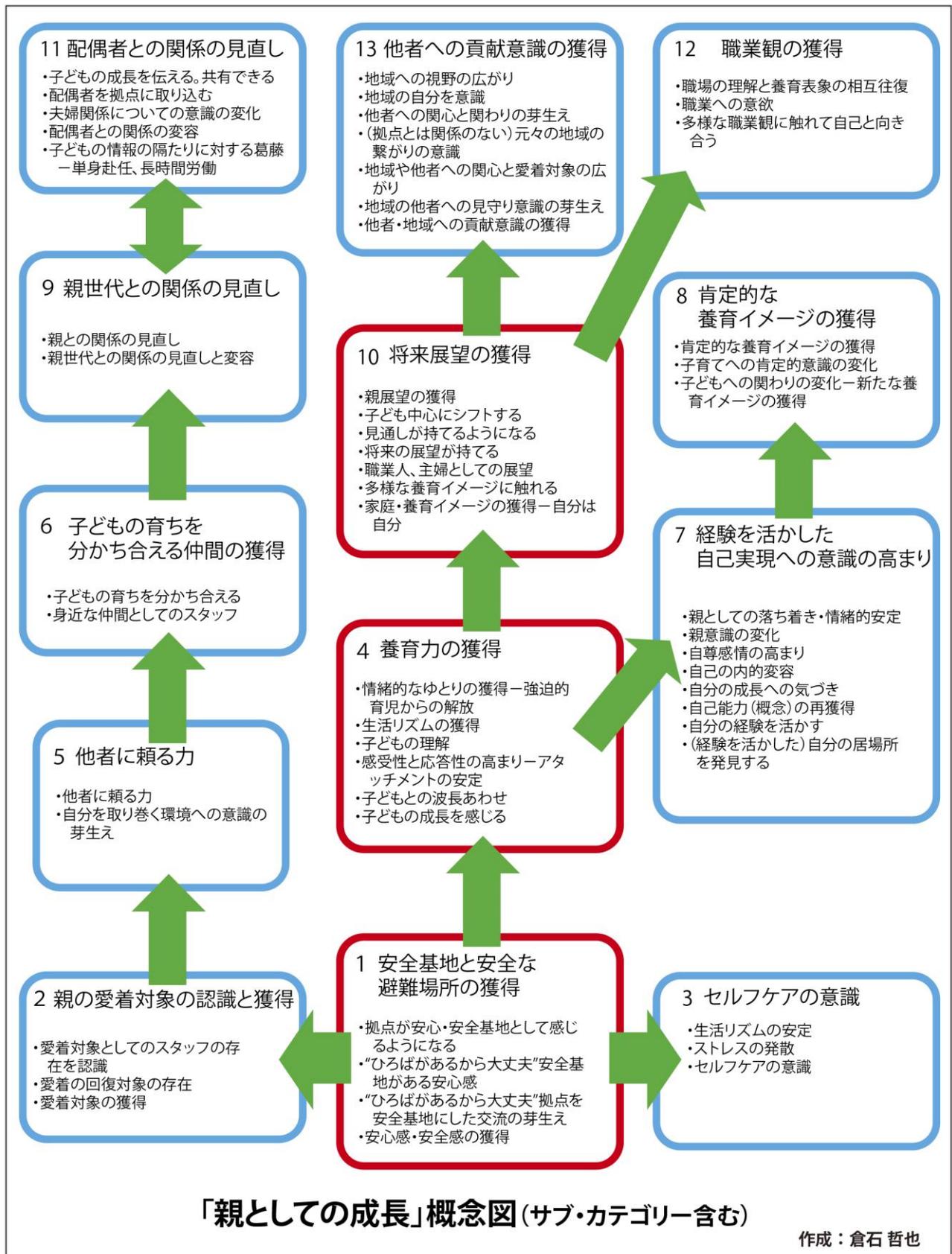


図 1-2 「親としての成長」概念図

地域子育て支援拠点における「親としての成長」プロセスは、次のように進展すると捉えられる。「親としての成長」の概念を、「安全基地と安全な避難場所の獲得」「養育力の獲得」そして「将来展望の獲得」の‘3つの獲得’によって次のように進展すると考えられる。

親の拠点の利用は「安全基地・安全な避難場所」と感じるところから開始される。

子どもを連れてのはじめての利用は緊張や不安を伴うが、職員や他の先輩利用者に受け入れられる体験が、自身の親や配偶者以外の「愛着対象の獲得」に繋がり、本人の欲している居場所感覚と合致することによって、その後の利用継続に繋がっていく。利用継続で得られる心地よい感覚は「セルフケア」につながり、親自身を快適な状態へと導いていく。「安全基地と安全な避難場所の獲得」は、「愛着対象の獲得」および「セルフケア」と連鎖しながら、職員や先輩利用者との交流を活性化させる。

「養育力の獲得」は、「安全基地と安全な避難場所の獲得」意識が職員らとの交流で活性化されることで、導かれる。

拠点利用が規則的になり、生活にリズムが生まれたと語る利用者は多い。午前中に拠点を利用することで、あるいは拠点を利用する日はそれを前提に朝から準備が整う（【生活リズムの獲得】）。拠点で先輩利用者の話を聞きながら、あるいは子どもへの関わりをモデルにしながら、育児書どおりの子育てをしなくてもよいのだと気持ちが楽になるといった【情緒的なゆとりー強迫的育児からの解放】が為される。交流を通じて得る解放感によって、子どもの遊びの様子や他の親子の様子を一步離れた場所から見ることができる【子どもの理解】の視点が確保され、子どもの立場で思いや欲求を想像することができるようになり、子どもとの関係で【感受性と応答性の高まりーアタッチメントの安定】と【波長あわせ】を経験的に獲得できるようになる。この「養育力の獲得」は、愛着対象の獲得によって人に支えられる感覚を会得した親が、自分を取り巻く環境に意識を向け始めて【頼る力】を得ることによって高められる。

「将来展望の獲得」は「養育力の獲得」によって導かれる。

【親展望の獲得】は子どもと過ごすことに専念しようという思いの強さであったり、子育てを楽しんでいるので仕事量を減らして子育て優先の生活スタイルを選んでいるという【子ども中心にシフトする】意識と繋がっている。と同時に自分らしい家族像について考えられるようになったと【家庭・養育イメージの獲得】が促されている。また【多様な養育イメージに触れる】ことで、新たな資格や役割の獲得意識が高まり、外に働きに行く選択肢を考えるようになったり、ゆとりを持って働くことが出来るのではないかと思えるようになるなど【職業人、主婦としての展望】や【見通しが持てるようになる】に至る。将来展望は、「子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得」「親世代との関係の見直し」「配偶者との関係の見直し」といった親を取り巻く人間関係の変容やそれへの意識が下支えになっていることも利用者の語りから推測される。やがて利用者のなかには「地域への貢献意識」に至る場合があるが、ここには拠点の職員やボランティアの働きがモデルになっていることが、語りから推測できる。

「親としての成長」を構成する「安全基地と安全な避難場所の獲得」「養育力の獲得」「将来展望の獲得」を実現しているのが「寄り添い型支援」である。「寄り添い型支援」は「養育力の獲得」や「将来展望の獲得」と密接に関連しながら「親としての成長」に寄与している。

IV. プレ／ポスト調査の結果

本調査の詳細は、第4章で詳しく述べる。本章では結果の概要のみを記載する

(1) 調査の概要

平成29年度に「NPO法人子育てひろば全国連絡協議会」が厚生労働省より補助を受けて実施した「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」における1次調査（郵送調査）において「質の向上に取り組んでいる」と回答した504拠点の中で平成29年度調査報告書に事例として掲載された54拠点の中から、今回協力を得られた全国各地の5拠点（表4-1）を対象に、量的調査と聞き取り調査を行った。

量的調査については、支援者1名と拠点を利用して3か月未満の利用者約10名を対象にプレアンケート調査を行い、その約3か月後に同じ利用者を対象にポストアンケート調査を行った。調査対象はプレ／ポストアンケート両方がそろったものだけを分析対象とした。聞き取り調査については、量的調査に協力いただいた各拠点の支援者1名と利用者1名に対して、インタビューガイドに基づく半構造化されたヒアリングを行った。調査項目と手順は、基本的には全国調査（本報告書第2・3章）に準じた。

※調査項目は、巻末の資料ページに掲載。

表1-2 調査の対象とした5拠点の設置自治体とその人口

| 設置自治体 | | | 市区町人口 |
|-------|------|----------|---------|
| 1 | 宮城県 | 仙台市泉区 | 213,844 |
| 2 | 神奈川県 | 横浜市戸塚区 | 280,365 |
| 3 | 富山県 | 氷見市 | 47,535 |
| 4 | 岡山県 | 倉敷市 | 482,541 |
| 5 | 福岡県 | 北九州市小倉南区 | 210,050 |

※各自治体 web サイト公表値（2019年1月現在）

(2) 結果の概要

全国の5拠点における拠点初期利用者が、短期間の利用（3か月）によってどのように変化するかを中心に、拠点スタッフの「寄り添い型支援」と利用者の「親としての成長」について、支援者と利用者を対象とした質問紙調査、聞き取り調査から得られた結果は以下の通りである。

①初期利用者の「親としての成長」について

量的調査では、全体調査と概ね同様の結果が得られ、拠点に対する評価は全体的に高く、拠点の利用頻度により親としての成長の側面に特徴があることがわかった。利用頻度が高い利用者群は、親としての成長の3つの側面のうち、第3因子「自己有用・有能感」が、より高まっていることがわかった。

質的調査からは、拠点を利用して6か月程度の初期利用者についても親の成長のプロセスが進化している状況がある程度把握できる結果であったが、利用者同士の交流の深まりや子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得などの深まりについては、利用頻度が増すなど一定の時間がかかるものと推察された。

②利用者の「寄り添い型支援」に対する認識と「親としての成長」との関連について

量的調査においては、拠点の評価の高評価群の方が、低評価群に比べて、「親としての成長」に関する3つの因子得点がすべて有意に高いことが明らかになった。つまり、寄り添い型支援を受けていると意識している利用者の方が親としての自らの成長を明確に意識できているという可能性が導きだされた。

聞き取り調査においては、支援者は、親子の現状を見極め、親の成長のプロセスに応じて必要な支援や環境を整えている様子が把握された。

V. 総合考察

本事業で取り組んだ量的調査・聞き取り調査・プレ／ポスト調査の3つの調査から、地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割についての考察を述べる。

地域子育て支援拠点における「寄り添い型支援」は、支援者を対象とした量的調査の分析から、次の4つの側面で構成されていることが示され、

1. 対人援助技術の活用
2. 受容的・共感的姿勢
3. 知る・学ぶ機会の提供
4. 個別ケースの共有と対応

そのうち「1.対人援助技術の活用」と「2.受容的・共感的姿勢」は、寄り添い型支援を特徴づける重要な側面であった。前者にはソーシャルワークで重視されている姿勢や観点が数多く含まれており、後者はピア及び支援者との間の受容の連鎖を作り出す役割を担っていた。

さらに分析を進めることで、支援者が「寄り添い型支援」を習熟していく過程も浮かび上がってきた。4つの支援が全体的に不十分な状態から、まず個別ケースの共有・対応が可能となり、次に受容的・共感的姿勢を獲得し、最終的に4つの支援が総体として展開されていくと考えられることから、地域子育て支援拠点の「寄り添い型支援」の向上を図る上で、意識すべき点として指摘しておきたい。

聞き取り調査では、「寄り添い型支援」に関する436の文書セグメントから、以下の4つの支援が分類され、量的調査では捉えきれなかった「地域子育て支援拠点という場の力」が見出された。

1. 拠点という場の力を使って行った支援
2. 支援者と利用者の相互作用を活用した支援
3. 利用者相互の関係性を用いて行う支援
4. その他の支援（寄り添い型支援を支える活動）

以上から「寄り添い型支援」を仮説的に定義した「地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者がともに相互にエンパワメントし合う活動」を、量的調査と聞き取り調査の双方の結果が補完し合いながら明示することができた。

次に、地域子育て支援拠点における「親としての成長」について、利用者を対象とした量的調査の分析結果からは、「エンパワメント」と「交流の広がり・深まり」そして「自己有用・有能感」の3つの側面が大きく示され、聞き取り調査からは、13の下記の категорияが一連のつながりとして捉えられた。

1. 安全基地と安全な避難場所の獲得
2. 親の愛着対象の認識と獲得
3. セルフケアの意識
4. 養育力の獲得
5. 他者に頼る力
6. 子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得
7. 経験を活かした自己実現への意識の高まり
8. 肯定的な養育イメージの獲得

9. 親世代との関係の見直し
10. 将来展望の獲得
11. 配偶者との関係の見直し
12. 職業観の獲得
13. 他者への貢献意識の獲得

量的調査と聞き取り調査からは、親としての成長を仮説的に定義した「親が、日々の子育てや子育てで生じた葛藤や困難に向き合う中で、自らのこれまでの経験を活かしつつ、力添えを受け入れたり、必要に応じて他者に頼るなど、子育てに関する自己決定の経験を通して、わが子への感受性や応答性を高めること。また、こうした経験を通して、わが子以外の子どもの存在に気づき、共に養育に関わろうと認識し、行動しようとするプロセス」という内容を含みながら、地域子育て支援拠点が、利用者である親に与える成長は、親役割だけにとどまらない、人間的成長までをももたらすことを示している。加えて、プレ／ポスト調査の結果から、利用者が「寄り添い型支援」を受けていると意識しているほど、自らの親としての成長を実感しているという可能性も導き出された。

地域子育て支援拠点において「利用者が親として自らを変容させていく過程を見守り支える」という特性を「寄り添い型支援」として高め、子育て中の親が本来持っている強み（力）を育み、「親としての成長」を促すための枠組みが、本調査研究によって明らかになった。

今後はこれらの結果を、地域子育て支援の実践の場と共有しながら、支援の質の向上に活用していく具体的な方策を検討し、開発、実践することが期待される。

第2章 量的調査（質問紙調査）

I. 調査の目的

本調査研究は、すでに述べたように、地域子育て支援拠点の利用者（母親）が、拠点スタッフの「寄り添い型支援」によって、「親としての成長」を遂げていくのかを明らかにすることを目的としたものである。ここでは、その目的のために実施した「質問紙調査」および「聞き取り調査」のうち、前者によって得られた結果を提示し、それを考察する。質問紙調査の実施に先立って、拠点スタッフの「寄り添い型支援」とは何なのか、利用者の「親としての成長」とは何なのかを仮説的に導出することとした。それらは、委員会メンバー間の議論を通して、以下のように定義づけられた。

・寄り添い型支援

地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者が、共に相互にエンパワメントし合う活動。

・親としての成長

親が、日々の子育てや、子育てで生じた葛藤や困難に向き合う中で、自らのこれまでの経験を活かしつつ、力添えを受け入れたり、必要に応じて他者に頼るなど、子育てに関する自己決定の経験を通して、わが子への感受性や応答性を高めること、また、こうした経験を通して、わが子以外の子どもの存在に気づき、共に養育に関わろうと認識し、行動しようとするプロセス。

II. 調査の方法

1. 調査対象と調査手続き

平成29年度に「NPO法人子育てひろば全国連絡協議会」が厚生労働省より補助を受けて全国の地域子育て支援拠点 6,446 拠点を対象に、1,210 カ所をランダムに抽出して実施した「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」における1次調査（郵送調査）において有効回数を寄せた 548 拠点のうち、「質的向上に取り組んでいる」と回答した 504 拠点を今回の調査対象とした。調査対象者は、これらの拠点に勤務するスタッフ（支援者）とこれらの拠点を利用している保護者であった。

調査は、「郵送調査」と「インターネット調査」という2つの形態で実施した。上記調査（平成29年度）における事例収集を目的とした2次調査において協力を依頼し回答を得ることのできた 53 拠点に関しては郵送調査を、残りの 451 拠点に関してはインターネット調査を採用した。郵送調査の実施期間は2018年10月1日～同年10月25日、インターネット調査の実施期間は2018年10月1日～同年10月31日であった。

いずれの形態においても、調査対象とした全拠点に対し、「調査依頼書」を送付した。支援者については1拠点あたり2名程度を目安に、保護者については1拠点あたり10名～20名程度を目安に、回答の協力を求めた。郵送調査の場合は、支援者用質問紙2セット、保護者用質問紙20セットを同封した。インターネット調査の場合は、依頼書に支援者用質問フォームにアクセスできるQRコード、保護者用質問フォームにアクセスできるQRコードが印刷されていた。このコードをスマートフォンで読み取って回答ができるよう設定した。

2. 調査内容

(1) 支援者対象の調査項目

支援者対象の調査において設定された質問項目数は34であった。フェイスシートには9項目を設定した。それらは順に、拠点名、拠点の所在地と連絡先、拠点の運営主体、拠点の運営場所、1日当たりの拠点従事者数、1日当たりの拠点利用親子の組数、1週あたりの回答者（以下、支援者とする）の勤務日数、1日あたりの支援者の勤務時間数、当該拠点における支援者の勤務期間であった。最初の2項目は直接の記入を求める形式、第3項目～第9項目までは複数の選択肢から1つを選択する形式であった。さらに、主に支援者がどのように支援を展開しているのか（寄り添い型支援が展開されているのかどうかも含めて）を問う25項目（第10項目から第34項目までの25の質問）を設定した。これらについては、リッカート法（4件法：「あてはまる」を1、「だいたいあてはまる」を2、「あまりあてはまらない」を3、「あてはまらない」を4とコード化）により、回答者に4つの選択肢から1つを選択するよう求めた。

支援者対象の具体的な質問内容については、本報告書末の「資料」を参照されたい。

(2) 利用者対象の調査項目

利用者（保護者）の調査において設定された質問項目数は33であった。フェイスシートには8項目を設定した。それらは順に、拠点に連れてくる子どもとの回答者の続柄（選択肢あり）、子ども（育てているすべての子ども）の年齢・月齢と拠点外に利用している施設（直接記入）、現在一緒に拠点を利用している子どもは何番目か（選択肢あり）、利用開始から回答時点までの拠点利用期間（選択肢あり）、1か月あたりの拠点利用頻度（選択肢あり）、回答者の年齢（選択肢あり）、回答者の就労状況（選択肢あり）、育児を日常的に手伝ってくれる人（選択肢あり）を尋ねる質問であった。

次に、拠点支援者の対応や拠点の雰囲気などを利用者がどのように評価しているかを尋ねる質問を8項目（第9項目～第16項目）設定した。これらについては、「拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖を作ることを通して、親と支援者が、共に相互にエンパワメントし合う」という「寄り添い型支援」の定義に基づいて、拠点の支援者が「多様な利用者を受け入れ、利用者間の交流を促し、利用者の悩みなどに共感しつつも対等な関係を維持し（解決法などを押し付けたりせず）、自分たちを支えてくれている」と利用者が感じられているかどうかを尋ねる質問とした。

さらに、拠点利用によって自身や子どもが何を得られたか・どのように変化したかを尋ねる質問を17項目（第17項目～第33項目）設定した。これらについては、「日々の子育てや、子育てで生じた葛藤や困難に向き合う中で、自らのこれまでの経験を活かしつつ、力添えを受け入れたり、必要に応じて他者に頼るなど、子育てに関する自己決定の経験を通して、わが子への感受性や応答性を高めること、また、こうした経験を通して、わが子以外の子どもの存在に気づき、共に養育に関わろうと認識し、行動しようとする」という「親としての成長」の定義に対応するような質問項目（例えば、子育てを助けてくれる人がいると思えるようになった、困ったことがあっても解決できると思えるようになった、わが子なりの成長に気づき個性や可能性を感じるようになった、他の子をあやしたり抱いたりするようになったなど）を準備した。

上記の第9項目～第33項目については、リッカート法（4件法：「あてはまる」を1、「だいたいあてはまる」を2、「あまりあてはまらない」を3、「あてはまらない」を4とコード化）により、回答者に4つの選択肢から1つを選択するよう求めた。

利用者対象の具体的な質問内容については、本報告書末の「資料」を参照されたい。

Ⅲ. 調査の結果

1. 支援者対象の調査結果

(1) 分析対象数について

郵送調査およびウェブ調査によって得られた支援者からの回答数は 259 (郵送調査 74 [28.6%] ウェブ調査 186 [71.4%]) であった。それらの中に不適切な回答内容を含むものは見られなかったため、これらすべてを分析対象とした。なお、フェイスシートのうち、第 1 項目・第 2 項目の回答から、同じ拠点から複数のスタッフ (支援者) が回答している場合—拠点の重複を避けるために—、第 3 項目～第 6 項目の分析に当たっては、いずれか 1 名の回答を選んで分析対象 (n=172) とした。

(2) フェイスシートについて

まず、第 3 項目「拠点の運営主体」に関する集計結果を表 2-1 に示す。NPO 法人、社会福祉法人、自治体による運営が多く、全体の 83.7%を占めている。

表 2-1 運営主体の集計結果

| 運営主体 | 度数 | 比率 |
|---------|-----|-------|
| NPO 法人 | 61 | 35.6 |
| 社会福祉法人 | 45 | 27.9 |
| 自治体(直営) | 35 | 20.2 |
| 社会福祉協議会 | 4 | 2.3 |
| 学校法人 | 4 | 2.3 |
| 株式会社 | 4 | 2.3 |
| 任意団体 | 4 | 2.3 |
| その他 | 12 | 7.0 |
| 合計 | 172 | 100.0 |

次に、第 4 項目「拠点の実施場所」に関する集計結果を表 2-2 に示す。公共施設・公民館、保育所が比較的多いものの、多様な場所で拠点事業が展開されていることが窺える。なお、幼児期の子どもが通う施設である幼稚園では、本調査から見る限りは、全国的に拠点事業はほとんど実施されていないと推測される。

運営主体と運営場所との関連性に特徴が見られるかどうかを確認するために、これら 2 変数間の度数分布をクロス集計した結果を、表 2-1 において度数が上位 3 つ (20%以上) の運営主体に絞って見てみる。NPO 法人が運営している 61 拠点のうち、32.6%を占めているのが公共施設・公民館 (20 拠点)、19.7%を占めているのが空き店舗・商業施設 (12 拠点)、14.8%を占めているのが単独施設と民家・マンション (いずれも 9 拠点) であった。社会福祉法人が運営している 48 拠点のうち、47.8%を占めていたのが保育所 (23 拠点)、14.6%を占めていたのが認定こども園 (7 拠点) であった。自治体が運営している 35 拠点のうち、34.2%を占めているのが公共施設・公民館 (12 拠点)、17.1%を占めているのが単独施設 (6 拠点)、14.3%を占めているのが保育所 (5 拠点) であった。このクロス集計結果から、NPO 法人は多様な場所で拠点事業を展開しているのに対し、社会福祉法人は保育所や認定こども園にかなり集中しており、自らの法人施設を活用して

いると思われる。自治体については、約 65%が公民館などの公共施設、単独施設、保育所で拠点事業を展開していることが明らかとなった。

表 2-2 運営場所の集計結果（フェイスシート）

| 運営主体 | 度数 | 比率 |
|-----------|-----|-------|
| 公共施設・公民館 | 42 | 24.5 |
| 保育所 | 32 | 16.6 |
| 空き店舗・商業施設 | 26 | 15.1 |
| 単独施設 | 21 | 12.2 |
| 民家・マンション等 | 15 | 8.7 |
| 児童館 | 14 | 8.1 |
| 認定こども園 | 9 | 5.2 |
| 幼稚園 | 0 | 0.0 |
| その他 | 12 | 7.0 |
| 無回答 | 1 | 0.6 |
| 合計 | 172 | 100.0 |

第 6 項目「拠点の 1 日当たりの利用親子の組数」の度数分布は、5 組未満が 13 拠点（7.6%）、5 組以上 10 組未満が 36 拠点（20.9%）、10 組以上 20 組未満が 62 拠点（36.0%）、20 組以上 50 組未満が 39 拠点（22.7%）、50 組以上が 21 拠点（12.2%）、無回答が 1 拠点（0.6%）であった。拠点によって利用する親子の組数は広く分布していることが看取できる。

拠点スタッフの従業状況については、第 5 項目で「1 日当たりの従業者数」を尋ねている。その度数分布は、3～4 人が 67 拠点（39.0%）、2 人が 57 拠点（33.1%）、5～9 人が 31 拠点（18.0%）、10 人以上が 11 拠点（6.4%）、1 人が 6 拠点（3.5%）であった。2 名～4 名程度のスタッフを擁する拠点が全体の 72.5%を占めている。

ここまでは、各拠点の状況を明らかにするための質問に対する回答の集計結果であったが、ここからは回答者（n=259）の従業状況に関する結果（1 週当たりの勤務日数、1 日当たりの勤務時間、当該拠点での勤務期間）を整理・分析する。「勤務日数（1 週当）」については、5 日が 133 人（51.3%）、3 日以下が 73 人（28.2%）、4 日が 39 人（15.1%）、6 日が 14 人（5.4%）であった。「勤務時間（1 日当）」については、6 時間以上 8 時間未満が 144 人（55.6%）、3 時間以上 6 時間未満が 67 人（25.9%）、8 時間以上が 41 人（15.8%）、3 時間未満が 6 名（2.3%）、無回答が 1 人（0.4%）であった。

勤務日数（1 週当）と勤務時間（1 日当）との関連性に特徴が見られるかどうかを確認するために、この 2 変数間をクロスさせた度数分布の結果を表 2-3 に示す。この表の中で各変数の組み合わせにおいて最も度数が高い箇所に網掛けを付してあるが、ここから、1 週間当たりの勤務日数が少ないスタッフは 1 日当たりの勤務時間が短く、1 週間当たりの勤務日数が多いスタッフは 1 日当たりの勤務時間が長いという傾向が窺える。中には毎日 6 時間以上で週 6 日勤務のスタッフが 13 名いることも分かる。

表 2-3 「勤務日数 (1 週当)」と「勤務時間 (1 日当)」との度数クロス表

| | | 勤務日数 | | | | |
|------|---------------|-------|-----|-----|-----|-----|
| | | 3 日未満 | 4 日 | 5 日 | 6 日 | 計 |
| 勤務時間 | 3 時間未満 | 5 | 1 | 0 | 0 | 6 |
| | 3 時間以上 6 時間未満 | 33 | 18 | 15 | 1 | 67 |
| | 6 時間以上 8 時間未満 | 29 | 20 | 91 | 4 | 144 |
| | 8 時間以上 | 5 | 0 | 27 | 9 | 91 |
| | 計 | 72 | 39 | 133 | 14 | 258 |

* 「勤務時間」において無回答が 1 あるので、度数の総計は 258 となる。

「勤務期間」については、表 2-4 に示す通りである。この表を見ると、度数分布が特定の期間に偏っておらず、回答者の中には、拠点における勤務経験の短いスタッフから長いスタッフまで幅広く含まれていると判断することができる。あえて指摘するのであれば、経験が 2 年未満のスタッフと 7 年以上のスタッフの比率がやや多くなっている。

表 2-4 支援者 (回答者) の勤務期間に関する集計結果 (フェイスシート)

| 運営主体 | 度数 | 比率 |
|--------------|-----|-------|
| 1 年未満 | 36 | 13.9 |
| 1 年以上 2 年未満 | 38 | 14.7 |
| 2 年以上 3 年未満 | 17 | 6.6 |
| 3 年以上 4 年未満 | 19 | 7.3 |
| 4 年以上 5 年未満 | 29 | 11.2 |
| 5 年以上 6 年未満 | 23 | 8.9 |
| 6 年以上 7 年未満 | 15 | 5.8 |
| 7 年以上 10 年未満 | 33 | 12.7 |
| 10 年以上 | 49 | 18.9 |
| 合計 | 259 | 100.0 |

では、勤務期間と勤務日数 (1 週当) との関係性はどのようになっているであろうか。これら 2 変数の関連性を見るために、勤務期間を 4 グループに編成しなおして、勤務日数とのクロス分析をおこなった。その結果は、表 2-5 に示す通りである。この表において、各変数の各グループ (選択肢) の度数 (人数) のうち 20% 以上を占めるセルに網掛けを付してみると、10 年未満の 3 つのグループでは、「3 日未満」と「5 日」という 2 つの層に分かれていることが窺える。これに対して、10 年以上のグループでは、5 日勤務のスタッフが比較的多くなっている。ここから、勤務期間が長くなると拠点の運営に責任を持つスタッフが増える傾向にあり、その結果として、週当たりの勤務日数も多くならざるを得ないが、勤務経験が 10 年未満のスタッフの場合は、自分の生活状況等に応じて週当たりの日数を調整できていると考えられる。

表 2-5 「勤務期間」と「勤務日数 (1 週当)」との度数クロス表

| | | 勤務日数 | | | | |
|------------------|--------------|-------|-----|-----|-----|-----|
| | | 3 日未満 | 4 日 | 5 日 | 6 日 | 計 |
| 勤 務 期 間 | 2 年未満 | 23 | 8 | 40 | 3 | 74 |
| | 2 年以上 5 年未満 | 18 | 13 | 31 | 3 | 66 |
| | 5 年以上 10 年未満 | 26 | 7 | 37 | 1 | 71 |
| | 10 年以上 | 6 | 11 | 25 | 7 | 49 |
| | 計 | 73 | 39 | 133 | 14 | 259 |

以上から、この調査に協力した支援者の特徴は、以下のようにまとめることができる。すなわち、回答者の大半は、NPO 法人、社会福祉法人、自治体（直営）のいずれかが運営する拠点、そして、1 日当たり 2 名～4 名の体制で利用者にサービスを提供している拠点の支援者であり、勤務期間は 1 年未満から 10 年以上まで広く分布している。また、1 日当たりの勤務時間が短い場合は 1 週あたりの勤務日数が少なく、1 日当たりの勤務時間が長い場合は 1 週あたりの勤務日数が多いという傾向が全体的には見られるものの、勤務経験が 10 年以上のスタッフ—勤務日数が多く勤務時間が長い—を除いては、キャリア（勤務期間）の長短にかかわらず、自らの生活設計に合わせて勤務日数と勤務時間を決めていると思われる。

(3) 支援内容(実態)について

①基礎集計

拠点スタッフが展開する支援の実態（寄り添い型支援も含めて）を明らかにするために設定した25項目それぞれに関する度数分布および選択肢（コード化した数値）を反転させた得点によって算出した平均値・標準偏差を表2-6に示す。なお、表中「度数分布」のうち、1は「あてはまる」、2は「だいたいあてはまる」、3は「あまりあてはまらない」、4は「あてはまらない」である。

まず、地域子育て支援拠点事業の補助金交付条件となっている、いわゆる「基本4事業」に相当する質問に対する回答結果（項目番号は、10、17、23、24）を見てみたい。10の「親子の交流による支え合いの促進」は、すべての支援者が肯定的に回答をしている。17の「育児に関する相談を通じた援助」と23の「育児に関する情報収集・提供」についても、ほぼすべての支援者が肯定的に回答をしている。しかしながら、24の「月1回以上の育児に関する講座または育児支援に関する講座の開催」については、22.4%にあたる支援者が否定的な回答をしている。「講座」がどのような内容を備えているべきかに関する理解が回答者のあいだで異なっている可能性も違あるが、毎月の講座開催が負担になっている拠点がある可能性を、この結果は示唆していると考えられる。

その他の項目については、そのほとんどで肯定的な回答が得られている。しかし、項目番号11、22、27、31、34については、10名以上が否定的に回答している。11の「地域連携を図る活動」については約10%（26名）の支援者が、22の「利用者同士が特定の課題に関して話し合う機会を設ける」については約8%（21名）の支援者が、27の「利用者の経験を活かして親としての成長を支える」については約6%（15名）の支援者がおこなっていないことが分かる。さらに、31や34のように、「利用者（保護者）が連帯して互いの子育てを支援し合う」という関係性への支援をおこなっていない支援者も約4%（10名）いることが分かる。

表 2-6 拠点における支援者の支援実態に関する集計結果（第 10 項目～第 34 項目）

| 項目番号 | 項目 | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | 平均値 (標準偏差) |
|------|---|---------------|-------------|------------|-----------|---------------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| 10 | 親子の交流を通して親同士、子ども同士の支え合い等を促している | 212 81.9 | 47 18.1 | 0 0.0 | 0 0.0 | 3.8 (0.39) |
| 11 | 地域の連携を図るなどの活動に取り組んでいる | 143 55.3 | 90 34.7 | 21 9.1 | 5 1.9 | 3.4 (0.73) |
| 12 | 性別、出身地等にかかわらずすべての親子の支援を対象としている | 224 86.5 | 33 12.7 | 2 0.8 | 0 0.0 | 3.9 (0.37) |
| 13 | 親子の孤立を防ぎ、不安感を軽減するように働きかける | 216 83.4 | 42 16.2 | 1 0.4 | 0 0.0 | 3.9 (0.39) |
| 14 | 利用者全体の動きを把握し、利用者同士が繋がれるように心掛けている | 198 76.4 | 60 23.2 | 1 0.4 | 0 0.0 | 3.8 (0.44) |
| 15 | 個別の相談に応じたケースの記録等を残し、支援の検証や改善に繋げている | 192 74.1 | 59 22.8 | 8 3.1 | 0 0.0 | 3.7 (0.52) |
| 16 | 定期的にミーティングやケース会議を持ち、利用者の共通理解に努めている | 195 75.3 | 58 22.4 | 5 1.9 | 1 0.4 | 3.7 (0.51) |
| 17 | 子育て等に関する相談や援助を行っている | 225 86.8 | 31 12.0 | 3 1.2 | 0 0.0 | 3.9 (0.38) |
| 18 | 日頃から利用者に関わり、相談に応じられるように声をかけている | 227 87.6 | 30 11.6 | 1 0.4 | 1 0.4 | 3.9 (0.39) |
| 19 | 利用者との会話等を通して、家庭での子育て・生活背景の理解に努めている | 200 77.2 | 57 22.0 | 1 0.4 | 1 0.4 | 3.8 (0.46) |
| 20 | 相談の際は相づち等に配慮し、受容と共感的な態度で接している | 227 87.6 | 31 12.0 | 0 0.0 | 1 0.4 | 3.9 (0.37) |
| 21 | 子どもの個性や発達を理解し、親とともに成長を見守っている | 232 89.5 | 25 9.7 | 2 0.8 | 0 0.0 | 3.9 (0.35) |
| 22 | 利用者同士が同じ課題について語り合う機会を意識的に設けている | 134 51.7 | 104 40.2 | 19 7.3 | 2 0.8 | 3.4 (0.66) |
| 23 | 子育てに関する情報を広く収集し、利用者に提供している | 171 66.0 | 85 32.8 | 3 1.2 | 0 0.0 | 3.6 (0.50) |
| 24 | 子育てや子育て支援に関する講習等を月1回以上実施している | 159 61.4 | 42 16.2 | 41 15.8 | 17 6.6 | 3.3 (0.97) |
| 25 | 子ども一人ひとりの最善の利益を尊重している | 179 69.1 | 74 28.6 | 4 1.5 | 0 0.0 | 3.7 (0.50) |
| 26 | 親が子どもに向き合うゆとりや子育てに自信を持てるように支援している | 171 66.0 | 82 31.7 | 6 2.3 | 0 0.0 | 3.6 (0.53) |
| 27 | 利用者の経験等を活かしつつ、親として成長できるように支援している | 137 52.9 | 106 40.9 | 14 5.4 | 1 0.4 | 3.5 (0.62) |
| 28 | 利用者の悩みを理解し、その解決法などを共に考え、最終的には本人の自己決定を尊重している | 196 75.6 | 60 23.2 | 2 0.8 | 1 0.4 | 3.7 (0.48) |
| 29 | 多様な関係性の中で子どもが他者への信頼感を高められるよう支援している | 158 61.0 | 93 35.9 | 8 3.1 | 0 0.0 | 3.6 (0.55) |
| 30 | 利用者がいつでも手助けを求められるよう、対等な関係を築いている | 193 74.5 | 65 25.1 | 1 0.4 | 0 0.0 | 3.7 (0.45) |
| 31 | 利用者が他の子どもに気づき、他の親とともに育児をする姿勢を促している | 170 65.6 | 79 30.5 | 10 3.9 | 0 0.0 | 3.6 (0.56) |
| 32 | 親への支援を通し、支援者が自らの成長を感じ、それを支援に生かしている | 163 63.0 | 90 34.7 | 5 1.9 | 1 0.4 | 3.6 (0.55) |
| 33 | 利用者同士が同じ地域で支え合って子育てをしていくことを視野に入れて支援している | 173 66.8 | 79 30.5 | 7 2.7 | 0 0.0 | 3.6 (0.53) |
| 34 | 他の子の成長をわが子のように共感性を持って接していくよう支援している | 153 59.0 | 96 37.1 | 10 3.9 | 0 0.0 | 3.6 (0.57) |

* 各項目の合計は 259 である。第 27 項目についてのみ、無回答が 1 あるので、度数の合計は 258 となる。

②支援内容の構造

これら支援内容 23 項目に対する支援者の回答が、「地域子育て支援拠点における支援者による支援実態」としてどのような側面で構成されているのかを明らかにするために、回答者全体（欠損値のあった者を除く 257 名分）のデータを対象に因子分析をおこなった。調査実施に先立って定義づけた「寄り添い型支援」以外の支援内容も質問項目として設定したため、事前に因子構造（支援の側面）を明確に予測してはいない。したがって、この分析では、探索的な手法である「主因子法・プロマックス回転」を採用した。

固有値 1 以上を基準として因子数を見ると、拠点の支援者による支援内容は 4 つの因子で構成されると判断された(表 2-7)。これら 4 つの因子が全体に対して占める寄与率(分散)は、第 1 因子から順に、35.9%、7.5%、5.8%、4.7%であり、累積寄与率は 53.9%となった。表 2-7 を見ると、残余項目は 3 つであり、残りの 22 項目は、第 1 因子から順に、10 項目、6 項目、4 項目、2 項目で構成されている。各因子の内的整合性を示すクロンバックの α 係数を算出すると、第 1 因子から順に、0.90、0.84、0.63、0.62 となった。各因子に含まれる項目内容から、それぞれの特徴を示す因子名を協議した結果、第 1 因子を「対人援助技術の活用」、第 2 因子を「受容的・共感的姿勢」、第 3 因子を「知る・学ぶ機会の提供」、第 4 因子を「個別ケースの共有と対応」と命名した。

この因子分析で得られた因子ごとに算出された因子得点に基づいて、クラスター分析（非階層的方法、t-平均法）をおこなった結果、5 つのクラスターが得られた。これは、本調査の協力者である支援者(n=257)を対象に、各自の支援内容（4 因子）に関して類似した特徴を持つ者どうしを群化した結果、拠点の支援者が 5 つのグループ（クラスター）に分かれたことを意味する。この分析結果を表 2-8 に示す。

表 2-7 拠点における支援者の支援実態に関する因子分析結果（第 10 項目～第 34 項目）

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 |
|------------------------------------|--------|--------|--------|--------|
| 29.子どもが他者への信頼感を高められるように支援している | 0.833 | -0.060 | 0.027 | -0.107 |
| 30.利用者がいつでも手助けを求められるよう、対等な関係を築いている | 0.731 | -0.066 | -0.174 | 0.149 |
| 25.子ども一人ひとりの最善の利益を尊重している | 0.698 | -0.041 | -0.068 | 0.097 |
| 28.利用者の悩みを理解し、共に考え、本人の自己決定を尊重している | 0.634 | 0.399 | -0.233 | -0.041 |
| 34.他の子の成長を共感性をもって接していけるように支援している | 0.626 | 0.083 | 0.164 | -0.114 |
| 31.利用者が他の子どもに気づき、他の親とも協力する姿勢を促している | 0.611 | -0.078 | 0.208 | 0.078 |
| 33.利用者同士が支え合う子育てを視野に入れて支援している | 0.602 | 0.008 | 0.248 | -0.143 |
| 26.親が支えを得て子育てに自信を持てるよう支援している | 0.544 | 0.075 | 0.151 | 0.071 |
| 32.親への支援を通し、支援者が自らの成長を感じられるようにしている | 0.535 | -0.157 | 0.149 | 0.160 |
| 27.利用者の経験等を活かしつつ成長できるよう支援している | 0.492 | 0.122 | 0.093 | 0.027 |
| 20.相談の際は相づち等に配慮し、受容と共感的な態度で接している | -0.021 | 0.823 | -0.105 | -0.016 |
| 19.利用者との会話等を通して、家庭での子育ての理解に努めている | -0.027 | 0.720 | 0.049 | -0.036 |
| 18.日頃から利用者に関わり、相談に応じられるよう声をかけている | -0.086 | 0.682 | 0.032 | 0.003 |
| 21.子どもの個性や発達を理解し、親とともに成長を見守っている | 0.163 | 0.653 | -0.075 | 0.015 |
| 17.子育て等に関する相談や援助を行っている | -0.137 | 0.607 | 0.170 | 0.209 |
| 13.親子の孤立を防ぎ、不安感を軽減するように働きかけている | 0.158 | 0.435 | 0.094 | 0.088 |
| 22.利用者同士が同じ課題について語り合う機会を意識的に設けている | -0.034 | 0.104 | 0.697 | -0.097 |
| 23.子育てに関する情報を幅広く収集し、利用者提供している | -0.022 | 0.086 | 0.655 | 0.004 |
| 11.地域の連携を図るなどの活動に取り組んでいる | -0.083 | -0.201 | 0.526 | 0.248 |
| 24.子育てや子育て支援に関する講習等を月1回以上実施している | 0.077 | -0.105 | 0.517 | -0.070 |
| 15.個別の相談に応じたケースの記録等、検証や改善に繋げている | 0.017 | 0.064 | 0.047 | 0.782 |
| 16.定期的にミーティングやケース会議を持つ | 0.205 | 0.090 | -0.161 | 0.425 |
| 10.親子の交流を通して親同士、子ども同士の支え合い等を促している | 0.103 | 0.126 | 0.392 | -0.114 |
| 12.性別、出身地等にかかわらずすべての親子の支援を対象としている | 0.272 | 0.124 | -0.082 | 0.059 |
| 14.利用者全体の動きを把握し、利用者同士が繋がれるよう心掛けている | 0.121 | 0.170 | 0.330 | 0.142 |

表 2-8 4 因子の因子得点に基づく支援者のクラスター分析結果

| クラスター 人数 規模(%) | 因子得点平均値 | | | | 要因複合度 |
|----------------------|---------|--------|--------|--------|-------|
| | 第 1 因子 | 第 2 因子 | 第 3 因子 | 第 4 因子 | |
| クラスター I 27 10.5 | -1.13 | -0.66 | -0.64 | 0.41 | 1.85 |
| クラスター II 116 45.1 | 0.77 | 0.53 | 0.72 | 0.43 | 3.88 |
| クラスター III 40 15.6 | -0.35 | -0.15 | -0.64 | -1.28 | 2.05 |
| クラスター IV 20 7.8 | -1.93 | -2.36 | -1.33 | -1.69 | 0.90 |
| クラスター V 54 21.0 | -0.12 | 0.15 | -0.15 | 0.49 | 1.56 |

クラスター I は、第 4 因子がポジティブな値を示しており、「個別ケースの共有と対応」に積極的にコミットしている（他の支援に対しては消極的な）支援者のグループである。クラスター II は、全因子がポジティブな値を示しており、総合的にどの支援に関しても積極的なグループであり、支援者全体の 45.1% を占めている。クラスター III とクラスター IV は、全因子がネガティブな値を示しており、どの支援についても消極的であるが、この平均値の大きさから見ると、第 1 因子（対人援助技術の活用）と第 2 因子（受容的・共感的姿勢）に関しては、クラスター III の支援者はクラスター IV の支援者に比べて、消極的な度合いが低いことが窺える。クラスター V は、第 2 因子（受容的・共感的姿勢）と第 4 因子（個別ケースの共有と対応）に関して積極的なグループである。

表中の要因複合度（本章末の【注】参照のこと）の数値の低い順からクラスターを並べると、IV→V→I→III→II となる。これは、分析の際に時系列的に群化が成立する順序を示したものであり、支援内容の時系列に沿った変容過程（拠点での経験が長くなるにつれて支援者のおこなう支援内容がどのように変化していくのか）を近似的に示すものと推測できる。こうした前提に基づくと、拠点においては、当初は 4 つの支援がいずれも不十分な段階から、個別的な対応ができるようになり、次に受容的・共感的な姿勢で支援が展開できるようになり、最終的に 4 つの種類を総合的におこなうことが可能になると考えられる。因子の項目内容からすると、第 1 因子と第 2 因子とが「寄り添い型支援」を代表していると判断できるので、こうした総合的な支援が可能となっている支援者は、協力者全体の約半数ということになる。

そこで、この結論の妥当性を別の指標によって検討するために、5 つのクラスターと勤務期間とのクロス集計をおこなってみたところ、表 2-9 に示すような結果が得られた。ここから、必ずしも勤務期間の長短が要因複合度で示される経過時間とは対応してはいないことが看取できる。むしろ、クラスター I～III の分布を見ると、10 年以上の支援者よりも 10 年未満の支援者が占める比率が高くなっている。すなわち、勤務経験が寄り添い型支援も含めた総合的な支援が可能となることを予測しないという結論になる。今後、どのような経験が、寄り添い型支援も含めた総合的な支援が展開できる資質を育むことにつながっているのか、その要因を追求することが、私たち検討委員会の今後の大きな課題である。

表 2-9 クラスターと勤務期間とのクロス集計結果

| | 2 年未満 | 2 年以上 5 年未満 | 5 年以上 10 年未満 | 10 年以上 | 計 |
|-----------|----------|-------------|--------------|----------|-----|
| クラスター I | 7(25.9) | 8(29.6) | 9(33.3) | 3(11.1) | 27 |
| クラスター II | 34(29.3) | 26(22.4) | 33(28.4) | 23(19.8) | 116 |
| クラスター III | 13(32.5) | 12(30.0) | 10(25.0) | 5(12.5) | 40 |
| クラスター IV | 6(30.0) | 6(30.0) | 4(20.0) | 4(20.0) | 20 |
| クラスター V | 13(24.1) | 13(24.1) | 15(27.8) | 13(24.1) | 54 |
| 計 | 73 | 65 | 71 | 48 | 257 |

* 表内の比率 (%) は、横の合計数を分母として算出したものである。

IV. 利用者対象の調査結果

(1) 分析対象数について

郵送調査およびインターネット調査によって得られた支援者からの回答数は、1,322(郵送調査 631〔47.7%〕インターネット調査 691〔52.3%〕)であった。それらの中に不適切な回答内容を含むものは見られなかったため、これらすべてを分析対象とした。

(2) フェイスシートについて

まず、第1項目「拠点と一緒に利用している子どもと回答者との関係」に関する集計結果を示す。母親が1,296人(97.9%)、父親が13人(1.0%)、祖母が9人(0.7%)、祖父が0人であり、その他および無回答が4人(0.4%)であった。ほとんどの回答者は母親であった。

次に、第2項目の「子どもの年齢・月齢、利用している施設など」に関する質問から導き出せる結果を整理していく。回答者は1,322名であったが、第1子～第5子に年齢等を記入する枠に回答しなかった者が25名いた。したがって、第2項目の有効回答者数は、1,297名である。これら回答者のうち、第1子のみの子の家庭の保護者は820名(63.2%)、第2子までいる家庭の保護者は395名(30.5%)、第3子までいる家庭の保護者は71名(5.5%)、第4子までいる家庭の保護者は10名(0.8%)、第5子までいる家庭の保護者は1名(0.08%)であった。第4子および第5子までいる家庭はごくわずかであるので、それらを除く第1子から第3子までの平均年齢を算出すると、順に3歳1か月(n=1,297)、2歳3か月(n=490)、2歳1か月(n=83)であった。これらの家庭のうちどの程度の子どもたちが、地域子育て支援拠点以外の幼児教育・保育施設等に通っているのだろうか。これについて、第1子～第3子に絞って集計した結果を表2-10に示す。なお、「拠点のみ利用」の場合と「第2子や第3子がない」場合(第1子の欄のみ記入)とが混在するため、無回答については集計結果に含めていない。第1子については、拠点以外に利用している施設等として「その他」が最も多く、幼稚園、保育所、認定こども園と続いている。この傾向は第2子についても(比率も含め)ほぼ同じであるが、第3子に関しては、保育所と幼稚園の順序が逆転しているのに加え、「その他」の比率が低く・保育所や認定こども園の比率が高くなっている。養育する子どもの数が増えると、長時間にわたって子どもをケアしてくれる保育施設の利用が増えることが窺われる。

表 2-10 地域子育て支援拠点以外の幼児教育・保育施設に通っている第1子～第3子の人数と比率

| | 第1子 | | 第2子 | | 第3子 | |
|--------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|
| | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 保育所 | 149 | 22.8 | 34 | 21.1 | 9 | 26.5 |
| 認定こども園 | 73 | 11.2 | 24 | 14.9 | 7 | 20.6 |
| 幼稚園 | 185 | 28.3 | 41 | 25.5 | 8 | 23.5 |
| その他 | 246 | 37.7 | 62 | 38.5 | 10 | 29.4 |
| 合計 | 653 | 100.0 | 161 | 100.0 | 34 | 100.0 |

第3項目「一緒に拠点を利用している子どもは何番目ですか」に関する結果は、第2項目と同様に、第4子・第5子の比率がそれぞれ全体の1.0%を下回る(無回答を含めても全体の1.1%)なので、第1子～第3子

に絞って示すことにする。第1子と一緒に利用している家庭は全体（n=1,322）の78.0%を占める1,031名であり、第2子と一緒に利用している家庭は全体の32.40%を占める428名であり、第3子と一緒に利用している家庭は全体の6.4%を占める84名であった。

第4項目「拠点を利用し始めてから調査時点までの期間」、第5項目「1か月当たりの拠点の利用頻度」に関する集計結果を表2-11と表2-12に示す。1年以上の利用者が50%を超えていること、週に1回から2回のペースで拠点を利用する者が60%を超えていることが分かる。

第6項目「回答者の年齢」に関しては、回答者の約98%で母親であることを反映した結果となった。すなわち、25歳未満は全体の1.3%（17名）に過ぎず、45歳以上も全体の1.9%（25名）に過ぎなかった。無回答3名（0.2%）を除く25歳以上45歳未満の回答者の分布は、25～29歳が217名（16.4%）、30～34歳が520名（39.3%）、35～39歳が374名（28.3%）、40～44歳が166名（12.6%）であった。

表2-11 拠点を利用し始めてから調査時点までの期間に関する集計結果

| | 人数 | 比率 |
|------------|-------|-------|
| 3か月未満 | 167 | 12.6 |
| 3か月以上6か月未満 | 187 | 14.1 |
| 6か月以上1年未満 | 285 | 21.6 |
| 1年以上2年未満 | 328 | 24.8 |
| 2年以上 | 355 | 26.4 |
| 合計 | 1,322 | 100.0 |

表2-12 1か月当たりの拠点利用頻度に関する集計結果

| | 人数 | 比率 |
|-----------|-------|-------|
| 4日未満 | 434 | 32.9 |
| 4日以上8日未満 | 385 | 29.1 |
| 8日以上12日未満 | 255 | 19.3 |
| 12日以上 | 244 | 18.5 |
| 無回答 | 3 | 0.2 |
| 合計 | 1,322 | 100.0 |

表2-13 利用者（回答者）の就労状況に関する集計結果（無回答者を除く）

| | フルタイム | パートタイム | その他 | — | 計 |
|--------|--------------|--------------|--------------|------------|----------------|
| 働いている | 90 43.5% | 85 41.1% | 32 15.5% | — | 207 100.0% |
| | 育児休業中 | 結婚を機に 退職 | 出産を機に 退職 | その他 | 計 |
| 働いていない | 289 28.0% | 237 23.0% | 427 41.4% | 78 7.6% | 1031 100.0% |

第7項目「回答者の就労状況」については、「現在、働いているかいないか」を尋ねたあと、働いている場合は「フルタイム」「パートタイム」「その他」の選択肢から1つを選び、働いていない場合は「育児休業中」「結婚を機に退職」「出産を機に退職」「その他」の選択肢から1つを選ぶよう求めた。以下、それぞれの集計結果を示す(表2-13)。拠点利用者のうち約17%は職場に出ており、約83%は職場に出ていない。そして、後者のうち28%が育児休業中である。育児休業中の利用者はやがては復職するので、いわゆる専業主婦であると考えられる利用者は742名(237+427+78)であり、回答者全体の59.9%(742÷1238)を占める。また、退職をしたタイミングを見ると、結婚よりも出産を機にしている回答者の方が多いことも窺える。

第8項目「子育てを手伝ってくれる人」に関しては、まず、そうした人が「いる」「いない」の回答を求めたあと、「いる」と答えた場合には、「その他」を含む10の選択肢から複数を選択できる形式の問いであった。「いない」とした場合は「非該当」として、集計結果を以下に示す。比率の分母は、「いる」と回答した1,003名である。配偶者904名(90.1%)、実母403名(40.2%)、義母204名(20.3%)、実父190名(18.9%)、義父104名(10.4%)、兄弟姉妹98名(9.8%)、祖父母35名(3.5%)、友人42名(4.2%)、その他16名(1.6%)、隣人15名(1.5%)、無回答1名(0.1%)、非該当(「いない」)319名であった。「非該当」すなわち、子育てを手伝ってくれる人のいない孤立的な利用者が全体の24.1%(319÷1,322)を占めていた。

以上から、本調査に協力した利用者の特徴を整理する。まず、回答者の圧倒的多数が母親(約98%)であること、回答者の年齢は30歳代で全体の約68%を占めていることを挙げられる。また、回答時に働いている人としていない人の比はおおむね4:6である。さらに、養育している子どもが第1子だけの回答者が820名・約60%、第2子まで含めると1,215名・93.7%となり、拠点利用者の中で子どもが3人以上の回答者は非常に少ないことに加え、第1子と一緒に拠点を利用している回答者は、全体の約8割を占めていた。そこで、以下の分析(拠点利用に対する評価、拠点利用による変容)においては、出来る限り回答者の属性を揃え、なおかつ信頼できる結果を得る(拠点以外の影響がないと思われる保護者を選び、さらに十分なサンプル数も確保する)という目的で、子どもは1人のみ(第1子のみ)であり、なおかつ他の保育・教育施設を併用していない保護者(n=542 内訳:母親530名、父親6名、祖母3名、その他・無回答3名)に焦点を絞って分析を進めた。

(3) 利用に対する評価・利用による変容について

①基礎集計

利用者(n=542)を対象にした調査項目のうち、第9項目から第16項目までは、利用している拠点を利用者がどのように評価しているのかを明らかにするために設定した質問である。設定した8項目それぞれに関する度数分布および選択肢(コード化した数値)を反転させた得点によって算出した平均値・標準偏差を表2-14に示す。なお、表中「度数分布」のうち、1は「あてはまる」、2は「だいたいあてはまる」、3は「あまりあてはまらない」、4は「あてはまらない」である。なお、質問紙では、第10項目、第13項目、第15項目がネガティブな表記(反転項目)にしたため、分析の際には、そのまま反転させずに集計している(以下の表2-14の中では、これらの質問をポジティブな表記に変えている)。

全体的に見ると、利用者の多くは拠点で経験している支援や拠点の支援者から受ける支援を肯定的に評価している。なかでも、項目番号 1「あいさつと笑顔で、親子を温かく迎え入れてくれる」は、90%以上の利用者が「あてはまる」と回答している。否定的に評価している者の比率（「3」と「4」を合わせた比率）が5%を超えている項目、あるいはそれらが20名を超えている項目を挙げると、10番、13番、14番、15番である。これらのうち3つの項目は、質問紙上でネガティブな表記であった項目であり、その影響が分布の傾向に若干の影響を与えた可能性がある。これに対して、15番は「子ども同士トラブルがあると利用しにくい」という記述になっていた項目である。トラブルになった相手とそれ以後に拠点で顔を合わせづらい気持ちになることは大いにありうることであり、「3」と「4」の比率が高くなることは頷ける。14番に関して、「子育ての悩みなどを気兼ねなく相談することは難しい」と判断する利用者が28名もいることは（比率はそれほど高くないものの）、地域子育て支援拠点としては望ましからぬ結果だと思われる。

表 2-14 拠点利用者の拠点に対する評価に関する集計結果（第9項目～第16項目）

| 項目番号 | 項目 | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | | 平均値 (標準偏差) |
|------|-------------------------------|---------------|-------------|-------------|------------|----------|---------------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 無回答 | |
| 9 | あいさつと笑顔で、親子を温かく迎え入れてくれる | 506 93.3 | 34 6.3 | 0 0.0 | 0 0.0 | 2 0.4 | 3.9 (0.24) |
| 10 | 職員はふだんから親子の交流の場におり、日常的に関わっている | 397 73.3 | 100 18.5 | 17 3.1 | 24 4.4 | 4 0.7 | 3.6 (0.75) |
| 11 | 多様な親子が利用できる雰囲気がある | 429 79.1 | 107 19.7 | 3 0.6 | 1 0.6 | 2 0.4 | 3.8 (0.44) |
| 12 | 職員は気持ちや悩みを受け止め、共感してくれる | 388 71.5 | 107 19.7 | 9 1.7 | 1 0.2 | 2 0.4 | 3.7 (0.51) |
| 13 | 解決方法を押し付けられている感じはない | 417 76.4 | 99 18.3 | 13 2.4 | 11 2.0 | 2 0.4 | 3.8 (0.44) |
| 14 | 子育ての悩みなどを気兼ねなく相談できる | 329 60.7 | 181 33.4 | 26 4.8 | 2 0.4 | 4 0.7 | 3.6 (0.61) |
| 15 | 子ども同士トラブルがなく利用しやすい | 147 27.1 | 202 37.3 | 133 24.5 | 57 10.5 | 3 0.6 | 2.8 (0.95) |
| 16 | 子育てを支えられていると感じる | 345 63.7 | 171 32.5 | 13 2.4 | 4 0.7 | 4 0.7 | 3.6 (0.58) |

第17項目から第33項目は、拠点を利用したことによって利用者自身がどのように変容したのか（子どもの変化も含む）を明らかにするために設定した質問である。設定した17項目それぞれに関する度数分布および選択肢（コード化した数値）を反転させた得点によって算出した平均値・標準偏差を表2-15に示す。なお、質問紙では、第23項目、第28項目、第31項目がネガティブな表記になっているため、分析の際、これらの項目については、そのまま反転させずに集計している（以下の表2-15の中では、これらの質問をポジティブな表記に変えている）。

表 2-15 拠点利用による利用者の自己変容にかかわる評価に関する集計結果（第 17 項目～第 33 項目）

| 項目 番号 | 項目 | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | | 無回答 | 平均値 (標準偏差) |
|----------|-------------------------------|---------------|-------------|-------------|------------|----------|---------------|---------------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | | | |
| 17 | 子どもの友だちが増えた | 251 46.3 | 144 26.6 | 101 18.6 | 43 7.9 | 3 0.6 | 3.1 (0.98) | |
| 18 | 子育てをしている親と知り合えた | 345 63.7 | 135 24.9 | 42 7.7 | 17 3.1 | 3 0.6 | 3.5 (0.77) | |
| 19 | 大人と日常的な会話をする機会が増えた | 333 61.4 | 154 28.4 | 46 8.5 | 6 1.1 | 3 0.6 | 3.5 (0.70) | |
| 20 | 他の親子の力になりたいと思うようになった | 151 27.9 | 219 40.3 | 140 25.8 | 29 5.4 | 3 0.6 | 2.9 (0.87) | |
| 21 | わが子なりの成長に気づき、個性や可能性を感じる | 390 71.9 | 141 26.0 | 8 1.5 | 0 0.0 | 3 0.6 | 3.7 (0.49) | |
| 22 | 困ったことがあっても解決できると思えるように | 240 44.3 | 237 43.7 | 58 10.7 | 4 0.7 | 3 0.6 | 3.3 (0.69) | |
| 23 | 自分の本当の気持ちを話せる | 102 18.8 | 244 45.0 | 133 24.5 | 57 10.5 | 3 0.6 | 2.8 (0.84) | |
| 24 | 手がかかっても、わが子が愛おしいと思えるようになった | 367 67.8 | 153 28.2 | 12 2.2 | 5 0.9 | 5 0.9 | 3.6 (0.58) | |
| 25 | 子育てでつらいのは、自分だけではないと思えるようになった | 391 72.1 | 125 22.1 | 15 2.8 | 6 1.1 | 5 0.9 | 3.7 (0.59) | |
| 26 | 子育てを助けてくれる人がいると思えるようになった | 302 55.7 | 188 34.7 | 40 7.4 | 7 1.3 | 5 0.9 | 3.5 (0.69) | |
| 27 | 子どもが親以外の大人とかわることができるようになった | 377 69.5 | 133 24.5 | 22 4.1 | 7 1.3 | 3 0.6 | 3.6 (0.63) | |
| 28 | 面倒なことでも行おうと思う | 78 14.4 | 201 37.1 | 197 36.3 | 60 11.1 | 6 1.1 | 2.6 (0.87) | |
| 29 | 子育て以外のことにも関心が広がった | 157 29.0 | 216 39.8 | 136 25.1 | 27 5.0 | 6 1.1 | 2.9 (0.86) | |
| 30 | 他の子をあやしたり、抱いたりするようになった | 201 73.1 | 215 39.7 | 91 16.8 | 31 5.7 | 4 0.7 | 3.1 (0.88) | |
| 31 | 自分の情報や経験は、他の人の役に立つ | 169 31.2 | 294 54.2 | 61 11.3 | 14 2.6 | 4 0.7 | 3.2 (0.71) | |
| 32 | まわりの人と子育ての価値観が違ってよいと思えるようになった | 273 50.3 | 229 42.3 | 27 5.0 | 8 1.5 | 5 0.9 | 3.4 (0.66) | |
| 33 | 他の人も子育てを頑張っていると思う | 490 90.4 | 44 8.1 | 4 0.7 | 1 0.2 | 3 0.6 | 3.9 (0.33) | |

まず、平均値が3点を下回っている項目は4つあり、それらは20番、23番、28番、29番である。23番と28番は質問紙上でネガティブな表記になっていた影響の可能性を否定できない。しかし、23「自分の本当の気持ちを話せる」に関しては、すなわち、どこまでプライバシーにかかわる内容や自己の内面にかかわる内容などを拠点のスタッフや友人などに開示する気持ちになるかに関しては、個人差が大きいと思われる。また、28「面倒なことでも行おうと思う」は、育児というそもそも大変に根気を要する営みをこなせる自信がついたのであれば、それ以外の面倒なことを行うことへのハードルは低くなっていくという意味合いで設定した項目であったが、回答者にこの意図が十分に伝わるようなワーディングになっていなかった可能性がある。これらに対して、20「他の親子の力になりたいと思うようになった」と29「子育て以外のことにも関心が広がった」は、ワーディングの問題はほとんどないと思われる。つまり、他者の力になれるほどの変化を実感していないか、「力になる・力になれない」といった親密な関係性を拠点では築けていない母親が一定数(30%程度)いること、また、拠点は子育て支援の場であるため子育て以外の事項に関心を広げにくいと思っている母親も一定数(30%程度)いることが明らかにされたと言えよう。

②利用者変容の構造

第17項目～第33項目によって尋ねた「地域子育て支援拠点の利用によってもたらされる利用者側の変容」が、どのような側面によって構成されているのかを明らかにするために、回答者全体（n=542）のデータを対象に因子分析をおこなった。どのような変容がもたらされるのかに関する因子構造（変容の側面）を事前に予測してはいなかったため、この分析では、探索的な手法である「主因子法・プロマックス回転」を採用した。

固有値1以上を基準として因子数を見ると、利用者の変容は3つの因子で構成されることが妥当であると判断した（表2-16）。これら3つの因子が全体に対して占める寄与率（分散）は、第1因子から順に、33.8%、9.4%、8.4%であり、累積寄与率は51.6%となった。表2-16を見ると、残余項目は1つであり、残りの16項目は、第1因子から順に、8項目、5項目、3項目で構成されている。各因子の内的整合性を示すクロンバックの α 係数を算出した結果、第1因子から順に、0.83、0.83、0.52となった。各因子に含まれる項目内容から、それぞれの特徴を示す因子名を協議した結果、第1因子を「エンパワメント」、第2因子を「交流の広がり・深まり」、第3因子を「自己有用・有能感」と命名した。

表2-16 拠点利用による利用者の変容に関する因子分析結果（第17項目～第33項目）

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 |
|-----------------------------|--------|--------|--------|
| 25.子育てでつらいのは、自分だけではないと思える | 0.814 | -0.049 | -0.109 |
| 24.手がかかっても、わが子が愛おしいと思える | 0.796 | -0.113 | -0.098 |
| 26.子育てを助けてくれる人がいると思える | 0.672 | 0.055 | -0.024 |
| 32.まわりの人と子育ての価値観が違ってもよいと思える | 0.576 | -0.057 | 0.033 |
| 33.他の人も子育てをがんばっていると思う | 0.494 | -0.111 | 0.104 |
| 22.困ったことがあっても解決できると思える | 0.494 | 0.239 | 0.128 |
| 21.わが子なりの成長に気づき、個性や可能性を感じる | 0.473 | 0.137 | 0.026 |
| 27.子どもが親以外の大人とかかわることができる | 0.447 | 0.180 | -0.008 |
| 18.子育てしている親と知り合えた | -0.130 | 0.901 | -0.048 |
| 17.子どもの友だちが増えた | -0.081 | 0.898 | -0.079 |
| 19.大人と日常的な会話をする機会が増えた | 0.018 | 0.720 | 0.005 |
| 20.他の親子の力になりたいと思うようになった。 | 0.158 | 0.541 | 0.074 |
| 30.他の子をあやしたり、抱いたりするようになった | 0.186 | 0.426 | 0.096 |
| 31.自分の情報や経験は、他の人の役に立つ | 0.044 | -0.034 | 0.579 |
| 28.面倒なことでも行おうと思う | -0.086 | 0.001 | 0.540 |
| 23.自分の本当の気持ちを話せる | -0.016 | -0.028 | 0.479 |
| 29.子育て以外のことにも関心が広がった | 0.359 | 0.205 | -0.004 |

③拠点に対する評価と拠点利用による変容との関連性

利用者調査では、利用者による拠点および拠点の支援者が「寄り添い型支援」をしてくれているかどうかに関する認識と、拠点利用によって利用者自身がどのように変容（成長）したかに関する認識を4件法で尋ねている。そこで、この両者の結果を関連づけることで、寄り添い型支援が拠点利用者のどのような成長を導く可能性があるのかを検討できることになる。そこで、第9項目から第16項目までの合成得点（各項目の素点を単純加算）の平均値を算出し、この値よりも各自の合成得点が高い利用者を「高評価群」とし、それがこの値よりも低い利用者を「低評価群」とした。そして、第17項目から第33項目までのデータから得られた3つの因子得点をこれら両群間で比較（対応のないt検定）した。その結果を表2-17に示す。

表2-17 拠点における寄り添い型支援に関する高評価群・低評価群別の3つの因子得点の比較

| 因子(名) | 群 | n | 平均値 | 標準偏差 | 統計量(t) | 自由度 | 有意差 |
|--------------------|-----|-----|-------|------|--------|-----|-------|
| 第1因子 エンパワメント | 高評価 | 324 | 0.29 | 0.79 | 9.29 | 370 | 0.000 |
| | 低評価 | 203 | -0.45 | 0.95 | | | |
| 第2因子 交流の広がり・深まり | 高評価 | 324 | 0.27 | 0.81 | 8.53 | 373 | 0.000 |
| | 低評価 | 203 | -0.43 | 0.97 | | | |
| 第3因子 自己有用・有能感 | 高評価 | 324 | 0.25 | 0.73 | 10.19 | 525 | 0.000 |
| | 低評価 | 203 | -0.40 | 0.69 | | | |

*第1因子、第2因子については分散の等質性が確認されたので「スチューデントのt検定」をおこなっているが、第3因子については等分散が担保されなかったため「ウェルチのt検定」をおこなっている。

表2-17から、拠点において寄り添い型支援を確かに受けていると評価している利用者は、そのように評価していない利用者比べて、自身がエンパワメントされたと感じ、交流の広がりや深まりを実感し、自分が以前よりも有用・有能になっていると認識していることが明らかにされた。

V. 総括

この章の最後に、本調査研究の目的であった「寄り添い型支援」と「利用者の親としての成長」、および両者の関係性に焦点を絞って、質問紙による量的分析を通して得られた主な結果を整理するとともに、今後の研究上の課題を提示する。

(1) 支援者の「寄り添い型支援」について

拠点の支援者による支援内容（実態）を4件法で尋ねた23項目に関する因子分析の結果から、支援者の行っている支援は、4つの側面から構成されることが示された。それらは、寄与率の高い順に、対人援助技術の活用（第1因子）、受容的・共感的姿勢（第2因子）、知る・学ぶ機会の提供（第3因子）、個別ケースと共有と対応（第4因子）であった。

第1因子は10項目で構成されており、そこに含まれる内容は幅広いものの、「利用者との対等な関係」「利用者同士の支え合いや協力の促進」「利用者の自信や他者への共感性を高める働きかけ」「利用者自身の経験を活かす支援」「利用者の自己決定を尊重した支援」「子どもの最善の利益の尊重」「子どもの他者信頼への配慮」「支援者自身の成長につながる支援活動」など、いわゆるソーシャルワークで重視されている姿勢や観点が数多く含まれている。それらの内容は、私たち委員会メンバーが事前に定義した「寄り添い型支援」のうち「ピア及び支援者との相互作用の活用」「親と支援者が共に相互にエンパワメントし合う」に該当する。

第2因子は6項目で構成されており、そこに含まれる内容は、「受容と共感的態度」「利用者の家庭における子育ての実態の理解」「日頃からいつでも相談を受け入れる態度」「利用者の孤立防止・不安感の軽減の重視」「子どもの理解と親と共にその成長を見守る姿勢」などとなっており、まさに「寄り添い型支援」の定義のうち「受容の連鎖」に該当する。

一方、第3因子を構成する4項目は、利用者を対象とした情報の提供や講習会の開催、地域連携の推進、利用者同士の語り合い促進であり、この因子は「知る・学ぶ機会の提供」という支援であると整理できる。また、この側面の支援は従来から拠点で重視されてきた標準的なものであると言えよう。第4因子を構成する2項目（ケース記録やケース会議の重視）は、相談・援助に対応する支援ではあるが、利用者への直接的な対応・働きかけというよりも、拠点における相談・援助の管理・運営的側面が中心となっている。以上から、これら2つの因子は「寄り添い型支援」を代表したのものとは言えないと判断される。

以上の前提のもと、これら4つの因子得点に基づいてクラスター分析をおこなった結果、第1因子および第2因子の因子得点平均値が正の値を示した群（クラスターII）に属する支援者—これらの支援者は、第3因子および第4因子の因子得点平均値も正の値であった—は、支援者全体の約45%を占めていた。要因複合度という指標から判断すると、これらの支援者は、4つの支援全体にわたって不十分な段階から始まり、まずは個別ケースの共有・対応が可能となり、次に受容的・共感的な姿勢で支援できるようになり、最終的に「寄り添い型支援」の2因子を含めたすべての側面の支援が展開できるようになるという過程を辿ると想定できた。しかしながら、実際に、クラスター別・拠点での勤務経験（勤務期間）別のクロス集計をおこなってみたところ、クラスターIIに属する支援者のうち10年以上の経験者が占める比率は最も低くなっており、必ずしも勤務期間が「寄り添い型支援」の予測因子ではないことが明らかにされた。ここから、どのような要因が「寄り添い型支援」を可能にするのかを追究することが、今後の大きな課題であると結論づけられた。

(2) 利用者の「親としての成長」について

拠点の利用者（第1子のみを育てており、拠点以外の施設等を利用していない保護者）の自身の変容、すなわち親としての成長に関して4件法で尋ねた17項目に関する因子分析の結果から、利用者の親としての成長は、3つの側面から構成されることが示された。それらは、寄与率の高い順に、エンパワメント（第1因子）、交流の広がり・深まり（第2因子）、自己有用・有能感（第3因子）であった。

第1因子は8項目で構成されており、そこに含まれる成長の内容は幅広い。それらを整理すれば、「子育てを助けてくれる存在の認識」「育児に関して自分なりの解決法や価値観がある」「わが子の成長・発達への理解や関心、わが子への愛情」「子育てでつらいのは自分だけではない」「自分も他者も共に子育てを頑張っている」などである。これらは、私たち委員会メンバーが事前に定義した「親としての成長」のうち「力添えを受け入れる・必要に応じて他者に頼る」「自己決定の経験」「わが子への感受性や共感性を高める」「わが子以外の親と共に養育に関わろうとする認識・行動」に該当している。多様な要素が含まれていて命名は難しいものの、自分なりの育児に向かう積極的な姿勢や他の保護者とともに育児にかかわろうとする姿勢とを合わせて「エンパワメント」された状態だと判断した。

第2因子は5項目で構成されており、そこに含まれる内容は、「自身が育児仲間と知り合えた」「育児仲間と日常的に会話するようになった」「子どもに友人ができた」「他者の子どもに働きかけるようになった」「他の親子の力になりたいと思うようになった」である。これらのうち最後の2つは、「親としての成長」に関する定義のうち「わが子以外の子どもの存在に気づく」「他の親と共に養育にかかわろうとする認識・行動」に相当しているが、その契機は前者の3項目で代表される「親と子が互いに知り合いになる」という交流の広がりである。そして、後者の2項目は交流が深まった成果であると判断できる。こうした理由から、この因子を「交流と広がり・深まり」と命名した。

第3因子は3項目で構成されており、そこに含まれる内容は、「自分の情報・経験は他者の役に立つ」「面倒なことでも行おうと思う」「自分の本当の気持ちを話せる」である。これらは、他者の役に立つことであれば、自ら主体的に取り組もうとする姿勢であり、その背景には自らの経験・能力等が他者の役に立つという自信の表れであると判断し、この因子を「自己有用・有能感」と判断した。「親としての成長」の事前定義との関連性で言えば、「自らのこれまでの経験を活かす」「自己決定の経験」「共に養育に関わろうとする認識・行動」となる。

(3) 利用者の「寄り添い型支援」に対する認識と「親としての成長」との関連について

支援者対象の因子分析およびクラスター分析によって、「寄り添い型支援」に相当する対人援助技術の活用を積極的に展開するとともに、受容的・共感的姿勢を持って支援にあたっている一群の支援者（クラスターIIの支援者116名）を同定することができた。そこで、この結果を生かして、こうした支援者が勤務する拠点を利用している母親とそれ以外の支援者が勤務する拠点を利用している母親における3つの因子得点（平均値）を比較することが、「寄り添い型支援」と「親としての成長」との関連性を明らかにするためのもっとも妥当な分析方針である。しかしながら、支援者のフェイスシートの項目と利用者のフェイスシートの項目の中に、両者の拠点どうしを対応づけることのできる問いを入れてはいなかった。

そこで、第2の策として、利用者による拠点や支援者に対する評価（利用者調査における第9項目～第16項目）の結果を利用して「寄り添い型支援」と「親としての成長」との関連性を分析することとした。これら8項目は、「職員（拠点の支援者）は、利用者をホスピタリティある態度で迎え入れ、普段から交流の場

にいてかかわっており、利用者の気持ち・悩みを共感的に受け止めてくれるため気軽に相談しやすく、子ども同士のトラブルにも配慮してくれ、子育ての解決法を押し付けられているというよりも子育てを支えられていると感じる」という内容を問う質問で構成されており、これら全体に対して肯定的に評価すればするほど、その利用者は自分が「寄り添い型支援」を受けていると感じていると判断できると考えた。

具体的には、これら8項目を単純加算した合成得点の平均値を算出し（平均値は28.7点）、合成得点がこの値より低い利用者（低評価群）とそれがこの値より高い利用者（高評価群）とに分け、それぞれの「親としての成長」に関する3つの因子得点を比較した。その結果、いずれの因子得点も高評価群の方が有意に低評価群よりも高いことが明らかとなり、寄り添い型支援を受けていると認識している利用者の方が親としての自らの成長を、少なくとも「エンパワメント」「交流の広がり・深まり」「自己有用・有能感」という側面において明確に認識していると結論づけることができた。

今後の課題としては、支援者の拠点と利用者の拠点が対応づけられるような調査設計上の工夫を、研究倫理上の議論と照らし合わせながらおこなっていくことである。

【注】 要因複合度とは、各クラスターと有意差が見られる因子の数である。この数が多いクラスターほど多くの要因の影響を受けていると言えるので、クラスターが形成されるまでの経過時間も長いと推察できる。

第3章 質的調査（聞き取り調査）

I. 調査の目的

本調査研究は、(すでに述べたように) 地域子育て支援拠点の利用者(母親)が、拠点スタッフの「寄り添い型支援」によって、「親としてどのような成長」を遂げていくのかを明らかにすることを目的としたものである。ここでは、この目的のために実施した「質問費調査」および「聞き取り調査」の結果のうち、後者を提示し考察していく。聞き取り調査の実施に先立って、拠点スタッフの「寄り添い型支援」とは何なのか、利用者の「親としての成長」とは何なのかを仮説的に導出することとし、メンバー間の議論を通して、それらは以下のように定義づけられた。

・寄り添い型支援

地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者が、共に相互にエンパワメントし合う活動

・親としての成長

親が、日々の子育てや、子育てで生じた葛藤や困難に向き合う中で、自らのこれまでの経験を活かしつつ、力添えを受け入れたり、必要に応じて他者に頼るなど、子育てに関する自己決定の経験を通して、わが子への感受性や応答性を高めること。また、こうした経験を通して、わが子以外の子どもの存在に気づき、共に養育に関わろうと認識し、行動しようとするプロセス。

II. 調査の方法(調査対象と調査手続き)

平成29年度に「NPO法人子育てひろば全国連絡協議会」が厚生労働省より補助を受けて実施した「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」における1次調査(郵送調査)において「質の向上に取り組んでいる」と回答した504拠点の中で平成29年度調査報告書に事例として掲載された54拠点の中から、今回協力を得られた20拠点とする。

13名の調査員が分担して拠点に出向き、各拠点につき支援者1名、利用者1名インタビューガイドに基づく半構造化されたヒアリングを行った。利用者については、ヒアリング当日に居合わせた利用者の中から協力の意志があった者を対象とした。ヒアリングの時間は30~60分程度で、ヒアリングはプライバシーの守られる場所で行い、研究協力者の了解のもとICレコーダーで録音した。

表 3-1 調査の対象とした 20 拠点の設置自治体とその人口

| 設置自治体 | | | 市区町人口 | 設置自治体 | | | 市区町人口 |
|-------|------|--------|---------|-------|-----|--------|---------|
| 1 | 北海道 | 札幌市豊平区 | 222,315 | 11 | 長野県 | 長野市 | 377,967 |
| 2 | 岩手県 | 盛岡市 | 293,676 | 12 | 長野県 | 上田市 | 158,111 |
| 3 | 埼玉県 | 新座市 | 165,342 | 13 | 岐阜県 | 大垣市 | 161,461 |
| 4 | 千葉県 | 松戸市 | 496,571 | 14 | 静岡県 | 静岡市葵区 | 250,041 |
| 5 | 東京都 | 武蔵野市 | 146,399 | 15 | 三重県 | 鳥羽市 | 18,784 |
| 6 | 神奈川県 | 横浜市港北区 | 345,913 | 16 | 大阪府 | 枚方市 | 402,466 |
| 7 | 神奈川県 | 大和市 | 235,816 | 17 | 大阪府 | 富田林市 | 111,837 |
| 8 | 新潟県 | 上越市 | 193,275 | 18 | 香川県 | 坂出市 | 51,517 |
| 9 | 石川県 | 加賀市 | 67,207 | 19 | 高知県 | 仁淀川町 | 5,366 |
| 10 | 福井県 | 福井市 | 264,326 | 20 | 福岡県 | 福岡市城南区 | 132,306 |

※各自治体 web サイト公表値（2019 年 1 月現在）

Ⅲ. 拠点における「寄り添い型支援」と「親としての成長」に関する調査の内容と結果のまとめ

1. 「寄り添い型支援」について

(1) 支援者対象の調査項目

研究協力者が自らの言葉で自由に話せるように、話の流れを遮らないように配慮しつつ、以下の質問を行った。

A 拠点を利用し始めた利用者に対し、①子連れで外出すること、②家での子どもの世話（含 教育的働きかけ）、③家での育児以外の家事、④子どもからのサインやニーズへの対応、⑤その他の日常生活（趣味など）、⑥働き方について／職場の人との関係、⑦家族との関係、⑧近所の人（自治会などの関係も含めて）との関係、⑨拠点で出会った利用者との関係（拠点内・外での）、⑩拠点のスタッフとの関係、⑪その他

について利用者の考え方や行動などがどのように変わっていったか。

B A における変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的に何か。

C 親への支援を通し、支援者自らが、自身の成長を感じるか。そのことから支援者は「自分の役割（支援者としての役割、地域の一員としての役割、自分自身の家族への接し方、その他）」に関して、考え方や行動などが変化したかどうか。変わったとすれば何が変わったか。

D C における変化は、この拠点での支援に活かされているか。それは具体的に何か。

E 地域子育て支援拠点での利用者の「親としての成長」をどのようなものと捉えているか。

F E で答えた利用者の「親としての成長」を促すために、地域子育て支援拠点の支援はどうあるのが望ましいか。

(2) 分析方法

以下の手順にそって、KJ法によって分析を行った。

①ボイスレコーダーに録音した語りの内容から、「寄り添い型の支援」に該当するものと「親としての成長」に該当するものを取り出してマトリックスに入れた。

②中條委員が②を読み込み、「寄り添い型支援」「親としての成長」に該当すると思われる文書セグメント（意味のまとまりごとに分割）を精査し抽出した。

③鶴がそれぞれ抽出された文書セグメントを検討するとともに文書セグメントを読み込んで、追加・削除を行った。

④抽出された文書セグメントは、「寄り添い型支援」の定義に示される「拠点という場の力を使って行った支援」「支援者と利用者との相互作用を活用した支援」「利用者相互の関係性を用いて行う支援」、さらに「その他の支援」に該当されると思われるものに振り分けた。

⑤支援内容ごとに、意味内容の類似性に基づいて分類し、それぞれ表札を付帯した。その際、全ての表札と文書セグメントの記述を総覧し、表札と記述の整合性を確認した。

⑥全ての表札を意味内容の類似性に着目してさらに分類を行った。これら一連の分類作業は、3段階にわたって実施され、その後、第三筆者を加えて、表札間の関係性を探り図解化を行った。

結果の整理にあたって、1段階目で分類されたものを小項目と呼び[]で示す。2段階目で分類されたものを中項目と呼び< >で示す。3段階目で分類されたものを大項目と呼び【 】で示す。なお、イタリック体で示された箇所はヒアリングにおける研究協力者（支援者）の発言である。

なお、Cの質問（支援者の成長・変化）については上記の手続き同様に、別途KJ法を実施し分類のみを行った。

(3) 結果

①分類された項目中甸

「寄り添い型支援」に関する逐語録（聞き取り内容からⅢ-1-(2)①-⑤の手続き）から合計436の文書セグメントが抽出された。

1段階目の分類で「拠点という場の力を使って行った支援」については41、「支援者と利用者との相互作用を活用した支援」については57、「利用者相互の関係性を用いて行う支援」については46、「その他の支援」については8の小項目が形成された。

2段階目の分類で「拠点という場の力を使って行った支援」については17、「支援者と利用者との相互作用を活用した支援」については26、「利用者相互の関係性を用いて行う支援」については20、「その他の支援」については4の中項目が形成された。

3段階目の分類で「拠点という場の力を使って行った支援」については5、「支援者と利用者との相互作用を活用した支援」については10、「利用者相互の関係性を用いて行う支援」については7、「その他の支援」については2の大項目が形成された。

また、Cの質問（支援者の成長・変化）については、合計70の文書セグメントが抽出され、1段階目の分類で46の小項目、第2段階の分類で21の中項目、3段階目の分類で3の大項目が形成された。

表3-2～表3-6、表は大項目から小項目の一覧であり、図1は大項目の内容と関係を空間配置したものである。

②各項目の内容

1. 拠点という場の力を使って行った支援

場の雰囲気重視

支援者は、拠点という場の力を使った支援において、それぞれの地域子育て拠点のもつ**場の雰囲気重視**した実践を行う。そのために、支援者と利用者との相互作用、利用者同士の相互作用、拠点に環境設定などを通して、拠点の雰囲気をつくりだす。

安心できる雰囲気の醸成・環境設定

地域子育て支援拠点を初めて利用する際には、期待とともに、初めての場や人に出会うことへの緊張感や、自分が受け入れてもらえるかという不安を抱く。そのために、支援者は「初めて来た人、不安そうな人、緊張している人の気持ちを受け止め、入りやすい雰囲気を作る」というような**温かく受け入れる雰囲気の醸成**を心がける。

そして、利用者に子連れで外出してもよいと感じてもらえるように、**足を運びやすい雰囲気の醸成・環境設定**を行う。そのために、[足を運びやすい雰囲気の醸成]を意識しながら、[子どもを連れて来た

なる環境の設定]や[積極的な出迎え]を行ったり、[父親が足を運びやすい環境の設定]を行ったりする。

- ・楽しくなる遊具や絵本があり、子どもが遊びこめる空間を作り、子どもの力を引き出し、ここに子どもを遊びに連れてくるのが楽しくなるように工夫している。
- ・入口にスタッフを一人配置して待っている。

足を運びやすくするために、この他にも、利用者の[ニーズに合わせたイベントの企画]や[利用しやすい日の設定]をするなどの工夫をしている。

- ・日曜日に開所をする(働き始めた利用者や、すでに働いている方も父親も利用できる)。
- ・復職した親子むけの「日曜開催」などの必要性を感じている。
- ・様々な種類のイベントを開催する。参加する人のニーズに合わせて企画、実施する。

利用者が拠点を利用する際には、<安心できる雰囲気醸成・環境設定>や<居心地のよい雰囲気醸成・環境設定>を意識する。

- ・安心して過ごせる環境設定
- ・無理せずにいられるように場の雰囲気を和らげる
- ・大人も思わず手に取りたくなる玩具、大人もくつろげる場、誰にとっても居心地の良い工夫を心掛けていく。

さらに、利用者が[「来てよかった」と感じる場の設定]や[助けを求められる場の設定]といった、<再び拠点を利用したくなる場の設定>をすることで、地域子育て拠点が利用者の拠り所の一つとなることにつながる。

- ・来てくれた人みんなが来てよかったと思えるひろばを作る。
- ・不安になった時に行きたいなと思ってもらえる場にしたい。

交流を促す雰囲気醸成・環境設定

支援者は、利用者が支援者や他の利用者となりがもてるように、意図的に<話しやすい雰囲気醸成>や<情報交換できる場づくり・雰囲気醸成>を行い、さらには<誰もが子どもと関わってよい雰囲気醸成>を意識し、我が子以外の存在に気付くきっかけをつくる。

- ・なんでも話せる、話してもいいという雰囲気作り。
- ・職員に聞きやすい雰囲気を心がけている。
- ・話を聴くよという雰囲気である。
- ・父親同士話しやすい雰囲気や場をつくる。
- ・だれが子どもと関わってもいいんだなあという雰囲気を醸成。

これらは具体的には、[交流のきっかけのためのモノづくり]、[交流がしやすい環境を設定]、[交流のための場の提供・設定]、[他の家族と関わる機会の提供]、[作業を通して交流できる場の提供]といった<交流できる環境設定・場の提供>によって実施される。

- ・名札は年齢によって色を変えている。仲間づくりの声かけがしやすくなるように。
- ・母同士で話すきっかけが生まれるように名札の色分け。
- ・おしゃべり会において飲食テーブルを、あえて机を大きくして相席になりやすいよう配置し、知らない人同士でも会話が生まれるようにしている。
- ・ランチ会の場の提供。

- ・他の家族と関わる機会の提供。
- ・利用者同士が作業しながら交流できる時間を作る。
- ・利用者間がやり取りをしながら関係を作れるよう、作業のアウトソーシングやイベントを設定する。

支え合い、育ち合う場や機会の提供

支援者は、**<支え合う雰囲気醸成>**や**<育ち合う場となる配慮>**をしながら、「みんなの連帯感がうまれやすくなるような場づくりを行った」などの[仲間作りができる場の設定]や「**同県出身等、属性を前面に利用者相互の関係性を密にする機会の提供**」などの[関係を深める機会の提供]といった**<仲間作りができる場や機会の提供>**や、**<様々な親子が成長できる場の提供>**を行うことで、利用者の心の安定を図り、利用者の居場所づくりを推進する。

- ・皆で助け合う場の雰囲気づくり。
- ・子どもを持ったスタッフが働く姿や他の働く利用者の存在も応援する雰囲気を作り出している。
- ・自分の子どもだけでなく、育ちあう場になるように配慮している。
- ・試行錯誤を許さる場所として存在している。

気づきを促し、強みを発揮できる場の提供・環境設定

支援者は、[様々な親子がいることを感じられる環境づくり]や「**自分もできるかも**」と思える空間づくりといった**<気づきを促す環境設定>**を行うことで、利用者が多様な親子の存在に気づいたり、利用者自身の力に気付いたりすることを促す。さらに、子育て支援や地域イベントに関する[情報提供のための掲示]を通して利用者が様々なサービスにアクセスできるようにしたり、[利用者が発信したものの掲示]によって利用者同士の情報交換を促したりしている。このように**<掲示物の活用>**によって利用者の子育てを支えている。

- ・大勢の親子がいる風景を経験し多様性を肌で感じてもらえるような環境をつくる。
- ・一人で連れてきているパパをみて、自分もできるかもと自然に思える空間を作っている。
- ・就職相談員が拠点に来ていることやそれを伝える掲示物が、子育てしながら仕事を続けていくことを応援するメッセージになっている。
- ・利用者さんがそれぞれ口コミ情報を付箋に書いて貼っている。

さらに、支援者は、利用者が自らの経験を活かせるように**<強みを発揮できる場の提供>**を行う。[得意なことが言える場づくり]をすることで、利用者に対して趣味や楽しみを大切にしていよことを認識してもらったり、利用者同士の理解を深めたりする。これを踏まえて、生きがいを持ってもらったり、元気をもってもらうために[活躍できる場の提供]を行う。これらは結果的に、利用者が子育てに余裕を持ったり、わが子以外の養育に関わろうと認識したりすることにつながる。

- ・「得意なことがある」と言える場づくり。
- ・親が活躍できる場の提供。
- ・特技を生かしてもらおう場を企画。

表 3-2 拠点という場の力を使って行った支援の内容

| 大項目 | 中項目 | 小項目 |
|--------------------------|----------------------------|-----------------------|
| 場の雰囲気重視 | 場の雰囲気重視 | 場の雰囲気重視 |
| 安心できる雰囲気の醸成・環境設定 | 温かく受け入れる雰囲気の醸成 | 温かく受け入れる雰囲気の醸成 |
| | | 受け入れる場の設定 |
| | 足を運びやすい雰囲気の醸成・環境設定 | 足を運びやすい雰囲気の醸成 |
| | | 子どもを連れて来たい環境の設定 |
| | | 積極的な出迎え |
| | | 父親が足を運びやすい環境の設定 |
| | | 利用しやすい日の設定 |
| | | ニーズに合わせたイベントの企画 |
| | 安心できる雰囲気の醸成・環境設定 | 安心して過ごせる環境設定 |
| | | 安心して過ごせる雰囲気の醸成 |
| | 居心地のよい雰囲気の醸成・環境設定 | 居心地のよい雰囲気の醸成 |
| | | 祖父母世代に居心地のよい場の設定 |
| | | 居心地のよい環境の設定 |
| 親が有意義に過ごせる環境設定 | | |
| 再び拠点を利用したくなる場の設定 | 「来てよかった」と感じる場の設定 | |
| 交流を促す雰囲気の醸成・環境設定 | 話しやすい雰囲気の醸成 | 話しやすい雰囲気の醸成 |
| | | スタッフに話しかけやすい雰囲気の醸成 |
| | | 父親同士が話しやすい雰囲気の醸成 |
| | 情報交換できる場づくり・雰囲気の醸成 | 情報交換できる場づくり |
| | | 情報交換できる雰囲気の醸成 |
| | 誰もが子どもと関わってよい雰囲気の醸成 | 誰もが子どもと関わってよい雰囲気を醸成する |
| | 交流できる環境設定・場の提供 | 交流のきっかけのためのモノづくり |
| | | 交流がしやすい環境を設定 |
| | | 交流のための場の提供・設定 |
| | | 他の家族と関わる機会の提供 |
| | | 作業を通して交流できる場の提供 |
| 支え合い、育ち合う場や機会の提供 | 仲間作りができる場や機会の提供 | 仲間作りができる場の設定 |
| | | 関係を深める機会の提供 |
| | 支え合う雰囲気の醸成 支え合う雰囲気を醸成する | 助け合う雰囲気の醸成 |
| | | 応援する雰囲気の醸成 |
| | 育ち合う場となる配慮 育ち合う場を提供する | 育ち合う場となる配慮 |
| 様々な親子が成長できる場の提供 | 様々な親子が成長できる場の提供 | |
| | 試行錯誤が許される場 | |
| 気付きを促し、強みを発揮できる場の提供・環境設定 | 気付きを促す環境設定 | 様々な親子がいることを感じられる環境づくり |
| | | 「自分もできるかも」と思える空間づくり |
| | 掲示物の活用 | 情報提供のための掲示 |
| | | 利用者が発信したものの掲示 |
| | 強みを発揮できる場の提供 | 活躍できる場の提供 |
| | | 得意なことを言える場づくり |

2. 支援者と利用者との相互作用を活用した支援

主体性を尊重した実践

支援者が利用者に関わる際の基本的姿勢は、利用者の<主体性を尊重した実践>を行うことである。子育てや生活の主体はあくまでも利用者であり、支援者が必要以上に援助するのではなく、利用者の力を引き出すことを常に意識する必要がある。

安心感を与える関わり

地域子育て支援拠点を利用する際、利用者は期待とともに、初めての場や人に出会うことへの緊張感や、自分が受け入れてもらえるかという不安を抱く。そのため、支援者は常に、[歓迎する言葉がけ]や[温かな言葉がけ]を通して<温かな迎え入れ>をすることで、利用者の緊張や不安を緩和し、子連れで外出することを楽しんでもらう。

- ・来てくれて、ありがとう、という気持ちで暖かく迎えるようにしている。
- ・よく来たねと声をかけ、帰るときも声をかけるようにしている。
- ・こんにちとは温かく声をかける。

また、「パパやおじいちゃんやおばあちゃんの利用が当たり前になるように、特別扱いをせず、利用しやすいようにさりげなく声かけをしている」、「『パパと子どもだけの利用が増えてますよ』『おじいさんだけの利用もありますよ』などのいろんな利用方法を、来所されるパパやママに伝えている」というように、<拠点を利用しやすい言葉をかける>ことで母親だけでなく、父親や祖父母世代が利用しやすいように気を配っている。

さらに、利用者が子育てを楽しんだり、子育てで手ごたえを感じたりできるように、<利用者を応援する姿勢>で関わることを心がけている。

- ・仕事に復帰する日が近づいているのに卒乳できないとか、保育園が決まらないというような話があると安心してもらえるよう、応援の姿勢で関わるようにしている。

わが子理解の促進

支援者は、親自身の力が発揮でき、子育てに余裕と自信をもち、今の子どもが成長していくことを見通せるように関わる。そのために、まずは、わが子が可愛く思えて愛着形成が深まるように、利用者に対して[子どもの成長の伝達]や[子どものいいところの伝達]といった<わが子のよさの伝達>を行う。

- ・こどもは成長していることを、支援者が発見したことを伝える事や、いい面への発見を促す。
- ・子どもの変化を親へ伝える。
- ・子どもの成長を親に伝える。
- ・子どものいいところを発見し、親の前で本人に伝えている。

そして、支援者は<子どもの代弁>を通して、利用者がわが子のサインやニーズに対する理解を深め、わが子への感受性や応答性を高められるようにする。

- ・子ども気持ちをスタッフが代弁して知らせている。
- ・子どもの言葉の橋渡しや子どもの気持ちの代弁。
- ・子どもの代弁者になるよう心掛けている。
- ・それぞれの子どもの代弁者になる。

- ・子どもの気持ちを言葉にするようにしている。

身近な相談相手

支援者は、利用者が気軽に話せる<身近な存在>になれるように、日常的に[笑顔]で関わったり、指導的ではなく[対等な立場]で関わったりする。このような関わりや[個人情報への配慮]を通して、利用者支援者の<信頼関係の構築>が促される。

- ・気軽に何でも話せる関係にしたい。
- ・気軽に話せる相手になりたい。
- ・些細なことでも、何でも話せる、相談できる、味方だと思ってもらえるよう関わっている。
- ・隣のおばちゃんとして存在するようにしている。
- ・笑顔でいる。
- ・対等な立場で話している。
- ・子育てで戸惑ったり、悩んだら、拠点にきてもらえるよう拠点を思い出してもらえるような信頼関係づくり。
- ・スタッフの個人情報の取り扱いに注意して、スタッフの言動で利用者間の信頼関係を損なうことがないように気を使っている。

支援者は、信頼関係を基盤にして、<適度な距離での関与>を意識しつつ、利用者[寄り添い]ながら、子育てに関して利用者からの相談に応じるなど[相談できる関係性]を保ったり、あまり話さない利用者[積極的なコミュニケーション]を図ったりして、<相談できる関係の構築>を図る。また、利用者から質問があれば必要に応じて[体験の開示]をしたり、指導的にならないように支援者の[弱みの開示]をしたりするなど、<支援者の自己開示>を行うことで利用者が本音で話せるように配慮する。

これらを通して、<相談できる関係の構築>を目指している。

- ・つらくなった時や誰に相談していいのかわからない時に、利用者が声をかけられるような関係性になりたい。
- ・コミュニケーションをとるように積極的にノックし続けている。
- ・利用者への寄りそい。
- ・スタッフの経験談を話す。
- ・自分の弱みも見せる。
- ・安定した距離感をもってタイミングを待つ。
- ・利用者とスタッフが互いにプライベートに踏み込まないように気を付けている。

日常会話の活用

地域子育て拠点においては、日常の何気ない会話から、利用者の悩み事が整理されたり、解決の糸口が見つかったり、相談に発展したりする。そのため、支援者は<日常会話の重視>の姿勢で利用者に関わり、会話の中で子育てのことに加えて、完璧に家事をこなさなくてもよいことや、子育ては母親だけが担うものではないことなどを伝えている。

- ・日常会話も大事にしている。
- ・日々、一緒に話すこと。

- ・普段からの会話を大切にしている。

そして、日々の[会話を通じた関係構築]を通して利用者との信頼関係を築くとともに、利用者に安心感を与えたり、子どものことを伝えて気付きを促したり、親が自分の時間を持ってよいことを伝えてリフレッシュできるようにしたりするなど[日常会話による支援]を行う。このように支援者は<日常会話の活用>を通して、利用者を支えている。

- ・スタッフに信頼感を持ってもらえるよう関係性を作れるような会話。
- ・子どもの成長やここで起こるいろんな出来事を、上手に捉えて、何気ない会話を通して伝えていく。
- ・話しやすい雰囲気をつくりながら、楽しいおしゃべりの中で、自分のことも話したくなるように会話している。
- ・子どもの話題だけでなく日常会話も沢山する。なにげない会話の中から安心できるような声かけをしている。
- ・指導的な態度や専門的な説明ではなく、日常会話で、大切なことを伝えられるように心がけている。
- ・親自身の生き方や身体のことを気遣うようなスタッフとの何気ない会話。

受容的・共感的な関与

支援者は、日常の会話にしても利用者からの相談にしても、まずは利用者の話を<傾聴>する。利用者の子育てや家事、家族、職場復帰などに対する思いや悩みをじっくりと聴き、それに対して[受容]し、[共感]するという<受容的・共感的関わり>をする。それによって、利用者はそれらの状況を整理し、向き合うことができ、子育てなどに関する悩みや問題の解決のきっかけとなる。

- ・傾聴する。子育てを楽しんでいるように。
- ・対等に真摯に相手の話を聞き、誠実に言葉を選んで話すように心掛けている。
- ・どんな相談でも、丁寧に傾聴するようにしている。
- ・日々、スタッフが話を聴くことを大事にしている。
- ・不安をかかえる親の話をきく。
- ・パパが協力的でないママに気を配り、気持ちを聴く。
- ・夫への不満など愚痴をたくさん聞いている。
- ・否定せずに受け入れる。
- ・当事者の視点で相手の気持ちに共感することを大事にしている。

また、支援者は[多様な価値観の提示]を通して、利用者に対して子育てや家事を頑張りすぎなくてもよいことを伝え、さらに、利用者の考えや思いに対して[非審判的態度]で関わり、支援者の価値観を押し付けないようにする。このような支援者の<価値観の棚上げ>によって、利用者は子育てや家事に関する様々な選択肢を知るとともに、子育てに関する自己決定の機会を得ることができる。

- ・先輩ママが家事講座を年1回行っているが、スタッフはその内容にとらわれず家事に力を入れない姿勢を示している。例えば蒸し器を使った料理であった場合「そんなのできない 蒸し器なんてもってないし」と言ってしまう。スタッフが他の価値観を出すことを意識している。
- ・自分の価値観に気づき、自分の価値観を押し付けないようにしている。

<傾聴>、<受容的共感的関わり>、<価値観の棚上げ>の関わりは、同時に、利用者との信頼関係を深めることにもつながる。

状況や心情を踏まえた関わり

地域子育て拠点の利用者は子育てをしている点では共通しているが、利用者一人ひとりの背景や生活状況、子育てに関する考え方や思いなどはそれぞれ異なる。そのため、支援者は[利用者一人一人に応じた関わり]や[利用者のしんどさを踏まえた関わり]、[個性を踏まえた関係づくり]を行う。こうした<利用者理解を踏まえた関わり>を通して、利用者は子どもと向き合ったり、気兼ねなく自分の時間をとったり、離職による不全感から解放されたりする。結果、わが子への感受性を高め、子育てに関する問題の解決力の向上につながる。

- ・子どもに対応できていない人はできない状態の背景を気にかけるようにする。
- ・一人ひとりがどんな思いでいるのかを感じながら、関りをつくっていく。
- ・しんどいというお話を聞いた場合は、お勤めされていなくても自分のための時間を使っていいんだよと伝えたりしている。
- ・趣味の時間など自分のための時間をもつことに罪悪感を感じている人などに、そのような時間をもってもいいんだよと伝えたり、やっていますと言う方の話を聞いたりして応援している。
- ・利用者の個性を見極めながら話しかけて、関係をもてるようアプローチ。

また、利用者は時には普段とは異なる様子を見せる時がある。そのため、<普段とは異なる状況下での柔軟な対応>をすることによって、利用者に安心感を与えて拠点にやすくするとともに、より支援者への信頼感を感じるようになる。

- ・いつもと違う、何かあった等、普段と違う母がいたら極力寄り添うようにする。子どもを遊ばせながらママのそばにいる。
- ・いつもと違う状態の母を察知して、その場にしやすい工夫をする。

力を引き出す関わり

支援者は、[利用者の持つ力に対する信頼]を持ち、[意図的な待機]の姿勢をとることで、利用者自ら子育てについての悩みを話せるようにする。このような<積極的な見守り>をすることは、利用者の支援者への信頼感を深めるとともに、利用者の力を引き出す第一歩となる。

- ・いつでもお話を聞くよのスタンスで待っている。
- ・親の力を信じて待つ。

そして、支援者は利用者の本来持っている<力を引き出すきっかけづくり>を行う。そのために、[利用者のよさの承認]や[やる気を引き出す関わり]を行って親が自分の時間を楽しめるようにしたり、得意なことを引き出したりする。また、子育てについて[自信を引き出す関わり]や、他の利用者と自分を比較して落ち込む利用者に[自己肯定感を高める関わり]をする。さらに、支援者がすぐに悩みに対する解決策を提示するのではなく、[気づきを促す関わり]をしたり、[悩みの解決のきっかけづくり]や[自らの力で解決することの促し]、[自ら相談することの促し]を行ったりする。

- ・日々の会話の中から、利用者の良いところ、得意なことを引き出す。
- ・簡単な子供服を手作りしていた方がいた時、「いいね」と褒めて話を聞いた。
- ・自己肯定感を高めるよう関わっている
- ・半日、父と子どもで過ごす場をつくり、父と子どもで遊びにくる場のなかで、父親の子育ての自信をひきだす。

- ・一つの正解を渡すような支援にならないようにしている。

さらに、支援者は、利用者が我が子への感受性や応答性を高められるように[子どもの関わり方のモデルの提示]をしたり、目の前の利用者に対してだけではなく[他の利用者を意識したモデルの提示]を行ったりする。また、必要に応じて他者を頼ることができるように[支援を求めるためのモデルの提示]を行う。このような<モデルの提示>は、利用者が実際にモデルを見ることで子どもとの関りに関する気づきや子育ての知識や技術を得やすくなる。

- ・抱き方などは、機会があればスタッフが抱っこして見せて、具体的に知ることができるように。実践して「こうやって抱くと子どもも親も楽だよ」と言葉かけをする。
- ・子どものサインをうまくキャッチしてスタッフがお手本となる。
- ・対応をスタッフが実践し、親が見る機会を作っている。言葉で親に伝えるよりは態度で示している。
- ・子どもの興味のあることに焦点を合わせて楽しい遊び方を見せる
- ・泣いている様子を具体的に「眠たいのかもしれないね」「お腹がすいたのか」など周りの親にも聞こえるように言う。
- ・スタッフが子どもに応答的、受容的に接する様子を別の利用者も見ることができている。

地域とのつながりの創出

支援者は、近所の親子と交流ができるように[近所の拠点への紹介]したり、拠点以外の社会資源とつながれるように[拠点以外のイベントの紹介]を行ったりする。子育てや家族関係などの悩みが深刻であれば、必要に応じて[外部の社会資源の仲介]を行うことで悩みの解決を図る。このような<外部の社会資源・イベントの紹介・仲介>は、子育てに関する自己決定を経験するきっかけになるとともに、子育てに関わる社会資源の理解や利用につながる。

そして、支援者は、親子が地域住民と知り合えるように[地域住民と関わるきっかけづくり]を行うとともに、必要に応じて[利用者とともに地域への出向]を行い、<地域とのつながりのきっかけづくり>をすすめていく。さらに、<地域住民との交流>のために、[近隣施設との交流]を行ったり、拠点に[地域住民の招待]をしたり、[地域の行事への参加・共催]を行ったりする。

このように支援者は、利用者が地域の中で居場所をつくり地域で子育てができるようにするとともに、地域で子育てを支えてもらうシステムをつくるために、地域と利用者をつなぐ。

力の獲得

支援者は、一方的に支援をする存在ではない。[利用者からの学び]を得る態度で関わり、両者の相互作用の中で[利用者からの力の獲得]をしている。

- ・スタッフも利用者から学ぶ姿勢。
- ・利用者に話しも聞くけど自分の話もするので自分がエンパワメントされていると感じる。

利用者から得る学びは、表3-6のように【拠点における実践の変化】と、【支援者個人の子育て・家族関係の変化】に分かれる。前者は、利用者との関わりから支援者として成長していることを示している。後者は利用者との関わりを通して、自らの子育てや家族関係、思考や価値観を振り返り、人間として成長していることが示されている。さらに【地域の支えの認識】により、地域の力や地域における子育てネットワークを認識するようになっていく。

表 3-3 支援者と利用者との相互作用を活用した支援の内容

| 大項目 | 中項目 | 小項目 |
|--------------------|--------------------|------------------|
| 主体性を意識した実践 | 主体性を意識した実践 | 主体性を意識した実践 |
| 安心感を与える関わり | 温かな迎え入れ | 歓迎の言葉がけ |
| | | 温かな言葉がけ |
| | 利用しやすい言葉がけ | 利用しやすい言葉がけ |
| | 利用者を応援する姿勢 | 利用者を応援する姿勢 |
| 身近な相談相手 | 身近な存在 | 身近な存在 |
| | | 笑顔 |
| | | 対等な立場 |
| | 信頼関係の構築 | 信頼関係の構築 |
| | | 個人情報への配慮 |
| | 相談できる関係の構築 | 相談できる関係性 |
| | | 積極的なコミュニケーション |
| | | 寄り添い |
| | | 拠点に常駐 |
| | 支援者の自己開示 | 体験の開示 |
| 弱みの開示 | | |
| 支援者への理解を深めてもらう取り組み | | |
| 適度な距離での関与 | 適度な距離での関与 | |
| 受容的・共感的な関与 | 傾聴 | 傾聴 |
| | | 気持ちや思いに焦点を当てた傾聴 |
| | 受容的・共感的関わり | 受容 |
| | | 共感 |
| | 価値観の棚上げ | 多様な価値観の提示 |
| | 非審判的態度 | |
| 状況や心情を踏まえた関わり | 利用者理解を踏まえた関わり | 利用者一人一人に応じた関わり |
| | | 利用者のしんどさを踏まえた関わり |
| | | 個性を踏まえた関係づくり |
| | 普段と異なる状況下での柔軟な対応 | |
| 日常会話の活用 | 日常会話の重視 | 日常会話の重視 |
| | 日常会話の活用 | 会話を利用した関係構築 |
| | | 日常会話による支援 |
| わが子の理解の促進 | わが子のよさの伝達 | 子どもの成長の伝達 |
| | | 子どものいいところの伝達 |
| | 子どもの代弁 | 子どもの代弁 |
| 力を引き出す関わり | モデルの提示 | 支援を求めするためのモデルの提示 |
| | | 子どもへの関わり方のモデルの提示 |
| | | 他の利用者を意識したモデルの提示 |
| | 力を引き出すきっかけづくり | 利用者のよさの承認 |
| | | やる気を引き出す関わり |
| | | 自己肯定感を高めるに関わり |
| | | 自信を引き出す関わり |
| | | 気付きを促す関わり |
| | | 悩みの解決のきっかけづくり |
| | | 自らの力で問題解決することの促し |
| 自ら相談することの促し | | |
| 積極的な見守り | 意図的な待機 | |
| | 利用者の持つ力に対する信頼 | |
| 地域とのつながりの創出 | 外部の社会資源・イベントの紹介・仲介 | 近所の拠点への紹介 |
| | | 外部の社会資源の仲介 |
| | | 拠点以外のイベントの紹介 |
| | 地域とのつながりのきっかけづくり | 地域住民と関わるきっかけづくり |
| | | 利用者ともに地域への出向 |
| | 地域住民との交流 | 近隣施設との交流 |
| 地域の行事への参加・共催 | | |
| 地域住民の招待 | | |
| 力の獲得 | 力の獲得 | 利用者からの学び |
| | | 利用者からの力の獲得 |

表 3-6 支援者の成長、学び、変化

| 大項目 | 中項目 | 小項目 |
|---------------------|--------------------|----------------------|
| 拠点における実践の変化 | 利用者への受容的・共感的関与 | 利用者を受け止める |
| | | 利用者を受け入れ共感する |
| | | 利用者に共感する |
| | | 傾聴する |
| | 多様な価値観の受容・多面的思考 | 多様な価値観を受け止める |
| | | 自らの価値観が広がる |
| | | 多面的に見て考える |
| | 利用者理解の深化 | 家族全体を見て、子どもを捉える |
| | | 利用者を多面的に見る |
| | | 利用者の背景を理解しようとする |
| | 利用者の持つ力に対する信頼 | 利用者のいいところを見つける |
| | | 親の力を信じて待つ |
| | | 利用者の自己決定を支える |
| | 柔軟な対応 | 利用者の状況に応じて支援を考える |
| | | 利用者の状況に応じて対応する |
| | | 支援者として柔軟性を身に付ける |
| | | 利用者を受け入れた上で支援を考える |
| | 対等な関係での会話 | 対等な関係で会話する |
| | 目的を持って実践する | 実践の目的を持って行動する |
| | 親と喜びの分かち合い | 親と喜びを分かち合う |
| | 実践の振り返り | 自分の行動の意味に気付く |
| | | 自らの言動を振り返る |
| | 支援者としてのあり方の再認識 | 自らの成長を実感する |
| 働く動機を再確認する | | |
| 自己有用感を認識する | | |
| 利用者のために力を発揮したいと認識する | | |
| 拠点の役割の理解 | 拠点の役割を認識する | |
| | 拠点の役割を教えてもらう | |
| 自分の体験の活用 | 自己開示する | |
| | 地域での自らの活動を利用者に伝える | |
| | 利用者の関わり方を学ぶ | |
| 地域への情報発信 | 拠点を知ってもらうために地域に出向く | |
| 地域の情報の獲得 | 地域の情報を得る | |
| 親からの学び | 親の表情から学ぶ | |
| 拠点による救い | 自分自身が拠点に救われる | |
| 支援者個人の子育て・家族関係の変化 | 自らの子育ての変化 | 自らの子育てが変化する |
| | | 自らの子育てに影響がある |
| | 家族への認識や関わり方の変化 | パートナーに感謝する |
| | | 家族に相談する |
| | | 家族との接し方を学ぶ |
| | 自らの行動や認識の変化 | 他者との関わり方を学ぶ |
| | | 自分の失敗を素直に認める |
| 「他者に頼ってよい」と思う | | |
| 地域の支えの認識 | 地域の支えの認識 | 地域の力を知る |
| | | 地域で支えてくれる人がいることを認識する |
| | | 地域ネットワークの大切さを知る |

3. 利用者相互の関係性を用いて行う支援

他の利用者を巻き込んだ歓迎

支援者は、利用者が安心して拠点を利用し、子連れでの外出が楽しめるように<他の利用者を巻き込んだ迎え入れ>を行う。

- ・スタッフだけでなく、他の利用者を巻き込みながら、みんなで快く迎え入れられるように配慮している。

つながり合いの促進

支援者は個々の利用者に関わるだけでなく、<つながり合い・支え合うためのきっかけづくり>をする。まず、利用者同士が関われるように共通の話をするなど[つながるためのきっかけづくり]を行う。そして、日常会話などのやりとりにとどまらず、利用者同士の[情報交換のきっかけづくり]や[教え合うきっかけづくり]、[助け合うきっかけづくり]を行い、より深い交流ができるように支援する。さらに、利用者同士で誘い合って[外出するきっかけづくり]を行い、拠点以外でも関わり合えるように意図している。

- ・共通の話を意図的に投げかけたりしている。
- ・名札を子どもの年齢で色分けしているので、「同じ年齢ですね」などをきっかけにスタッフが声かけてつなげていく。
- ・地域のイベントなどの情報も提供し、拠点以外にも利用者同士で出かける機会となるような情報提供。
- ・利用者同士の協力や助け合いのきっかけづくり。

利用者同士をつなぐ際に、支援者は特に<同じ立場の利用者同士をつなげる>ことを意識する。子どもの年齢が近い利用者、居住地が近い利用者、同じ学校・園を利用する利用者など[同じ立場の利用者]をつなげたり、[気の合いそうな人]同士や[同じ関心のある人]同士をつなげたりすることで、共通の話題から話すきっかけをつくり、子育てことなどを聞き合えるきっかけをつくる。また、[利用しやすい時間帯や行事の紹介]をすることで、同じような立場の利用者と出会いやすくする工夫も行う。

- ・同じ園や小学校に行く利用者同士をつなげる。
- ・こどもが同じような月齢年齢の母同士で話ができるようにさりげなくつなぎ、様々なやり方を聞く機会を作っている。
- ・住んでるエリアが近い利用者がいたら、お互いの利用者には確認したうえで、了承を得たら繋いでいく。
- ・気の合いそうな人同士をつなげる。
- ・利用者と話して、その利用者が来るといいと思われる時間帯や集まりを紹介している。

また、[意図的な話す時間の設定]を設けることで、利用者同士の情報交換や近況報告などを促す。さらに[座談会・おしゃべり会の開催]、[プログラムの実施]、[企画・イベントの開催]によって共通の話題でつながれるようにする。このように<企画を通じたつながりづくり>によって、利用者同士が子育てや家事、家族関係、職場復帰などに関する愚痴や悩みを話したり、他の利用者の話を聞いたりすることで、つながり合いの創出をうながしたり、学び合いや支え合いの萌芽を促したりする。

<つながり合い・支え合うためのきっかけづくり>や<企画を通じたつながりづくり>において、支援者は<つなぎの役割>を果たすことを意識する。[利用者同士のつなぎ役]として、利用者集団の中で[つなぐ

ための会話]をして、話題の共有や関係づくりを図る。さらに、[初めての利用者が入りやすい関わり]を行ったり、[多様な利用者のつなぎ]や[異なる世代のつなぎ]を行ったりすることで、多様な利用者とのつながりや情報交換を促していく。

- ・はじめての人には、利用者さんたちの中に入っていきやすいように、必要に応じてサポートしている。
- ・常連と時々来る人との情報交換の輪が入りやすいように配慮している。
- ・若い世代と祖父母世代のつなぎ役をする。
- ・小・中・高校生、障害のある人などいろんな人を受け入れる多世代ひろばであること。

気づき合い・学び合いの促進

支援者は利用者同士の相互作用を通して、利用者が我が子への感受性や応答性を高めたり、必要に応じて他の利用者を頼ったり、自らの経験を活かしたりできるように支援を行う。

支援者は、利用者が[他の親子の関わり]の観察や[我が子以外の子どもの観察]、お互いの[見せ合い]ができるように関わる。このような<他の親子を意識する関わり>を通して、また、[先輩利用者へのつなぎ]を通して<先輩利用者から学ぶ機会の設定>を行い、我が子の理解を深めたり、育児や家族関係、職場復帰などの悩みの解決を図ったりする。

- ・他の保護者の声かけやどのようにお世話をしているか、聞きあえるよう促している。
- ・利用者で積極的な育児をしている人を見ること。
- ・我が子以外の子どもの様子を見る。
- ・先輩ママの声を伝えてもらって外出の敷居が気持ち的にさがるよう促す。
- ・仕事に復帰した先輩利用者をまねいて、両立の工夫や夫との協力体制の話をしてもらう。

また、一方の利用者が他方の利用者から学ぶだけでなく、支援者は<相互の気づき・学びの促進>をする。利用者同士で子育てや家事のことを話したり、悩みを話したりするようにして[気づき合いの促進]を図り、利用者は自分の抱える子育ての悩みなどが「自分だけない」ことを知る。そして、利用者同士がお互いのモデルとなるように促したり、助言し合ったりする[学び合える関係づくりの促進]を図る。さらに、<母親以外の人との交流を通じた気づきの促進>によって、利用者が子育ては母親だけの役割ではないことや、家族のあり方を考えることを促す。

- ・お母さん同士で、家で自分がどうしているか、話してもらうように心がけている。
- ・利用者同士がつながり、子どもに親以外の大人が関わることで「自分だけでない」と感じられるきっかけをつくる。
- ・多様なモデルが見られるよう、横の関係性づくりを促す。
- ・母以外の家族と子どもが利用する姿が日常的にみられることが、子育ては母親だけの役割ではないというメッセージになっている。

経験活用の促進

利用者は、他の利用者が拠点でボランティアする姿を見るなど<活躍の遭遇>によって、自分も他の子育て家庭のために何か役に立つことができないか、役に立ちたいと思うようになる。そして、利用者が<活躍できるきっかけづくり>を通して、拠点でのボランティアを行ったり、他の利用者の前で話をしたり

するようになり、これまでの子育てや人生の経験を活かして、わが子以外の子どもの養育に共に関わろうと考えて行動するようになる。

- ・コンサートや「ママトコ」など、子育て中の人活躍する姿を見る。
- ・ママボランティアが活躍する姿を見る。
- ・地域の事に詳しい利用者がいたら、近くの公園の話や子ども会の話など、拠点で話してもらう。
- ・「ママトコ」という子どもと一緒にできるボランティア制度をつくった。
- ・ママ企画の部活動を行って、ママたちが力を発揮するきっかけを作っている。

キーとなる利用者の見極め

支援者は、利用者同士の交流や利用者同士の学び合い、経験の活用を促す際に、<キーとなる利用者の見極め>を行い、より効果的な利用者同士の相互作用を促進する。

- ・協調性のある方やムードメーカーなどキーマンの見極め必要。

主体的な交流の支援

支援者は、利用者が自ら他の利用者と子育てネットワークや地域でのネットワークを形成し、地域の中で居場所をつくっていくことを支援する。そのために、まず、支援者は<自発的つながりのきっかけづくり>を行い、利用者同士が自ら交流できるように後押しする。

- ・自発的なつながりづくりに向けてきっかけを作るように配慮。
- ・お友達を求めている人が多いので、少し紹介するぐらいで、後は自分たちで、連絡先を交換したり、お出かけを計画したりされている。職員は、ちょっと背中を押すぐらい。

また、<自主的グループ活動の支援>を行うことによって、拠点内外での利用者同士の自発的な交流を促進する。

- ・ひろばの日常会話から、ママたちの特技を活かしたり、関心のあることにアンテナをはり、趣味講座から自主グループ活動を支援。
- ・サークル支援。

交流の見守り

支援者がきっかけをつくったにせよ、利用者が自発的に動いたにせよ、利用者同士の交流が始まれば、支援者はそれを適度な距離で見守り、利用者同士の自発的な関わり合いや支え合いの連鎖が生じることを促す。

拠点到慣れてくると、自分が以前にされたように別の利用者に声をかけ、利用者同士で<声のかけ合い>が始まる。そして、利用者同士の交流がある程度深まってくると、<愚痴の言い合い>や<情報の交換・共有>が見られ子育てや家庭での悩みなどを共有するようになる。同時に、お互いの子どもを見合うなどの<助け合い>があり、必要に応じて他者を頼ったり、力添えを受け入れたりするようになる。また、<初めての友達の同伴>によって、拠点を基盤にした子育てネットワークの形成に貢献する。

- ・自分がしてもらって嬉しかったから、お互い様の気持ちで気さくに声をかけ合っている。
- ・初めて来た人に参加者同士が自然と声をかけている。
- ・おしゃべり会と銘打たなくてもひろばで吐き出しができるようになってきた。

- ・利用者同士で愚痴を言い合える雰囲気を作っている。
- ・同じ立場のママ同士仲良くなり情報交換できている。
- ・お互い様の気持ち子どもを見合う雰囲気がある。
- ・「ここなら安心」「1人でも、友だちとでも来やすい」と初めてのお友だちを連れてきてくれる。

さらに、同じ立場の利用者同士での[交流]や[語り合い]によって親近感が増し、時には[誘い合い]をして利用者同士で外出をするようになる。このような<交流の深まり>は、共にお互いの子どもを養育し合うことにつながっていく。そして、支援者は<支え合いの見守り>によって、利用者同士の自然発生的な[助け合い]や[学び合い]、[関係構築]を妨げることなく、必要に応じて関わるようにしている。

- ・トイレに行くときに利用者同士で預かったり、助け合っているときは黒子に徹している。邪魔しない。
- ・助け合いを応援している。
- ・利用者同士の助け合いを暖かく見守っている。
- ・利用者同士の見て真似て学ぶを、程よい距離感でスタッフが見守っている。

表 3-4 利用者相互の関係性を用いて行う支援の内容

| 大項目 | 中項目 | 小項目 |
|-----------------|-----------------------|----------------------|
| 他の利用者を巻き込んだ迎え入れ | 他の利用者を巻き込んだ迎え入れ | 他の利用者を巻き込んだ迎え入れ |
| つながり合いの促進 | つながり合い・支え合うためのきっかけづくり | つながるためのきっかけづくり |
| | | 外出するきっかけづくり |
| | | 情報交換のきっかけづくり |
| | | 教え合うきっかけづくり |
| | | 助け合うきっかけづくり |
| | つなぎの役割 | 利用者同士のつなぎ役 |
| | | 初めての利用者が入りやすい関わり |
| | | 多様な利用者のつなぎ |
| | | 異なる世代のつなぎ |
| | | つなぐための会話 |
| | 同じ立場の利用者同士をつなげる | 同じ立場の利用者同士 |
| | | 気の合いそうな人 |
| | | 同じ関心のある人 |
| | | 利用しやすい時間帯や行事の紹介 |
| | 企画を通じたつながりづくり | 講座の案内 |
| | | 意図的に話す時間の設定 |
| 座談会・おしゃべり会の開催 | | |
| プログラムの実施 | | |
| 企画・イベントの開催 | | |
| 気づき合い・学び合いの促進 | 他の親子を意識する関わり | 他の親子の関わりを観察 |
| | | 我が子以外の子どもの観察 |
| | | 見せ合い |
| | 先輩利用者から学ぶ機会の設定 | 先輩利用者へのつなぎ |
| | | 先輩利用者から学ぶ機会の設定 |
| | 相互の気づき・学びの促進 | 気付き合いの促進 |
| | | 学び合える関係づくりの促進 |
| | | 母親以外の人との交流を通じた気づきの促進 |
| | 経験活用の促進 | 活躍の遭遇 |
| 活躍できるきっかけづくり | | 活躍できるきっかけづくり |
| キーとなる利用者の見極め | キーとなる利用者の見極め | キーとなる利用者の見極め |
| 主体的な交流の支援 | 自発的つながりのきっかけづくり | 自発的なつながりのきっかけづくり |
| | 自主的グループ活動の支援 | 自主的グループ活動の支援 |
| 交流の見守り | 支え合いの見守り | 助け合い |
| | | 関係構築 |
| | | 学び合い |
| | 声のかけ合い | 声のかけ合い |
| | | 初めての利用者への声かけ |
| | 初めての友達の同伴 | 初めての友達の同伴 |
| | 交流の深まり | 交流 |
| | | 語り合い |
| | | 誘い合い |
| | 愚痴の言い合い 利用者同士で愚痴を言い合う | 愚痴の言い合い |
| | 情報の交換・共有 | 情報の交換・共有 |
| | 助け合い | 助け合い |

4. その他の支援—寄り添い型支援を支える活動

支援者間での共通理解

利用者がどの支援者にも安心して話ができるように、支援者同士で [情報共有] を行う。また、支援者同士での [価値観の共有] をし、支援の方針について共通理解をする。このような <支援者間での共通理解> は、職員同士のチームワークを高め、質の高い支援の実施につながる。

- ・安心して話してもらうため、(スタッフはシフトで働いているので) スタッフ間で情報を共有し連携するように心がけている。
- ・いろいろな子育てがあっていいんじゃないかと日々スタッフ間で確認している。

地域支援ネットワークの形成

子育て家庭が地域に出向きやすくしたり、子育てがしやすい環境を整備したりするために、支援者は、地域に出向き、拠点を理解してもらい、ネットワークを形成する。

支援者は、地域住民に [子育てサポーターの依頼] や [保育ボランティア養成] を行い、親子に関わり応援する人を増やしていく。また、[社会資源との連携] によって、重篤な悩みや困難を抱える利用者と社会資源とがつながりやすい体制を整える。さらに、地域住民などに [子育て家庭に対する理解促進] を図り、子どもや子育て家庭が身近な存在であることを知ってもらう。このような <地域子育て支援ネットワークの形成> は、親子の地域での居場所づくりにとって必要不可欠である。

- ・地域の人に子育てサポーターになってもらい、スーパーなどで出会っても声をかけあえる関係性をつくっている。
- ・地域のネットワーク会議などでは民生委員や子ども会の人に会うので、小さな子と親たちのことを伝えて、理解してもらうようにしている。

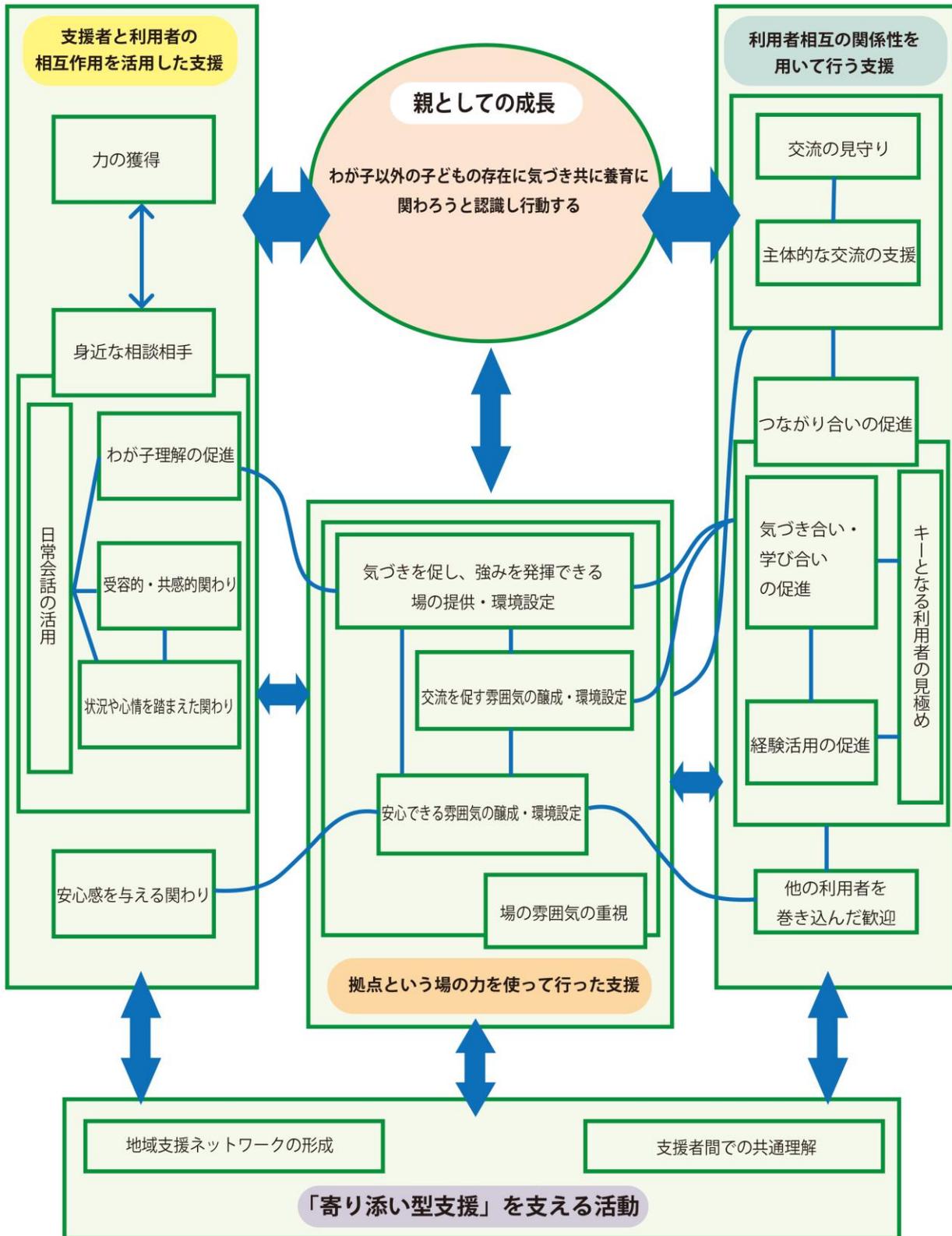
また、支援者は地域住民に当該拠点の存在や役割について説明し <拠点の理解促進> を図ったり、<地域の行事への積極的関与> によって拠点の活動の幅を広げたり、地域住民と顔の見える関係をつくったりする。これらのことは結果的には、拠点の存在を知らない子育て家庭が、拠点を知り、利用するきっかけづくりにもなる。

- ・地域の人に拠点を知ってもらえるよう、活動を発表する場を拠点内で行っている。

表 3-5 寄り添い型支援を支える活動の内容

| 大項目 | 中項目 | 小項目 |
|----------------|------------------|---------------|
| 支援者間での共通理解 | 支援者間での共通理解 | 情報共有 |
| | | 価値観の共有 |
| 地域におけるネットワーク形成 | 地域子育て支援ネットワークの形成 | 社会資源との連携 |
| | | 子育てサポーターの依頼 |
| | | 保育ボランティア養成 |
| | | 子育て家庭に対する理解促進 |
| | 拠点の理解促進 | 拠点の理解促進 |
| | 地域の行事への積極的関与 | 地域の行事への積極的関与 |

「寄り添い型支援」の構造と展開



— 関係あり ↔ 因果関係

作成：鶴宏史

図1 「寄り添い型支援」の構造と展開

(4) 総括

①項目間の関係性—「寄り添い型支援」のストーリーライン

本研究の結果から、地域子育て拠点において支援者の考える「寄り添い型支援」とその展開、「親の成長」との関係は以下のようにまとめられる。なお、下線部はヒアリングにおいて、支援者が親の成長や起きてほしい変化として示されたもの（＝支援の意図）である。

地域子育て拠点における「寄り添い型支援」とは、「地域子育て拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者が共に相互にエンパワメントし合う活動」と定義される。

「地域子育て拠点という場を使いながら」は、拠点という場の力を使って行った支援である。支援者は【場の雰囲気重視】を意識しながら実践するが、まずは【安心できる雰囲気の醸成・環境設定】を通して利用者に安心感を与え、不安や緊張を低減させ、安心して拠点を利用できるようにする。そして、利用者同士の【交流を促す雰囲気の醸成・環境設定】を行うことで、利用者が他の親子と関わり、我が子以外の子どもの存在への気付きが促される。さらに、利用者に【支え合い、育ち合う場や機会の提供】して利用者同士がつながり合い、成長し合うきっかけをつくったり、利用者の【気付きを促し、強みを発揮できる場の提供・環境設定】を通して、利用者が養育力を向上させたり自己を発揮したりして、有能感を得る。

「支援者との相互作用を活用」とは、支援者と利用者との相互作用を活用した支援である。支援の前提となるのは、支援者が利用者の【主体性を意識した実践】を意識することである。支援者は、【安心感を与える関わり】を通して、利用者が安心して拠点を利用したり、子連れでの外出をしたりできるようにする。そして、支援者は【身近な相談相手】になり、【受容的・共感的な関わり】や【状況や心情を踏まえた関わり】を通して、利用者が無条件で受け入れられる経験をし、両者の信頼関係を深めるとともに、【日常会話の活用】を通して、【我が子の理解の促進】を図り、我が子への感受性や応答性を高めるようにする。さらに、【力を引き出す関わり】によって、利用者が子育てに関する知識・技術を増やし、子育てに関する自己決定する中で「できるようになる自分」を実感する。また、利用者【地域とのつながりの創出】を通して子育て家庭の理解者や応援者を増やし、地域での居場所をつくっていく。一方で、支援者は支援するだけでなく、利用者から影響を受けることで支援者自身が【力の獲得】をし、支援者として、人として成長する。このように拠点における利用者支援者の相互作用によって両者が共に成長し合う。

「ピアとの相互作用を活用」は、利用者相互の関係性を用いて行う支援である。支援者は【他の利用者巻き込んだ歓迎】を通して、支援者だけでなく利用者集団とともに快く利用者を迎え入れるように配慮し、利用者が安心して拠点を利用し、子育て中の人と関わりを持てるようにする。利用者を迎え入れたら、支援者は自らの関わりだけではなく、意図的に利用者同士の【つながり合いの促進】を図り、利用者同士のかかわり合いをつくっていく。そして、交流の中で【気付き合い・学び合いの促進】や【経験活用の促進】を図ることで、子育てや家事などの問題解決のために、自ら必要に応じて他者に頼ったり、他者のために自らの経験を活かしたりし、自己効力感や自己有用感を高め、他者への貢献意欲が高まるようにする。その際、支援者は利用者集団の関係性を観察しつつ、【キーとなる利用者の見極め】をしながら柔軟につなぐ支援を行う。さらに、利用者同士の【主体的な交流の支援】をし、利用者同士が自らつながり合い、他者からの力添えを受け入れることができるように促す。実際にそのような様子が見られれば【交流の見守り】を行い、親子の成長や利用者同士による育て合いを支える。このように利用者同士がお互いを受け入

れ、支え合い、成長し合う関係とつながりが形成される。

その他の支援である、「寄り添い型支援」を支える活動として、当該拠点の理念の共有や支援者間の価値観のすり合わせをしたり、情報共有をしたりすることを通して支援の質を上げるために【支援者間での共通理解】を図ることがある。さらに、【地域支援ネットワークの形成】を通じて、地域住民に対する地域子育て拠点の理解を促したり、子育て家庭の理解者や応援者を増やしたりする。

これらの支援のプロセスにおいて、利用者は自分が無条件に受け入れられ、自己有能感を高め、他者に貢献することを経験し、同時に他の利用者や支援者にも影響を与え、共に成長し合うのである。

②今後の課題

本調査において、拠点の支援者が捉える「寄り添い型支援」の構造と展開、「親としての成長」との関連について明らかにし、それを整理したことで、支援者が行うべき内容や姿勢などが示唆された。しかし、いくつかの課題が残された。

まず、ヒアリングにおいて「拠点という場の力を使って行った支援」については、「支援者と利用者との相互作用を活用した支援」、「利用者相互の関係性を用いて行う支援」、「寄り添い型支援」を支える活動」と比較して、抽象度の高い回答が多く、支援者が具体的に何をするのかを読み取りにくかった。例えば、「無理せずにいられるように場の雰囲気を和らげる」のであれば、「そのために何をしているのか」まで質問することが求められた。インタビューガイドを精査した上での再調査が求められる。とはいえ、「場」や「場の雰囲気」は、支援者と利用者との相互作用、利用者同士の相互作用、環境設定によってつくられるので、「支援者と利用者との相互作用を活用した支援」、「利用者相互の関係性を用いて行う支援」の項目にヒントがあることも示唆された。

次に、今回の調査・分析からは、定義にある「受容の連鎖」について明確に読み取れたとはいえない。これは、「受容の連鎖をつくる」ことが、各支援（拠点という場の力を使って行った支援、「支援者と利用者との相互作用を活用した支援、利用者相互の関係性を用いて行う支援」）のプロセスにおいて生じるものであると考えられる。ただし、第Ⅱ章の量的調査との比較において、特に、「受容の連鎖」に関連する項目は、【安心できる雰囲気の醸成・環境設定】、【身近な相談相手】、【安心感を与える関わり】、【受容的・共感的な関わり】、【状況や心情を踏まえた関わり】、【他の利用者を巻き込んだ歓迎】、【交流の見守り】と推察できた。

最後に、各項目の関連性などを含めて、量的データの収集・分析から実証的に検討し、第Ⅱ章の量的調査との関連を明らかにしていくことが求められる。

2. 「親としての成長」について

(1) 利用者対象の調査項目(質問項目)

利用者へのヒアリング(聞き取り)調査は「拠点を利用してからの自身の考え方や行動の変化」、「自身の変化と拠点を利用したこととの関係」、「拠点を利用し始めてから自分の役割に関して考え方や行動の変化」、「自分の役割についての考え方や行動の変化と関係のある事柄」の質問を構成的に聞き取られる方法で行われた。

なお、「自身の変化と拠点を利用したこととの関係」の11項目は「1. 子連れでの外出に関すること」「2. 家での子どもの世話」「3. 家での育児以外の家事」「4. 子どもからのサインやニーズへの対応」「5. その他の日常生活(趣味など)」「6. 働き方について/職場の人との関係」「7. 家族との関係」「8. 近所の人(自治会などの関係も含めて)との関係」「9. 拠点で出会った利用者との関係(拠点内・外での)」「10. 拠点スタッフとの関係」「11. その他」である。

(2) 分析手続き

回答項目の分割(セグメント)

各質問項目に対して語られた(回答された)内容を文字化した。文字化は語られた内容から、その質問項目に関連する語りを抜き出す方法で行われた。文字化された語り(データ)をセグメントに分割し、質問項目と関連があるセグメントを中條委員が抽出した。セグメントの分割は元の語られた内容の意味を失わないように十分に配慮しながら行われた。

「親の成長」に関する理論モデルから概念抽出

分析については、「親の成長について」一部愛着理論モデルから、①安全基地の獲得、②愛着対象、③安定した愛着スタイルの獲得(感受性と応答性)、④愛着の世代間連鎖などの概念を参考に行った。

愛着理論は乳幼児の発達に関する概念である。この理論を親の成長に当てはめようとするのは理論的な妥当性には疑問がつく。一方で「親年齢」は「子ども年齢」と同じであり、親としての不安や危機を抱えた場合、安心や安全を求めて対象となる場所や人を求めることは本能的な行為である。加えて、近年では青年期・成人期のアタッチメントが現在も研究されているが、この時期の愛着対象との出会いがそれまでの愛着スタイル、すなわち形成されたテンプレートに修正を加える可能性があることも検証されつつある。鯨岡(2002)は、出産から乳幼児期の子どもを育てる親は「育てられる者から育てる者」へ立場が変わり、それは「コペルニクスの転換」であるとも指摘しており、親世代に愛着理論を適応することには一定の妥当性があるもの判断した。今回の研究の意義を高めるため、一定理論的な証左がある愛着モデルを参照することとした。

セグメントの抽象化(コーディングとカテゴリー化)

中條委員が抽出した分析担当者の倉石が慎重に確認を行い311のセグメントが分割された。分割されたセグメントについて倉石がコーディングとカテゴリー化によって抽象化の作業を行った。コーディングされたセグメントについてカテゴリー化を行った結果63カテゴリーに分類された。更に63のカテゴリーを抽象化させるために類似する概念についてグループ化を行った。その結果、最終的に13の上位カテゴリーに分類された。13の上位カテゴリーは「1. 安全基地と安全な避難場所の獲得」「2. 親の愛着対象の認識と獲得」「3. セルフケアの意識」「4. 養育力の獲得」「5. 他者に頼る力」「6. 子どもの育ちを分かち合える仲

間の獲得」「7. 経験を活かした自己実現への意識の高まり」「8. 肯定的な養育イメージの獲得」「9. 親世代との関係の見直し」「10. 将来展望の獲得」「11. 配偶者との関係の見直し」「12. 職業観の獲得」「13. 他者への貢献意識の獲得」となった。

表 3-7 カテゴリー分類表

| カテゴリー | サブ・カテゴリー | セグメント(代表的な語り) | |
|-------|---------------------|-------------------------------|--|
| 1 | 安全基地と安全な避難場所の獲得 | 拠点が安心・安全基地として感じようになる | ・外出することが増えた ・外出への心理的ハードルが下がった ・出かけることがライフワークになる ・受け入れてもらっていると実感できて子育てが楽しくなった |
| | | “ひろばがあるから大丈夫”安全基地がある安心感 | ・子育ても私だけではできないし、周りの人といっしょに育てるのがよい気がしている |
| | | “ひろばがあるから大丈夫”拠点を安全基地にした交流の芽生え | ・周囲にママ友はいないし、近所に子どもはいないため、拠点で子育て仲間と出会えた ・顔見知りが増えて、スーパーなどで出会っても気軽に声をかけられるように ・外で偶然出会って、立ち話ができるように |
| | | 安心感・安全感の獲得 | ・近所の小さい子がいる家庭に、拠点のことを教えてあげた ・誘い合って利用するようになり ・家を行き来して遊ばせたりしている ・困った時にお互いに助け合う雰囲気 ・何かあった時に、相談したり、助けてと言える関係の人ができる |
| 2 | 親の愛着対象の認識と獲得 | 愛着対象としてのスタッフの存在を認識 | ・一緒に悩んで一緒に答えを出してくれる人と感じる ・頼ってよい人であると身近に感じている ・第二のお母さんのように、拠点のスタッフさんは優しさが伝わってくる ・先生方のおかげで、自分の気持ちが保てているところがある ・愚痴を聞いてもらえる人ができた |
| | | 愛着の回復対象の存在 | ・相談してみようと思えるようになった |
| | | 愛着対象の獲得 | ・いろんな人に助けてもらおうと思える |
| 3 | セルフケアの意識 | 生活リズムの安定 | ・時間配分も自分できるようになり、自分の生活にメリハリができた |
| | | ストレスの発散 | ・夫の愚痴を言い合えてスッキリできる ・ストレスを発散できて、充実した時間を過ごしている |
| | | セルフケアの意識 | ・ヨガにいっしょに行かないかと誘われて行ってみた。初めてだったが、体を動かして気持ちが良かった ・おしゃべりは一切興味ない人生を送ってきた、何年も同じ服をきていたが、雑誌をみたり、おしゃべりをする機会もできて、新しい洋服を買ったことは大きな変化 ・ほどほどに家事をして、外出する時間や子どもとじっくり過ごせる気持ちのゆとりを作ることが大事だと考えるようになった ・手を抜くことを覚えて、自分でも優しくなれたと思う ・その結果、子どもと楽しく過ごせるようになった |
| 4 | 養育力の獲得 | 情緒的なゆとりの獲得ー強迫的育児からの解放 | ・センターでしっかり遊んで家でお昼寝をするようになったので生活リズムができて良かった ・午前中に拠点利用できるように、片付けを早く済ませるようになった ・生活が規則正しくなった |
| | | 生活リズムの獲得 | ・好きな遊びなど、子どもの好みが変わるようになった ・子どもの体調や気持ち、ペース、何を望んでいるのか、といったことを考えるようになった ・子どものやりたい気持ちを肯定しながらも、子どもが理解できるように根拠強く対応できるようになった |
| | | 子どもの理解 | ・他の子どもを見る、知ることで、子どもの出すサインに対して戸惑いが少なくなった ・子どもからのサインに寄り添えるようになった。子どもの要求や気持ちを聞き、それに対して応えてあげようと思うようになった ・自分のやりたいことと子どものやってほしいことがぶつかると自分優先だったが、子どものサインやニーズを出したらその場で受け止めるようにしている ・拠点に来ると(子どものサインを)キャッチしてあげられる。子どももキャッチしてもらえて、ここに来ると穏やか、楽しそう |
| | | 感受性と応答性の高まりーアタッチメントの安定 | ・サインやニーズを出していることに気付けるようになってきた ・子育てに余裕がでてきた ・子どもの体調やペース、気持ち、子どもの目線になって考えよう、子どもの気持ちを大事にしようと思わった |
| | | 子どもとの波長あわせ | ・他の子どもに興味を示すようになり、自分より小さい子どもの頭をよよしとしに行く様子を見ていて、お兄ちゃんになったと成長を感じる ・子どもが場所にも慣れて先生になつて、子どもが大好きでいてくれるので、少し離れたり預けたりできるようになった |
| | | 子どもの成長を感じる | ・人に任せられるようになった ・以前は全部自分がやらなくてはと思っていたが、ひとりでやらなくていいと考えるように変わった |
| 5 | 他者に頼る力 | 他者に頼る力 | ・陰で支えてくださっている人がいることに気が付いた ・声をかけられるようになった |
| | | 自分を取り巻く環境への意識の芽生え | ・子どもと一緒に喜んでくれる ・家族以外に、子どもができるようになったことを伝えたい、 |
| 6 | 子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得 | 子どもの育ちを分かち合える | ・友達のように身近な存在になった |
| | | 身近な仲間としてのスタッフ | ・子どもが成長を一緒に喜んでくれる ・私も子どもも徐々に落ち着いてきて、子どもも楽しそう、嬉しい ・子どもが楽しそうにしていることもうれしく、子どもがいるから楽しい日々を過ごせると思えた |
| 7 | 経験を活かした自己実現への意識の高まり | 親としての落ち着き・情緒的安定 | ・子育てが楽しいと感じる ・子どもにとって良いことはしなくてはならないと思っていたり、育児の本ののとおりしなくてはカチカチに考えていたが本の通りにはならない ・その都度やってみてダメならダメと柔軟になった ・その親子にとって違う。答えはない ・自分も親として育つんだと思えるようになった |
| | | 親意識の変化 | ・他の子にも人気のあるお母さんになった |
| | | 自尊感情の高まり | ・温かく感じられるようになった ・子どものことや母になった自分の事を知ってくれる人がいるのは心強い ・スーパーのレジの人とも挨拶だけでなくしゃべるようになった ・社会の一員として他人に喜んでもらえる機会がある |
| | | 自己の内的変容 | ・子育てのために仕事を辞めるとか、夫の転勤で任んでいる地域を離れるということがあって女の人ばかり損をしているというネガティブ思いがあったが、(拠点の利用で)自分の視野や趣味が広がった ・自分が成長したと感じる |

| | | | |
|----|-------------------------|-----------------------------|--|
| | | 自己能力(概念)の再獲得 | <ul style="list-style-type: none"> 何かを任せられることに対するやりがいを感じる 拠点で新たな自分を見つけられた 仕事の現場に戻ったら生かせると思う また働きたいと思えるようになった いずれ働きたい、がんばろうと思うようになった |
| | | 自分の経験を活かす | <ul style="list-style-type: none"> 子育て以外の自分の時間が持てるようになった 子どもが寝てから絵を描くようになった 自分の特技も提供する機会を得た 学生時代吹奏楽 拠点で披露する機会が得られた 家で練習している |
| | | (経験を活かした)自分の居場所を発見する | <ul style="list-style-type: none"> 英会講の講師、よみきかせなどイベント主催側として関われるようになったのは自分の楽しみとやりがいにもなっている 自分の居場所ができたと思える 自分にも行きたいところがあったり、楽しい場所があった |
| 8 | 肯定的な養育イメージの獲得 | 肯定的な養育イメージの獲得 | <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが遊ぶ様子を穏やかに見ることができるようになった |
| | | 子育てへの肯定的意識の変化 | <ul style="list-style-type: none"> 笑顔の多い親子を手本にする |
| | | 子どもへの関わりの変化ー新たな養育イメージの獲得 | <ul style="list-style-type: none"> 自分の考え方を変えようと思った 子どもの感性を大切にしたいな、子どものやりたいようにさせてあげたいなと思った |
| 9 | 親世代との関係の見直し | 親との関係の見直し | <ul style="list-style-type: none"> 親と同じようにすることが、必ずしも自分たちに合っているとは限らないと思うようになった 自信の親との関係を修復した |
| | | 親世代との関係の見直しと変容 | <ul style="list-style-type: none"> 実母が自分の母親のモデルになっていると思うが、違和感とどんどん増している 実母が手本と示す母親像は、古く、現実離れしており、自分はやれていない 実母とのやり取りにストレスを感じるが増えている 実家が近くの人、祖父祖母にサポートしてもらっている話などを聞いて、おじいちゃんおばあちゃんにも頼っていいんだと思った |
| 10 | 将来展望の獲得(親としての将来イメージを持つ) | 親展望の獲得 | <ul style="list-style-type: none"> 小さい間は子育てに専念したいと思うようになった'拠点に来る前は、家事を毎日きちんとし、旦那さんがいるときは家にいて、子どもが声を出さないようにする、みたいに頑張ってたこと(悪循環)に気づいた'という親意識の確定であり、それは |
| | | 子ども中心にシフトする | <ul style="list-style-type: none"> 結婚を機に退職し、子どもの中心に生活になるのにも悪くないなと思った 子育てが楽しいと感じているので仕事を減らして子育て優先の生活スタイルを選んでいる |
| | | 見通しが持てるようになる | <ul style="list-style-type: none"> 先の見通しができる |
| | | 将来の展望が持てる | <ul style="list-style-type: none"> 手に職をつけたい、自分も勉強したい成長したいと思った マタニティヨガ、ベビーマッサージの資格を取ろうと思って勉強中 うまくいけば拠点でイベントをやりたい、今の生活を肯定的に思う 手作りに興味が出てきてつくってみようかなと思っている |
| | | 職業人、主婦としての展望 | <ul style="list-style-type: none"> 今はお母さんでない時間を持つのもいいのではと復職に前向きになり、根拠のない自信を感じた 復職した先輩お母さんの話を聞いたり、大変だけど充実している姿を見た 外に働きに行く選択肢を考えるようになった 今、ゆったりと過ごす中で、そんなにバリバリ働かなくてもいいのではないかと、じっくり子育てするのもいいのではと思いはじめた 会社への執着がなくなっている 今の環境でラッキーと思えるようになり、自分自身がゆるくなったと感じる |
| | | 多様な養育イメージに触れる | <ul style="list-style-type: none"> 拠点を利用して多様な価値観に触れられて自分の価値観も変わった |
| | | 家庭・養育イメージの獲得ー自分自身 | <ul style="list-style-type: none"> 周りのお母さんたちの話をいろいろと聞き、家庭もいろいろあると思うようになった 自分らしい家族像について、考えられるようになってきた |
| 11 | 配偶者との関係の見直し | 子どもの成長を伝える。共有できる | <ul style="list-style-type: none"> 子どもの反応や出来たことを夫にも教えてあげたいと思う 預かり中の様子を書いた紙をテーブルにおいて、食事時に家族で話している |
| | | 配偶者を拠点に取り込む | <ul style="list-style-type: none"> 話のバリエーションが増えた 実際に夜のひろばに夫を連れて行って他の利用者を紹介した 拠点で他の家庭や子どもの姿を知ること夫婦の会話の中で伝えていくようにしている パパが子どもと拠点に出かける日があり、ママのリフレッシュにもなる 積極的に夫が拠点にいってくれるようになった |
| | | 夫婦関係についての意識の変化 | <ul style="list-style-type: none"> 支援センターでのおしゃべりを聞きながら、自分が夫にすいぶんと遠慮していたことに気づいた 夫優先ばかりでなくてもいいと思え、自分の考えを言ってもいいと思えるようになった 喧嘩が減った 自分が思っていたものとは異なる夫婦関係もあるのだとわかった 家事育児は妻の仕事と、家のことをすべて一人で抱え込んで悪循環になっていたが、共有することも大事だと思うようになった 子育てが自分の中のメインになったので、今までのように夫にできなくなったが、疲れたから洗い物をしてもらうなど、弱みをみせられるようになった 言いたいことを発散しつつ過ごした方がいいと思えた |
| | | 配偶者との関係の変容 | <ul style="list-style-type: none"> 夫との会話がなくなった 自分だけがやらなくては思っていたが、夫がもう少し子どもをみてくれるといいと思うようになった 主人に対して寛容になった 少し優しくなった 私が大変なことがわかってきて、子どもに接する時間も少し作ってくれるようになった 自分も友達と楽しく過ごすことができるようになり、夫の友人関係を受け止められるようになった 子どもが生まれてから、夫は昼間、きちんと眠ることができなくて、機嫌が悪いことが多く、喧嘩ばかりしていた 拠点に行くようになって、お互いの生活リズムがうまく回りだし、夫婦喧嘩がなくなった |
| | | 子どもの情報の隔たりに対する葛藤ー単身赴任、長時間労働 | <ul style="list-style-type: none"> 夫は単身赴任で時々帰ってきて子どもに会うくらいだから、子どもへの情報量の差がものすごくあって |
| | | 職場の理解と養育表象の相互往復 | <ul style="list-style-type: none"> 保育者に預けて働くのが当たり前 子どものこともそもそも理解がある職場だった 職業人だけでなく、家庭人、地域人だと実感でき、メリハリができた 娘が1歳になる前から、職場復帰 土日どちらから出勤 その時は夫が見ている 勤務体制など融通を利かしていただいているので、会社にお詫びをすることが多くなり、まるくなった |
| 12 | 職業観の獲得 | 職業への意欲 | <ul style="list-style-type: none"> (復職した)お母さん方の体験談を聞いて、責任を持って仕事をしたい 会社に恩返ししたい |
| | | 多様な職業観に触れて自己と向き合う | <ul style="list-style-type: none"> 様々な働き方があることを拠点利用者の声を聞いて勉強になった 育休中のお母さんたちの保活の話や話を聞くと、「もう少し働いていた方が良かったかなあ」と思う |
| | | 地域への視野の広がり | <ul style="list-style-type: none"> 同じくらいのお子さんをみると拠点を紹介したくなる・近所の人を拠点につれてきている 周囲の人の様子も気になるようになった 道であたらあいつなどをやるようになった まつりや行事に参加することは増えた |
| 13 | 他者への貢献意識の獲得 | 地域の自分を意識 | <ul style="list-style-type: none"> 近所に自分たちの名前を覚えてくれている人がいて嬉しいと感じるようになった |
| | | 他者への関心と関わりの芽生え | <ul style="list-style-type: none"> 困っている人がいたら自分から声をかけるようになった 新生児の泣き声をきくと可愛いと思える ご近所に困ったら助けてと言え(助けを求められる)場所(人)がある |
| | | | |

| | | |
|--|-------------------------|---|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・ある程度の距離感を保ちながらの人と関わり方を知った ・近所にとってわが子が10年ぶりに生まれた赤ちゃんなのでますます声がかかる ・拠点利用とは関係はないと思っている ・もともと気軽に付き合いができている。昔ながらの親せきのつながりがある ・いろんな人と知り合って、立ち話をしたり、家にお邪魔することもたまにある |
| | (拠点とは関係のない)元々の地域の繋がりの意識 | |
| | 地域や他者への関心と愛着対象の広がり | <ul style="list-style-type: none"> ・自分から話しかけることができるようになったり、あいさつをするようになった ・今のよう人間関係って「すくいいよな」と思う ・橋渡しをしたいと思うようになった ・いろんな人に甘えながら、相談しながらと思えるようになった ・今来ている誰かに聞いてみてあげるよ、と言ってもらえる ・自分の知り合いが増える |
| | 地域の他者への見守り意識の芽生え | <ul style="list-style-type: none"> ・他の人のことを考えられるようになった ・自分の子どもを見てもらうだけでなく、自分も見守ろうと思えるようになった |
| | 他者・地域への貢献意識の獲得 | <ul style="list-style-type: none"> ・拠点のボランティアという趣味ができた ・自分が皆にしてもらったことを次の人たちに返したい ・自分がしてもらったことを今度は誰かの役に立てばうれしい ・パニック状態だった自分を支えてくれたと感じている。自分も役に立ちたいと思っている ・地域に貢献したいと思っている ・拠点を知らない人がいたら、声をかけてあげようと思ひ、同じような親子に、声をかけられるようになった |

(3) 「親への成長」の概念生成の手続き

コーディングとカテゴリー化によって13の上位カテゴリーが生成された。それぞれのカテゴリーについてサブ・カテゴリー、セグメントを取り上げながら説明する。まずカテゴリーを形成するサブ・カテゴリーを説明し、次にサブ・カテゴリーについて、構成する語りの中から代表的なセグメントを交えて説明する。なお、サブ・カテゴリーの説明は、インタビューに回答した多数の母親の語りから切片化されたセグメントを並列して説明している。一人の母親が語っているような文脈に見える箇所があるが、類似したセグメントを並列することで、サブ・カテゴリーが現実感を高めて理解されるようにその方法を用いたことをお断りしておく。

1. 安全基地と安全な避難場所の獲得

安全基地はボウルビー (J.Bowlby) の愛着理論を発展させたアインスワース (Ainsworth) が1982年に提唱した人間の愛着行動に関する概念である。こころの安全基地とも呼ばれ、「いつでも頼ることができる」と日常的に存在が意識され、利用可能性が高いと感じられるは場所あるいは人を指す。一方、安全な避難場所は Hazen&Zeifman (1997) が提唱した愛着行動の概念で、「落ち込んだり必要なときに頼りになる」と意識することができる場所である。ここでは「安全基地・安全な避難場所の獲得」を「日常的存在意識され利用可能性は高く(基地)、困ったことがあれば直ぐに頼ることができる(避難場所)」とし、「安全基地と安全な避難場所の獲得」とは子育て家庭が身近な場所でいつでも利用ができ、かつ困ったときには頼ることができる場所として拠点を意識できる状態と説明できる。

「安全基地と安全な避難場所の獲得」は【拠点が安心・安全基地とを感じるようになる】【“ひろばがあるから大丈夫”安全基地がある安心感;】【“ひろばがあるから大丈夫”拠点を安全基地にした交流の芽生え;】そして【安心感・安全感の獲得】のサブ・カテゴリーから構成される。

拠点の利用者は【拠点が安全基地・安全な避難場所と感じられるようになる】ことを、‘外出することが増えた 外出への心理的ハードルが下がった’‘出かけることがライフワークになる’‘受け入れてもらっていると実感できて子育てが楽しくなった’と表現している。【“ひろばがあるから大丈夫”安全基地がある安心感;】は‘子育ても私だけではできないし、周りの人といっしょに育てるのがよい気がしている’と仲間がいることの安心感を抱くようになり、【“ひろばがあるから大丈夫”拠点を安全基地にした交流の芽生え;】では、‘周囲にママ友はいないし、近所に子どもはいないため、拠点で子育て仲間と出会えた’と居住地域に不安を抱く利用者の気持ちの変化が語られ、別の利用者は、拠点を知り利用することで‘顔見知りが増えて、スーパーなどで出会っても気軽に声をかけられるようになり、’外で偶然出会って、立ち話が

できるようになったと語っている。こういった安心できる出会いが近所で広がり‘近所の小さい子がいる家庭に、拠点のことを教えてあげた’と‘誘い合って利用するように行動面の変化も見られ、やがては‘家を行き来して遊ばせたりしている関係に発展し‘困った時にお互いに助け合う雰囲気’を感じながら‘何かあった時に、相談したり、助けてと言える関係の人ができる拠点を安全な避難場所とも捉えるようになり、居住地域に【安全基地と安全な避難場所の獲得】が為されていることがわかる。

一方で、【安全基地にはなり得ていない思い】【拠点への否定的－拒否的印象】【拠点を利用しようとしていない母親への理解】といった語りもある。‘仲の良い人たちがグループになって入りにくい雰囲気だったから行かないという返事が返ってきてとてもショックだった’‘ここで見かけた人に外であったとき、どうしたらいいか迷う。むずかしいと感じている。ここで仲良くしていたら声はかけるとは思う’と拠点を利用する全ての人が拠点での人間関係に安心感を抱いていないことや、‘自分がよかれと思ってしていることが、別の人にとってはつらいことだ’という事がわかった’と拠点を利用する際の相手の立場を尊重するような意見もある。

しかし、多くの利用者の語りから拠点を利用することが多くの利用者にとって「安全基地と安全な避難場所の獲得」に繋がる効果が確認できている。

2. 親の愛着対象の認識と獲得

ボウルビーによれば愛着対象とは、乳幼児が不安や危機を感じたときに情緒的な安定を取り戻すことができる存在のことを指す。愛着対象が認識できることで、乳幼児は他者への信頼（助けてもらえる存在）、自己信頼（助けを得ることができる存在）、社会信頼（社会は自分を支えてくれる）といった信頼系を獲得すると考えられている。乳幼児と親の成長過程は一致しないが、親に経験年齢（期間）と第一子年齢が一致すると考えれば、親として不安や危機を感じる際に愛着対象の存在を認識できることは「1. 安全基地と安全な避難場所の獲得」と連動していると考えたい。

「親の愛着対象の認識」は、【愛着対象としてのスタッフの存在を認識】【愛着の回復対象の存在】【愛着対象の獲得】のサブ・カテゴリーから構成される。【愛着対象としてのスタッフの存在を認識】では、‘一緒に悩んで一緒に答えを出してくれる人と感じる’‘頼ってよい人であると身近に感じている’‘第二のお母さんのように、拠点のスタッフさんは優しさが伝わってくる’‘先生方のおかげで、自分の気持が保てているところがある’‘愚痴を聞いてもらえる人ができた’と自分が子育ての不安を抱えているときに第二のお母さんのように話を聞いてもらい気持ちが保てたと、拠点スタッフを愛着対象として認識していることが窺える。このようなスタッフの存在感が、ある親には‘相談してみようと思えるようになった’（【愛着の回復対象の存在】）という思いとなっていることがわかる。また別の親からは‘いろいろな人に助けてもらおうと思える’（【愛着対象の認識と獲得】）と愛着の対象がスタッフだけでなく、いろいろな人へと広がりを見せていることが語られている。

拠点のスタッフは親になって数ヶ月から 1・2 年の利用者にとっての愛着対象として認識されており、親として子どもと向き合うための情緒の安定を回復させるための重要な役割を果たしているといえる。

3. セルフケアの意識

母親は出産と同時に乳児のケアに 100%自分のエネルギーを注がなければならない。しかし、子どもをケアできるようにするためには、ケアされるあるいは自身でケアを意識することも必要である。利用者の

語りからは自らをケアする意識が窺える。

「セルフケアの意識」は、【生活リズムの安定】【ストレスの発散】【セルフケアへの意識】のサブ・カテゴリから構成されている。拠点を利用することで「時間配分も自分できるようになり、自分の生活にメリハリができた」【生活リズムが安定】し、生活にメリハリがついたと感じられるようになっている。【ストレスの発散】はセルフケアには不可欠であり、「夫の愚痴を言い合えてスッキリできる」ストレスを発散できて、「充実した時間を過ごしている」と、拠点で利用者がスッキリした気持ちや充実した時間を意識することができていることがわかる。また別の親は、「ヨガにいっしょに行かないかと誘われて行ってみた。初めてだったが、体を動かして気持ちが良かった」おしゃれは一切興味ない人生を送ってきて、何年も同じ服をきていたが、雑誌をみたり、おしゃれの話をする機会もできて、新しい洋服を買ったことは大きな変化と拠点を利用することでケアの行動に結びついたことが語られており【セルフケアへの意識】は高まったと推測できる。

親としてセルフケアを意識できるようになることは自己管理の意識にも繋がると考えられる。

4. 養育力の獲得

親は第一子を出産し親になってから養育力を獲得すると考えられているがそうではない。古来は地域や親族の中で共同養育が行われており、親になる前から乳幼児と接する機会があり、また乳幼児を育てる親の姿を身近に見ることで親準備性と呼ばれる態勢ができていたと考えられている。抱っこ、赤ちゃん言葉、あやし、遊びなどのモデルが家族や身近な地域社会にあり、子守（こもり）のように直接に乳幼児の養育に関われることで自然に育児の手技を獲得できていた。

反して現代社会では共同養育の機会が失われ、乳児を抱っこするのはわが子が初体験という親が多い。出産をしてから養育力を獲得することは、心身の健康が十分に回復していないままに乳児のケアをしなければならぬ産婦にとっては苦行になりかねず、産後のうつ等産後クライシスなども結びつきやすい。

では、拠点ではどのように養育力が獲得されているのだろうか？

「養育力の獲得」は【情緒的なゆとりの獲得—強迫的育児からの解放】【生活リズムの獲得】【子どもの理解】【感受性と応答性の高まり—アタッチメントの安定】【子どもとの波長あわせ】【子どもの成長を感じる】のサブ・カテゴリから構成されている。

【情緒的なゆとり—強迫的育児からの解放】は拠点を利用する他の親とのやりとりから得ている体験であろうと推測できるが、「ほどほどに家事をして、外出する時間や子どもとじっくり過ごせる気持ちのゆとりを作ることが大事だと考えるようになった」手を抜くことを覚えて、自分でも優しくなれたと思う。その結果、子どもと楽しく過ごせるようになった」とよい意味で育児や家事にかかる手間を省いて自身のゆとりを持つことの大切さに気づくこととなっている。【生活リズムの獲得】は「センターでしっかり遊んで家で昼寝をするようになったので生活リズムができあがった」や「午前中に拠点利用できるように、片付けを早く済ませるようになった。生活が規則正しくなった。」と拠点を利用することが生活にリズムを作り出し、親がそのリズムを実感できるように語りとなっている。【子どもの理解】では、拠点では子ども遊びの様子を、他の親子の様子と交えて一步距離を置いて見ることができるので、「好きな遊びなど、子どもの好み分かるようになった」子どもの体調や気持ち、ペース、何を望んでいるのか、といったことを考えるようになった」と子ども理解を促す機会が語られている。【感受性と応答性の高まり—アタッチメントの安定】は親子の愛着形成の中核をなす親の愛着スタイルの一つである。このサブ・カテゴリは、親の

語りから多くのセグメント（13）が抽出された。長くなるが、養育力の獲得の中心的な概念と考えられるため、その語りの一部を紹介する。‘子どものやりたい気持ちを肯定しながらも、子どもが理解できるように根気強く対応できるようになった’他の子どもの見る、知ることで、子どもの出すサインに対して戸惑いが少なくなった’子どもからのサインに寄り添えるようになった。子どもの要求や気持ちを聞き、それに対して応えてあげようと思うようになった’と、子どもの発するサインから、求めているであろうこと（ニーズ）を感受し、そのニーズに余裕を持って応答できる親の様子が浮かび上がる。また、‘自分のやりたいことと子どものやってほしいことがぶつかると自分優先だったが、子どものサインやニーズを出したらその場で受け止めるようにしている’以前の（決して高くなかった）応答性を振り返り、現在は応答性が高まったことを自覚できている語りもある。そして‘拠点に来ると（子どものサインを）キャッチしてあげられる。子どももキャッチしてもらえて、ここに来ると穏やか、楽しそう’と拠点が安定した愛着スタイルの獲得を体験できる場となっていることがわかる。愛着スタイルの安定は【子どもとの波長あわせ】の体験にも効果を及ぼしていることがわかる。‘サインやニーズを出していることに気付けるようになってきた。子育てに余裕がでてきた’とゆとりを持ち、‘子どもの体調やペース、気持ち、子どもの目線になって考えよう、子どもの気持ちを大事にしよう’と変わった’と子どもに波長を合わせることが自分にとっても楽になるという体験を獲得できている。【子どもの成長を感じる】では‘他の子どもの興味を示すようになり、自分より小さい子どもの頭をよしよしとしに行く様子を見ていて、お兄ちゃんになったと成長を感じる’子どもが場所にも慣れて先生になついで、子どもが大好きでいてくれるので、少し離れたり預けたりできるようになった’と、子どもとの安定した関係が作り上げられ、子どもと向き合いながら関係を育てる力が身につけていることを自覚できていることがわかる。

親は子どもに「上手に」関わられるようになってきているのではない。子どものニーズやペースに合わせることで自分にとっても楽になるし親子で楽しく過ごすことが出来ると感じられるようになってきている。この感受性と応答性の高まりこそが親子の愛着関係を育て、親の養育力獲得の基盤になると考えられる。養育力が獲得できる場を地域社会に広げることがわが国の急務の課題であり、拠点はその役割を果たしていることがこのカテゴリーから理解できる。

5. 他者に頼る力

子育ては親一人ではできない。古くは地域社会の中に親子を支える仮親が存在したように、親は身近な大人の力を借りながら子どもを育てていた。子どもにとって身近な大人が多く関わることは、愛着や協調性を育てる意味で重要である。【他者に頼る力】は親が自らの子育て力を高めるためにも大切な力である。

「他者に頼る」は【他者に頼る力】【自分を取り巻く環境への意識の芽生え】のサブ・カテゴリーで構成される。【他者に頼る力】は‘人に任せられるようになった。以前は全部自分がやらなくてはと思っていたが、ひとりでやらなくていいと考えるように変わった’であり、育児を一人でやらなければいけないという親の強迫的ともいえる意識に転換を起こすことが必要だと自覚できていることが理解できる。【自分を取り巻く環境への意識の芽生え】は、拠点で人の目に付かないところで働いているボランティアに眼が行くようになり、‘陰で支えてくださっている人がいることに気が付いた。声をかけられるようになった’と感じられるようになった言葉から推測される。自分の知らないところで支えられているということに気づくことで、他者への感謝の気持ちが芽生え、他者に頼る力を獲得することに繋がるのではないだろうか。

6. 子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得

仲間の獲得は、共同養育や養育モデリング、地域の親としての同僚性の確保といった点で親の成長には不可欠である。「2. 愛着対象の認識」で述べているように、拠点のスタッフや利用者は、親にとっての愛着対象としても認識できるが、愛着対象と仲間との線引きは難しい。しかし「仲間」は、愛着対象とは別に必要な存在として考えると親の成長する時の人間関係や世界の広がりとして説明ができる。「仲間」は愛着対象のように情緒的な安定を取り戻す対象とは違い、話し相手であり、子どもの成長を伝え合う相手としてフラットな関係として捉えるような存在として意味があると考えられる。

「子どもの育ちを分かり合える仲間の獲得」は【子どもの育ちを話して分かち合える】【身近な仲間としてのスタッフ】のサブ・カテゴリーから構成される。【子どもの育ちを話して分かち合える】は‘子どもの成長と一緒に喜んでくれる利用者を‘家族以外に、子どもができるようになったことを伝えたい、と思うようになった相手として認識できるようになっている語りである。【身近な仲間としてのスタッフ】は‘友達のように身近な存在になったスタッフであり、親しみを持つ仲間として関係を作ろうとすることで、親自身の人間関係や世界の広がりにつながっていると推察できる。

7. 経験を活かした自己実現への意識の高まり

利用者は拠点という安全基地・安全な避難場所を持ち、そこでスタッフを愛着対象としながら、子どもの育ちを分かち合う仲間を獲得することを通して、情緒的に安定し自分との対峙を始めている。

「経験を活かした自己実現への意識の高まり」は【親としての落ち着き・情緒的安定】【親意識の変化】【自尊感情の高まり】【自己の内的変容】【自分の成長への気づき】【自己能力（概念）の再獲得】【自分の経験を活かす】【（経験を活かした）自分の居場所を発見する】をサブ・カテゴリーとして構成している。

【親としての落ち着き・情緒的安定】は、‘すごく気持ちが落ち着いて、子どもが遊んでいるのを見られるようになった’私も子どもも徐々に落ち着いてきて、子どもも楽しそうで、嬉しい’子どもが楽しそうにしていることもうれしく、子どもがいるから楽しい日々を過ごせると思えた’と拠点が親にも子どもにも落ち着く場所になり、そのことに楽しさや喜びが表れている。この肯定的な気持ちは、‘子育てが楽しいと感じる’ようになり、‘子どもにとって良いことはしなくてはならないと思っていたり、育児の本のとおりしなくてはとカチカチに考えていたが本の通りにはならない。その都度やってみてダメならダメと柔軟になった。その親子にとって違う。答えはない’と子育てへの意識の変化をもたらし、‘自分も親として育つんだと思えるようになった’、と【親意識の変化】に繋がる。また親の情緒的安定と子育てへの親意識の変化は、‘他の子にも人気のあるお母さんになった’と【自尊感情の高まり】にも繋がっている。

【自己の内的変容】は、その結果として自分や他者からの言葉によって気づくことである。拠点にいて自分で自分の気持ちの緩やかな変容を感じた語りとして、‘温かく感じられるようになった。子どものことや母になった自分の事を知ってくれる人がいるのは心強い’や拠点以外の他者との関わりの変化への気づきとして、‘スーパーのレジの人とも挨拶だけでなくしゃべるようになった’‘社会の一員として他人に喜んでもらえる機会がある’といった発言から読み取れる。こういった内的変容は‘スタッフとの関係性や場の力。拠点に来たことで救われた’と改めて拠点を利用することで起きている自分の気持ちを内省することから始まっているのではないかと推測できる。

【自己の内的変容】は【自己能力（自己概念）の再獲得】をもたらしている。それは、‘何かを任せられることに対するやりがいを感じる’‘拠点で新たな自分を見つけられた’‘活躍できる場を提供したり、利用者

同士をつなぐ」といった役割獲得による充実感を得て、「仕事の現場に戻ったら生かせると思う。また働きたいと思えるようになった」「いずれ働きたい、がんばろうと思うようになった」といった自己概念の肯定的な変容をもたらしている。拠点の利用者の中には「子育てのために仕事を辞めるとか、夫の転勤で住んでいる地域を離れるということがあって女の人ばかり損をしているというネガティブ思いがあったが、(拠点の利用で)自分の視野や趣味が広がった。といった子育てによって強いられることへの不安や不満といったネガティブな意識が変容し、「自分が成長したと感じる」(【自分の成長の気づき】)ことができるようになることが語られている。【自己能力(自己概念)の再獲得】によって、「子育て以外の自分の時間が持てるようになった」「子どもが寝てから絵を描くようになった」と自分の好きなことに取り組む余裕が生まれ、「自分の特技も提供する機会を得た。学生時代吹奏楽。拠点で披露する機会が得られた。家で練習している」といった【自分の経験を活かす】気持ちや考えが行為として現れる結果となっている。

こうした親自身の意識や自己イメージ(自己概念)の変容はやがて、「英会講座の講師、よみきかせなどイベント主催側として関わられるようになったのは自分の楽しみとやりがいにもなっている」「自分の居場所ができたと思える」「自分にも行きたいところができたり、楽しい場所ができた」といった自分の居場所を得て【経験を活かした自己実現への意識の高まり】への繋がっていることが理解できる。

8. 肯定的な養育イメージの獲得

「肯定的な養育イメージの獲得」は、【肯定的な養育イメージの獲得】【子育てへの肯定的意識の変化】【子どもへの関わりの変化-新たな養育イメージの獲得】のサブ・カテゴリーから構成される。

【肯定的な養育イメージの獲得】は「子どもたちが遊ぶ様子を穏やかに見ることができるようになった」と一歩離れることで子どもを見守る自身の穏やかさに気づく言葉で語られており、「笑顔の多い親子を手本にする」といった【子育てへの肯定的意識の変化】や「自分の考え方を変えようと思った。子どもの感性を大切にしたいな、子どものやりたいようにさせてあげたいなあとと思った」というような【子どもへの関わりの変化-新たな養育イメージの獲得】に繋がっていると推測できる。親が安心・安全な基地としての拠点の中に居場所を確保し養育力が高まる中でこそ実感できる、親として子どもと向き合うイメージであり親子像であろう。

9. 親世代との関係の見直し

利用者にとって安全基地・安全な避難場所としての拠点で、守られている支えら得ている心地よさを体感することで、親は他者に頼ることを「善し」と思えるようになっていく。仲間に支えられ、自己実現意識が高まり、肯定的な養育イメージが獲得されるに従い、自分は自分という自己信頼が生まれ、ようやく呪縛となっていた実親との関係を見直すことができるようになるのではないだろうか。今回のインタビューの語りの中で、親世代との関係についての語りも得ることができた。

親世代との関係の見直しは、「育てられる者から育てる者へ」と「コペルニクス的転換」(鯨岡)が起きる際に、それまでの実親との関係や親からの教えを如何に意識しつつ、自分の子育て像を作り上げるという難しい状況の中で起きる。これまで繰り返し述べているように共同養育の場が失われている現代社会では、同じ子育ての期の親との横の関係とは異なる斜めの関係による子育てのモデルから学ぶ機会が減少している。「7. 経験を活かした自己実現への意識の高まり」で紹介したように「育児の本のとおりしなくてほとカチカチに考えていたがに本の通りにはならない。その都度やってみてダメならダメと柔軟になった」

の語りにも見るように、乳幼児を育てる親は専門家からの影響を受けていることは想像できると同時に、親世代との縦関係の見直しも課題のひとつになっているのではないかと推測できる。

親世代との関係の見直しは、【親との関係の見直し】【親世代との関係の見直しと変容】から構成させる。【親との関係の見直し】は、‘親と同じようにすることが、必ずしも自分たちに合っているとは限らないと思うようになった’‘自信の親との関係を修復した’であり、【親世代との関係の見直しと変容】として‘実母が自分の母親のモデルになっていると思うが、違和感どんどん増している’‘実母が手本と示す母親像は、古く、現実離れしており、自分はやれていない’‘実母とのやり取りにストレスを感じるが増えている’とこれまで手本にしていた実母との違和感やストレスが語られ、親世代との関係の見直しが始まりつつあることが伺える。一方では、‘実家が近くの人が、祖父母にサポートしてもらっている話などを聞いて、おじいちゃんおばあちゃんにも頼っていいんだと思った’のように、実家に頼ることを考え始めている語りもある。

親世代との関係の見直しは容易なことではない。斜めの関係を経験することが少ない親は、親世代との関係の見直しは、頼ること（ほかに頼る斜めの関係がない）と頼りたくない（ギャップやストレスがある）ことのアンビバレントな感情を作り上げているのではないだろうか。

10. 将来展望の獲得(親として将来のイメージを持つ)

「将来展望の獲得(親として将来のイメージを持つ)」は【親展望の獲得】【子ども中心へシフトする】【見通しが持てるようになる】【将来の展望が持てる】【職業人、主婦としての展望】【多様な養育イメージに触れる】【家庭・養育イメージの獲得—自分は自分】のサブ・カテゴリから構成される。

【親展望の獲得】は‘小さい間は子育てに専念したいと思うようになった’‘拠点に来る前は、家事を毎日きちんとし、旦那さんがいるときは家において、子どもが声を出さないようにする、みたいに頑張って悪循環だったことに気づいた’という親意識の確定であり、それは‘結婚を機に退職し、子どもの中心に生活になるのも悪くないなと思えた’‘子育てが楽しいと感じているので仕事量を減らして子育て優先のライフスタイルを選んでいる’（【子ども中心にシフトする】）意識と繋がっている。あるいは‘周りのお母さんたちの話をいろいろと聞き、家庭もいろいろあると思うようになった。自分らしい家族像について、考えられるようになってきた’

【家庭・養育イメージの獲得】としても語られている。子どもの養育を中心に考えるという親意識が確定すると同時に、拠点において‘拠点を利用して多様な価値観に触れられて自分の価値観も変わった’（【多様な養育イメージに触れる】）ことで、‘手に職をつけたい、自分も勉強したい成長したいと思った’‘マタニティヨガ、ベビーヨガの資格を取ろうと思って勉強中’‘うまくいけば拠点でイベントをやりたい、今の生活を肯定的に思う’‘手作りに興味が出てきてつくってみようかなと思っている’と【将来展望が持てる】ように新たな資格や役割の獲得を展望し始める様子も伺える。

子どもとの生活へのシフトや養育へのイメージの獲得と同時に、‘今はお母さんでない時間を持つのもいいのではと復職に前向きになり、根拠のない自信を感じた’‘復職した先輩お母さんの話を聞いたり、大変だけど充実している姿を見た’‘外に働きに行く選択肢を考えるようになった’‘今、ゆったりと過ごす中で、そんなにバリバリ働かなくてもいいのではないかと、じっくり子育てするのもいいのではと思いつつ、会社への執着がなくなっている。今の環境でラッキーと思えるようになり、自分自身がゆるくなったと感じる’と【職業人、主婦としての展望】を持ちつつ、‘先の見通しができる’（【見通しが持てるようになる】）

に至っている。自分の将来のアイデンティティを獲得していくイメージは育児をする母親として、「親としての成長」に関する重要なテーマであることが首肯できる。

11. 配偶者との関係の見直し

拠点を利用することによる「親としての成長」と「配偶者との関係の見直し」の関係について考えてみたい。これまでの分析に拠れば、拠点という安心・安全基地を確保し、スタッフや仲間を愛着対象と位置づけることによって、利用者には情緒的安定や肯定的な養育のイメージが生まれ、経験を活かした自己実現の意識が高まっていることが明らかになっている。また養育のイメージについては、ストレスとなっていた親世代との関係を見直すこともできるようになる。このように利用者は親としての自己概念や自己能力を高めることによって親族との関係について積極的に振り返ることができるようになってきていると推測できる。同時に親族を含む身近な人間との振り返りには配偶者が含まれる。インタビュー調査では拠点を利用し始めてからの変化として「家族との関係」「妻としての変化」を質問しているため、より具体的に配偶者との関係を語るセグメントとサブ・カテゴリーが抽出されている。

「配偶者との関係の見直し」は、【子どもの成長を伝える。共有できる】【配偶者（夫）を拠点に取り込む】【夫婦関係についての意識の変化】【配偶者との関係の変容】【子ども情報の隔たりに対する葛藤—単身赴任、長時間労働】のサブ・カテゴリーから構成される。

【子どもの成長を伝える。共有できる】は、「子どもの反応や出来たことを夫にも教えてあげたいと思う’預かり中の様子を書いた紙をテーブルにおいて、食事時に家族で話をしている’拠点での子どもの様子を共有できるようになっていることがわかる。また【配偶者（夫）を拠点に取り込む】意識が働いた母親の語りでは、「話のバリエーションが増えた。実際に夜のひろばに夫を連れて行って他の利用者を紹介した’拠点で他の家庭や子どもの姿を知ること夫婦の会話の中で伝えていくようにしている’パパが子どもと拠点に出かける日があり、ママのリフレッシュにもなる’積極的に夫が拠点にいてくれるようになった’夫の利用を肯定的に評価する内容となっている。

一方で【夫婦関係についての意識の変化】は「支援センターでのおしゃべりを聞きながら、自分が夫にずいぶんと遠慮していたことに気づいた」と語る母親がいれば、他の複数の妻（母親）は夫との関係の意識の変化を以下のように語っている。「夫優先ばかりでなくてもよいと思い、自分の考えを言ってもいいと思えるようになった。喧嘩が減った’自分が思っていたものとは異なる夫婦関係もあるのだとわかった’家事育児は妻の仕事と、家のことをすべて一人で抱え込んで悪循環になっていたが、共有することも大事だと思うようになった’子育てが自分の中のメインになったので、今までのように夫にできなくなったが、疲れたから洗い物をしてもらうなど、弱みをみせられるようになった。言いたいことを発散しつつ過ごした方がいいと思えた’夫への気遣いや遠慮から起きていた悪循環に気づき、自分から意識や行動を変えようとしている母親（妻）の様子が語られている。

【配偶者との関係の変容】は、「夫との会話が増えた。自分だけがやらなくてはと思っていたが、夫がもう少し子どもをみてくれるといいと思うようになった’会話が増えると共に夫への要望が語られている。別の語りでは、「主人に対して寛容になった。少し優しくなった。私が大変なことがわかってくれて、子どもに接する時間も少し作ってくれるようになった’夫の変化から寛容になっている。また拠点の利用から仲間が広がった利用者は、「自分も友達と楽しく過ごすことができるようになり、夫の友人関係を受け止められるようになった’語り、また別の母親は「子どもが生まれてから、夫は昼間、きちんと眠ることが

できなくて、機嫌が悪いことが多く、喧嘩ばかりしていた。拠点に行くようになって、お互いの生活リズムがうまく回りだし、夫婦喧嘩がなくなったと拠点利用が夫婦の生活リズムを安定させていると語っている。

一方で、‘夫は単身赴任で時々帰ってきて子どもに会うくらいだから、子どもへの情報量の差がものすごくあって’と夫との隔たりの語りも見られた(【子ども情報の隔たりに対する葛藤—単身赴任、長時間労働】)。

拠点を利用することで子どもの成長を配偶者に報告し、拠点への関心の引き込みを行いつつ、配偶者が子育てに関心を高めることができれば、会話の変容と共に関係の変容が起きる可能性が高いことが把握できる。一方で単身赴任や長時間労働の夫との隔たりを感じている利用者には、夫の拠点利用を含めた具体的なサポートや提案が必要になるだろう。

12. 職業観の獲得

拠点の利用者の多くは母親である。自己実現の一つとして職業とどのように向かい合うのか、現代の母親たちの大きな課題だと思われる。「働き方について/職場の人間関係について」と「職業人としての変化」のインタビューに答える語りからは、働くことと子育ての間で揺れる親の気持ちと、拠点で同じ立場の母親と出会うことで自分の展望を持てるようになる様子をうかがうことができる。ここでは、先にカテゴリーとした「将来展望の獲得」とは別に職場や職業についての意識に絞って語りをまとめた。

「職業観の獲得」は【職場の理解と養育表象の相互往復】【職業への意欲】【多様な職業観に触れて自己と向き合う】から構成される。

【職場の理解と養育表象の相互往復】は、‘保育者に預けて働くのが当たり前。子どものこともそもそも理解がある職場だった’‘職業人だけでなく、家庭人、地域人だと実感でき、メリハリができた’‘娘が1歳になる前から、職場復帰。土日どちらから出勤。その時は夫が見ている。勤務体制など融通を利かしているだけで、会社にお詫びをすることが多くなり、まるくなった’と子育てと仕事を両立する上での意識を語る母親が複数いる。こういった母親たちの話に拠点で触れることで、‘(復職した)お母さん方の体験談を聞いて、責任を持って仕事をしたい’‘会社に恩返ししたい’と思いを強くできる母親たちの存在が浮かび上がる(【職業への意欲】)。しかしでは【多様な職業観に触れて自己と向き合う】は、‘様々な働き方があることを拠点利用者の声を聞いて勉強になった’と母親の話を肯定的に受け止める母親がいる一方で、‘育休中のお母さんたちの保活の話を知ると、‘もう少し働いていた方が良かったかなあ’と思う’と迷いを語る母親もいる。拠点で会話される仕事、職場復帰、決断と迷いはどの母親も直面していることがうかがい知れる。

13. 他者への貢献意識の獲得

拠点を利用する親は不安な育児を愛着対象となるスタッフや支えられ、先輩親から様々な育児観や職業観について触れることで自己実現を意識するに成長を見せる。安心・安全基地としての居場所を獲得した利用者の多くは、拠点の他の利用者に役立ちたい、地域に貢献したいという思いを持ち始める。このことは、子育てひろば全国連絡協議会が実施したアンケート調査(調査研究名「地域子育て支援拠点事業に関するアンケート調査 2015」)でも拠点を利用した後の子育ての変化として、「地域の一員であると感じられるようになった」「地域に役立つ活動ができるようになるようになった」との設問に25%前後の母親の方がイエスと回答(複数回答)していることから明らかである。今回のインタビュー調査では、「拠点を利

用したことで変わったことは何ですか？」という設問の中では「日常生活」「近所の人との関係」「拠点で出会った利用者との関係」「拠点でであったスタッフとの関係」で、「拠点を利用し始めて変化した自分の役割の変化と拠点を利用したこととの関係」では「親として」「妻として」「地域の一人として」の質問項目に答える形で、それぞれ地域や他者への貢献意識が語られている。

「他者への貢献意識の獲得」は、【地域への視野の広がり】【地域の自分を意識】【他者への関心と関わりの芽生え】【(拠点とは関係のない)元々の地域の繋がり意識】【地域や他者への関心と愛着対象の広がり】【地域の他者への見守り意識の芽生え】【他者・地域への貢献意識の獲得】から構成される。

【地域への視野の広がり】は、「同じくらいのお子さんを見ると拠点を紹介したくなる・近所の人を拠点につれてきている”周囲の人の様子も気にするようになった。・道であったらあいさつなどをするようになった”まつりや行事に参加することは増えた」と地域との関係が育っていることが語られている。【地域の自分を意識】は、「近所に自分たちの名前を覚えてくれている人がいて嬉しいと感じるようになった」と繋がりを喜びとして語っている利用者がいる。【他者への関心と関わりの芽生え】は、「困っている人がいたら自分から声をかけるようになった”新生児の泣き声をきくと可愛いと思える”ご近所に困ったら助けてと言える(助けを求められる)場所(人)がある”ある程度の距離感を保ちながらの人と関わり方を知った」と関わりの意識とそのための距離感を拠点で獲得し始めていることが語られている。【(拠点とは関係のない)元々の地域の繋がり意識】は、「ご近所にとってわが子が10年ぶりに生まれた赤ちゃんなのでますます声がかかる。拠点利用とは関係はないと思っている”もともと気軽に付き合いができていた。昔ながらの親せきのつながりがある”いろいろな人と知り合って、立ち話をしたり、家にお邪魔することもたまにある」と元々の地域のつながりを認識し、関係の広がりを感じている語りがある。【地域や他者への関心と愛着対象の広がり】は、「自分から話しかけることができるようになったり、あいさつをするようになった’今のような人間関係って「すごくいいよな」と思う”橋渡しをしたいと思うようになった’いろいろな人に甘えながら、相談しながらと思えるようになった”今来ている誰かに聞いてみてあげるよ、と言ってもらえる。自分の知り合いが増える」と甘えたり頼ったりを体験しながら他者を支えようとする関係の質的変化が語られている。【地域の他者への見守り意識の芽生え】は、「他の人のことを考えられるようになった。自分の子どもを見てもらうだけでなく、自分も見守ろうと思えるようになった」と貢献意識が芽生えていることが語られ、【他者・地域への貢献意識の獲得】は、「拠点のボランティアという趣味ができた”自分が皆にしてもらったことを次の人たちに返したい”自分がしてもらったことを今度は誰かの役に立てればうれしい”パニック状態だった自分を支えてくれたと感じている。自分も役に立ちたいと思っている’地域に貢献したいと思っている”拠点を知らない人がいたら、声をかけてあげようと思ひ、同じような親子に、声をかけられるようになった」と貢献への強い意志が語られている。

以上、インタビューの質問項目に答える形で語られた内容(セグメント)から成立されたサブ・カテゴリーを交えながら13のカテゴリーを紹介した。

(4) 総括「拠点利用者が『親として成長』する意味」

概念生成された 13 のカテゴリーは、親の成長に関する質問項目に対する回答という形式で語られた利用者の声によって導き出されたものである。それぞれのカテゴリーは利用者の語り（セグメント）に意味を付与（コード化）したものをサブ・カテゴリー化したものであり、独立していると考えられる。一方で拠点利用開始当初の親の気持ち（不安を含む）と行動、拠点を積極的に利用するようになった親の気持ちや行動を想像しながら全体を見ると、独立している 13 のカテゴリーが親の成長とリンクして、一連の繋がりがあると考察できる。

以下に、「親としての成長」の概念図を、「安全基地と安全な避難場所の獲得」「養育力の獲得」そして「将来展望の獲得」の「3つの獲得」によって解説する。

◇親の拠点の利用は「安全基地・安全な避難場所」と感じるところから開始される。子どもを連れてのはじめての利用は緊張や不安を伴うことが予測されるが、ここで職員や他の先輩利用者に受け入れられる体験が、親や配偶者以外の「愛着対象の獲得」に繋がりと、本人の欲している居場所感覚と合致した場合、その後利用継続に繋がっていくことが推測される。利用継続で得られる感覚が「セルフケア」につながり親自身の快適な状態へと導かれるのだろう。「安全基地と安全な避難場所の獲得」は、「愛着対象の獲得」および「セルフケア」と連鎖しながら、職員（支援者）や先輩利用者との交流を活性化させる。

◇「養育力の獲得」は「安全基地と安全な避難場所の獲得」意識が職員らとの交流で活性化されることで導かれている。拠点利用が規則的になり、生活にリズムが生まれたと語る利用者は多い。午前中に拠点を利用することで、あるいは拠点を利用する日はそれを前提に朝から準備が整う（【生活リズムの獲得】）。先輩利用者の話を聞きながらあるいは子どもへのかかわりをモデルにしながら、育児書どおりの子育てをしなくてもよいのだと気持ちが楽になるといった【情緒的なゆとりー強迫的育児からの解放】が為される。解放感によって、子どもの遊びの様子や他の親子の様子を一步はなれた場所から見ることができるといふ【子どもの理解】の視点が確保され、子どもの立場で思いや欲求を想像することができるようになり、結果として【感受性と応答性の高まりーアタッチメントの安定】と【波長あわせ】を経験できるに至る。この「養育力の獲得」は、愛着対象の獲得によって人に支えられる感覚を会得した保護者が、自分を取り巻く環境に意識を向け始めて【頼る力】を得ることによって高められる。

◇「将来展望の獲得」は「養育力の獲得」によって導かれる。【親展望の獲得】は子どもとの向き合いに専念しようという思いの強さだったり、子育てを子育てが楽しいと感じているので仕事量を減らして子育て優先の生活スタイルを選んでいるという【子ども中心にシフトする】意識と繋がっていることは既に述べたとおりである。自分らしい家族像について考えられるようになったと【家庭・養育イメージの獲得】が促されている。また【多様な養育イメージ触れる】ことで、新たな資格や役割の獲得意識が高まり、外に働きに行く選択肢を考えるようになった、ゆとりを持って働くことが出来るのではないかなと思えるようになるなど【職業人、主婦としての展望】や【見通しが持てるようになる】に至っている。将来展望は、「子どもと分かち合う仲間の獲得」「親世代との関係の見直し」「配偶者との関係の見直し」といった親を取り巻く人間関係の変容やそれへの意識が下支えになっていることも利用者の語りから推測される。やがて利用者のなかには「地域への貢献意識」に至る場合があるが、ここには拠点の職員

やボランティアの働きがモデルになっていることが拠点のボランティアという趣味ができた、自分が皆にしてもらったことを次の人たちに返したい、自分がしてもらったことを今度は誰かの役に立てばうれしいという語りからも推測できる。

◇「親としての成長」を構成するサブ・カテゴリーである「愛着対象の獲得」、「安全基地と安全な避難場所の獲得」、「頼る力」を実現しているのが「寄り添い型支援」である。「寄り添い型支援」が「養育力の獲得」や「将来展望の獲得」と密接に関連しながら「親としての成長」に寄与していることも付記しておく。

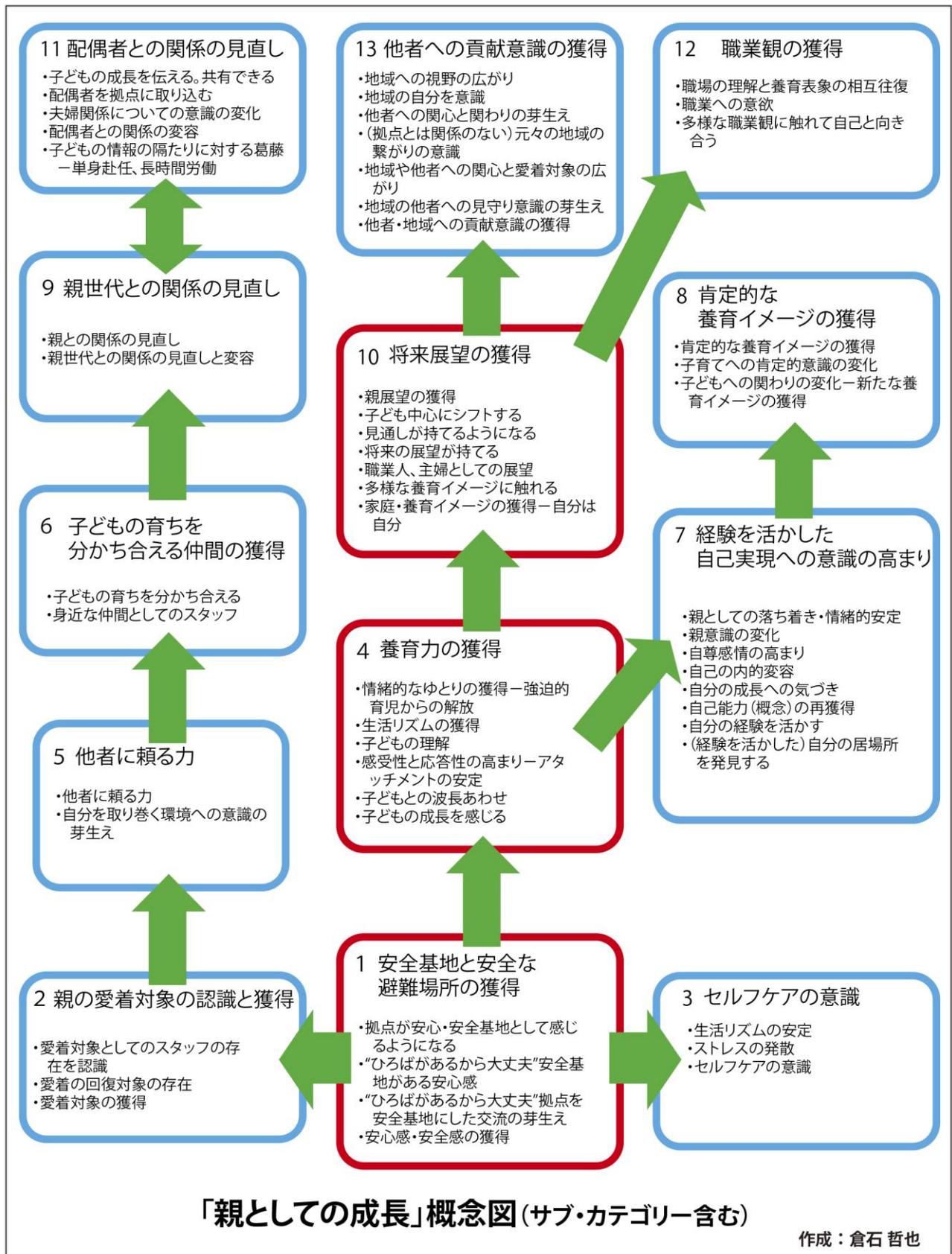


図 3-2 「親としての成長」概念図

第4章 短期縦断調査（プレ/ポスト型）

I. 調査の目的

本調査研究は、すでに述べたように、地域子育て支援拠点の利用者（母親）が、拠点スタッフの「寄り添い型支援」によって、「親としてどのような成長」を遂げていくのかを明らかにすることを目的としたものである。プレ/ポストアンケート調査では、全国の5拠点における拠点初期利用者の3か月間の変化を確認し、拠点スタッフの「寄り添い型支援」と利用者の「親としての成長」について、質問紙および聞き取りを通して検証することを目的とする。

II. 調査の方法

1. 調査対象と調査手続き

平成29年度に「NPO法人子育てひろば全国連絡協議会」が厚生労働省より補助を受けて実施した「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」における1次調査（郵送調査）において「質の向上に取り組んでいる」と回答した504拠点の中で平成29年度調査報告書に事例として掲載された54拠点の中から、今回協力を得られた全国各地の5拠点（表4-1）を対象に、量的調査と聞き取り調査を行った。

質問紙（量的）調査については、支援者1名と拠点を利用して3か月未満の利用者約10名を対象にプレアンケート調査を行い、その約3か月後に同じ利用者（プレアンケート調査協力者）を対象にポストアンケート調査を行った。プレアンケート調査は、ポストアンケート調査とセットで10票は確保できるよう、各拠点にプレアンケート用紙を15枚セット、ポストアンケート用紙を10枚セットして送付した。調査対象はプレアンケート、ポストアンケート両方がそろったものだけを分析対象とした。

聞き取り（質的）調査については、質問紙（量的）調査に協力いただいた各拠点の支援者1名と利用者1名に対して、インタビューガイドに基づく半構造化されたヒアリングを行った。

調査実施期間は、プレアンケート調査が2018年10月1日～10月13日、ポストアンケート調査が2019年1月4日～19日であった。聞き取り調査は、2019年1月20日～31日であった。

表4-1 調査の対象とした5拠点の設置自治体とその人口

| 設置自治体 | | | 市区町人口 |
|-------|------|----------|---------|
| 1 | 宮城県 | 仙台市泉区 | 213,844 |
| 2 | 神奈川県 | 横浜市戸塚区 | 280,365 |
| 3 | 富山県 | 氷見市 | 47,535 |
| 4 | 岡山県 | 倉敷市 | 482,541 |
| 5 | 福岡県 | 北九州市小倉南区 | 210,050 |

※各自治体 web サイト公表値（2019年1月現在）

2. 調査内容

(1) 調査項目と手順

質問紙調査項目及び、聞き取り調査の項目は、基本的には全国調査（本報告書 第2章）で設定した項目と同じ質問項目を設定した。ただし、ポストアンケート調査については、3か月後の変化を確認するため、利用頻度の増減の理由、拠点の利用方法等について追加項目を入れた。聞き取り調査の手順は、全国調査（本報告書 第3章）と同様の方法で行った。

支援者及び利用者の具体的な質問内容については、本報告書巻末の「資料」を参照されたい。

Ⅲ. 調査の結果

1. 支援者対象の調査結果

(1) 対象拠点の概要

支援者アンケートのフェイスシートの内容を以下にまとめた。対象拠点は、平成29年度に「NPO法人子育てひろば全国連絡協議会」が厚生労働省より補助を受けて実施した「地域子育て支援拠点の質的向上と発展に資する実践と多機能化に関する調査研究」における1次調査（郵送調査）において「質の向上に取り組んでいる」と回答した504拠点の中で平成29年度調査報告書に事例として掲載された54拠点の中から、今回協力を得られた全国各地の5拠点となっている。

運営は、多様な主体によってなされており、運営場所は公共施設・公民館、空き店舗・商業施設などであり、比較的大きい施設で運営されている。そのため一日あたりの従事者も3人以上から10人以上など多くなっている。支援者の勤務時間については、一日あたり6時間以上、これまでの勤務期間も6年以上となっており、中堅からベテラン職員が調査対象となっていた（表4-2）。

表4-2 対象拠点及び支援者の勤務状況

| | 運営主体 | 運営場所 | 1日あたりの従事者数 | 1日あたりの利用親子組数 | 1週あたりの勤務日数 | 1日あたりの勤務時間 | これまでの勤務期間 |
|---|-------------|-----------|------------|--------------|------------|------------|-----------|
| 1 | その他（一般社団法人） | 公共施設・公民館 | 5～9人 | 50組以上 | 5日 | 8時間以上 | 7～10年未満 |
| 2 | NPO法人 | 空き店舗・商業施設 | 10人以上 | 50組以上 | 5日 | 8時間以上 | 10年以上 |
| 3 | 自治体直営 | 公共施設・公民館 | 3～4人 | 20～50組未満 | 5日 | 8時間以上 | 6～7年未満 |
| 4 | 社会福祉法人 | 空き店舗・商業施設 | 5～9人 | 10～20組未満 | 5日 | 6～8時間未満 | 7～10年未満 |
| 5 | 任意団体 | 公共施設・公民館 | 2人 | 20～50組未満 | 3日以下 | 6～8時間未満 | 7～10年未満 |

(2) 支援内容について

拠点における支援者の支援実態を明らかにするために設定した25項目それぞれに関する度数分布および選択肢（コード化した数値）を反転させた得点によって算出した平均値・標準偏差を表4-3に示す。なお、表中「度数分布」のうち、1は「あてはまる」、2は「だいたいあてはまる」、3は「あまりあてはまらない」、4は「あてはまらない」である。

調査結果を、全国調査と比較したところ、否定的な回答が少ない傾向がみられた。全国調査で否定的な回答がみられた項目番号 11「地域連携を図る活動」、22「利用者同士が同じ課題に関して語り合う機会を設ける」、24「月1回以上の子育てや子育て支援に関する講習等の実施」、27「利用者の経験等を活かして親としての成長を支える」については肯定的な回答となっている。一方、項目番号 31 や 34 のような「利用者が連帯して互いの子育てを支援し合う」という関係性への支援については、全国調査同様に否定的回答をした支援者も見られた。

表 4-3 拠点における支援者の支援実態に関する集計結果（第 10 項目～第 34 項目）

| 項目番号 | 項目 | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | 平均値 (標準偏差) |
|------|---|---------------|-----------|-----------|--------|---------------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| 10 | 親子の交流を通して親同士、子ども同士の支え合い等を促している | 4 80.0 | - - | 1 20.0 | - - | 3.6 (0.89) |
| 11 | 地域の連携を図るなどの活動に取り組んでいる | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 12 | 性別、出身地等にかかわらずすべての親子の支援を対象としている | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 13 | 親子の孤立を防ぎ、不安感を軽減するように働きかける | 3 60.0 | 2 40.0 | - - | - - | 3.6 (0.55) |
| 14 | 利用者全体の動きを把握し、利用者同士が繋がれるように心掛けている | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 15 | 個別の相談に応じたケースの記録等を残し、支援の検証や改善に繋げている | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 16 | 定期的ミーティングやケース会議を持ち、利用者の共通理解に努めている | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 17 | 子育て等に関する相談や援助を行っている | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 18 | 日頃から利用者に関わり、相談に応じられるように声をかけている | 3 60.0 | 2 40.0 | - - | - - | 3.6 (0.55) |
| 19 | 利用者との会話等を通して、家庭での子育て・生活背景の理解に努めている | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 20 | 相談の際は相づち等に配慮し、受容と共感的な態度で接している | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 21 | 子どもの個性や発達を理解し、親とともに成長を見守っている | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 22 | 利用者同士が同じ課題について語り合う機会を意識的に設けている | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 23 | 子育てに関する情報を広く収集し、利用者に提供している | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 24 | 子育てや子育て支援に関する講習等を月1回以上実施している | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 25 | 子ども一人ひとりの最善の利益を尊重している | 5 100.0 | - - | - - | - - | 4.0 (-) |
| 26 | 親が子どもに向き合うゆとりや子育てに自信を持てるように支援している | 3 60.0 | 2 40.0 | - - | - - | 3.6 (0.55) |
| 27 | 利用者の経験等を活かしつつ、親として成長できるよう支援している | 4 80.0 | - - | 1 20.0 | - - | 3.6 (0.89) |
| 28 | 利用者の悩みを理解し、その解決法などを共に考え、最終的には本人の自己決定を尊重している | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 29 | 多様な関係性の中で子どもが他者への信頼感を高められるよう支援している | 3 60.0 | 1 20.0 | 1 20.0 | - - | 3.4 (0.89) |
| 30 | 利用者がいつでも手助けを求められるよう、対等な関係を築いている | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 31 | 利用者が他の子どもに気づき、他の親とともに育児をする姿勢を促している | 3 60.0 | 1 20.0 | 1 20.0 | - - | 3.4 (0.89) |
| 32 | 親への支援を通し、支援者が自らの成長を感じ、それを支援に生かしている | 3 60.0 | 2 40.0 | - - | - - | 3.6 (0.55) |
| 33 | 利用者同士が同じ地域で支え合って子育てをしていくことを視野に入れて支援している | 4 80.0 | 1 20.0 | - - | - - | 3.8 (0.45) |
| 34 | 他の子の成長をわが子のように共感性を持って接していくよう支援している | 2 40.0 | 2 40.0 | 1 20.0 | - - | 3.2 (0.84) |

(3) 質的調査(聞き取り調査)

聞き取り調査は、全体調査と同様の手法・手順に従って実施された。結果は、全体調査の分類に沿って、5箇所の支援者に対する聞き取り調査の内容を確認、検証した。

①拠点という場の力を使って行った支援

親子にとって居場所だと感じてもらえるよう等身大の生活の場の提供、特別な場ではなく普段の生活の中で利用してほしい等、「安心できる雰囲気醸成・環境設定」が意識されている。せっかく来ても入れないということがないように、拠点の混み具合をスマホで見られるようにしているなどの工夫も見られた。

また、土曜日の開催によって父親の参加を促す、職場復帰後も参加し交流を促すプログラムの工夫、ちらしやイベント等をさりげなく掲示する等、気づきを促す配慮も行われていた。

②支援者と利用者との相互作用を活用した支援

フレンドリーな態度で受け入れ、リラックスしてもらい、表情の硬い利用者には積極的に声がけする等、まずは安心を与える関わりが行われている様子が多く語られていた。次に、「身近な相談相手」として日常会話の中で状況を読みとり、困ったときには相談してもらえる関係づくりに発展させたいと考えている。「我が子理解の促進」としては、以下のようなことが語られていた。

- ・そこそこの親でいいと思ってもらい、子どもに寛容になれるような関わりを勧める
- ・家に帰ってからでもできる遊び方のヒントを提案する
- ・支援者が子どもに積極的にかかわる、子どもとのかかわりのさりげないお手本になる
- ・子どもをほめる、子どもからのサインを代弁する
- ・親子の仲介に入る、親に代わって子どもとやり取りをする

「受容的・共感的関与」として、まずはしっかり相手の話を傾聴し、頑張らない子育てでいいと感じてもらえること、親が好きなことを我慢しなくていいことなどを伝え、自己決定を尊重する。「力を引き出す関わり」としては、行事への参画、利用者の活躍の場を提供するなどが示された。また、「地域とのつながりの創出」として、地域とのつながりを意識した情報提供や、地域の中にも居場所を見つけられるよう支援するといったことが挙げられた。支援者の成長、学び、変化としては、あるべき姿を求めるのではなく、ありのまま受け止めることができるように、親子の背景にある家庭への理解や、外国人や障害児者の家族への支援はより丁寧に行うといった共感的関与や多様な価値観の受容が述べられていた。一方では、自分の影響力を自覚して臨まなくてはならないといった内省的な意見や、支援者自身も利用者にはフォローしてもらいがあるなど双方向性の関係性も語られた。また、プラス思考になった、仕事とは別に地域でサロンを始めた、夫や家族に感謝している等、私生活においても前向きな変化の語りも見られた。

③利用者相互の関係性を用いて行う支援

支援者は、利用者同士をつなげるために、タイミングよく声がけをする、子どもの月齢、親の年齢、住んでいる地域等に注目しながらつないでいる様子がわかった。また、テーマ別プログラムの開催や保護者の自発的な企画をお膳立てする、サークルづくりに発展させるといった工夫が語られた。また、ちょっと先の子育てをみることで展望がもてるように、また知恵の伝承として先輩ママから、スリング、だっこひ

もの使い方などを通じて関係を育む等の意図も示された。多様な親同士の出会いの中で、自分の子育てを相対化できる、家族のあり様もそれぞれで良いと思えるようになってほしいとの願いが語られた。

④その他の支援

拠点での出会いをきっかけに、最終的には、地域に関心を向け、拠点外でもつながりがひろがることや交流の深まりに期待が寄せられた。

2. 利用者対象の調査結果

(1) 分析対象者数について

プレ／ポストアンケート調査によって得られた利用者からの回答数は、45票であった。プレアンケート調査のうち、拠点を利用し始めてから現在の期間が6か月以上*の利用者は条件が異なるためデータを外し(対象は4件)、41票を有効票として分析対象とした。

*当初の利用者を調査設計では、拠点を利用し始めて3か月以内の利用者を想定していたが、調査期間中に把握することが困難であったため6か月以内の利用者までを有効とした。

表 4-4 実施自治体と分析対象者数

| | 実施自治体 | n | % |
|---|----------|----|-------|
| 1 | 宮城県仙台市 | 10 | 24.4 |
| 2 | 横浜市戸塚区 | 4 | 9.8 |
| 3 | 富山県氷見市 | 11 | 26.7 |
| 4 | 岡山県倉敷市 | 7 | 17.1 |
| 5 | 北九州市小倉南区 | 9 | 22.0 |
| | 全体 | 41 | 100.0 |

(2) フェイスシートについて

まず、第1項目「拠点を一緒に利用している子どもと回答者との関係」に関する集計結果は、母親が40人(97.6%)、父親が0人、祖母が1人(2.4%)、祖父が0人であり、ほとんどの回答者は母親であった。

次に、第2項目の「子どもの年齢・月齢、利用している施設など」に関する質問から導き出せる結果を整理していく。回答者は41名であったが、第1子のみの方の家庭の保護者は36名(87.8%)、第2子までいる家庭の保護者は4名(9.8%)、第3子までいる家庭の保護者は1名(2.4%)であった。これについて、第1子～第3子に絞って集計した結果を表4-5に示す。第1子については、拠点以外に利用している施設等として「保育所」が最も多く、その他、幼稚園、認定こども園と続いている。第2子、第3子については、拠点利用のみである。第1子は、保育所等の利用と並行して拠点利用をしているケースや、第2子、第3子の利用施設が決まる前に、複数の子どもを連れて拠点を利用している様子が見られる。

表 4-5 地域子育て支援拠点利以外の幼児教育・保育施設に通っている第1子～第3子の人数と比率

| | 第1子 | | 第2子 | | 第3子 | |
|--------|-----|-------|-----|----|-----|----|
| | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 保育所 | 7 | 22.8 | - | - | - | - |
| 認定こども園 | 2 | 11.2 | - | - | - | - |
| 幼稚園 | 2 | 28.3 | - | - | - | - |
| その他 | 6 | 37.7 | - | - | - | - |
| 合計 | 17 | 100.0 | - | - | - | - |

第3項目「一緒に拠点を利用している子どもは何番目ですか」に関する結果は、第1子と一緒に利用している家庭は38名であり、第2子と一緒に利用している家庭は4名であり、第3子と一緒に利用している家庭は1名であった。

第4項目「拠点を利用し始めてから調査時点までの期間」は、3か月未満が全体の51.2%の21名、3か月以上6か月未満が全体の48.8%の20人であった（表4-6）。

表 4-6 拠点を利用し始めてから調査時点までの期間に関する集計結果

| | プレアンケート調査 | |
|------------|-----------|-------|
| | 人数 | 比率 |
| 3か月未満 | 21 | 51.2 |
| 3か月以上6か月未満 | 20 | 48.8 |
| 6か月以上1年未満 | - | - |
| 1年以上2年未満 | - | - |
| 2年以上 | - | - |
| 合計 | 41 | 100.0 |

第5項目「1か月当たりの拠点の利用頻度」に関する集計結果については、プレ/ポストアンケートを比較できるように並べて表4-7に示す。

表 4-7 1か月当たりの拠点利用頻度に関する集計結果

| | プレアンケート調査 | | ポストアンケート調査 | |
|-----------|-----------|-------|------------|-------|
| | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 4日未満 | 14 | 34.1 | 12 | 29.3 |
| 4日以上8日未満 | 15 | 36.7 | 17 | 41.5 |
| 8日以上12日未満 | 6 | 14.6 | 6 | 14.6 |
| 12日以上 | 6 | 14.6 | 5 | 12.2 |
| 無回答 | - | - | 1 | 2.4 |
| 合計 | 41 | 100.0 | 41 | 100.0 |

第6項目「回答者の年齢」に関しては、25歳未満は全体の7.3%（3名）に過ぎず、45歳以上も全体の2.4%（1名）に過ぎなかった。25歳以上45歳未満の回答者の分布は、25～29歳が7名（17.1%）、30～34歳が15名（36.6%）、35～39歳が10名（24.4%）、40～44歳が5名（12.2%）であり、全体調査の傾向とほぼ同様の結果であった。

第7項目「回答者の就労状況」については、「現在、働いているかいないか」を尋ねたあと、働いている

場合は「フルタイム」「パートタイム」「その他」の選択肢から1つを選び、働いていない場合は「育児休業中」「結婚を機に退職」「出産を機に退職」「その他」の選択肢から1つを選ぶよう求めた(表4-8)。拠点利用者のうちプレアンケートの時点では約12%は仕事をしており、約88%は仕事をしていない。そして、後者のうち36%が育児休業中である。

表4-8 利用者(回答者)の就労状況に関する集計結果

| | プレアンケート調査 | | | | | ポストアンケート調査 | | | | | |
|--------|-------------|-------------|-------------|-----------|--------------|-------------|------------|------------|------------|-----------|--------------|
| | フルタイム | パートタイム | その他 | — | 計 | フルタイム | パートタイム | その他 | — | — | 計 |
| 働いている | 1 20.0% | 2 40.0% | 2 40.0% | — | 5 100.0% | - - | 3 37.5% | 4 50.0% | 1 12.5% | — | 8 100.0% |
| | 育児休業中 | 結婚を機に退職 | 出産を機に退職 | その他 | 計 | 育児休業中 | 結婚を機に退職 | 出産を機に退職 | その他 | 無回答 | 計 |
| 働いていない | 13 36.1% | 10 27.8% | 10 27.8% | 3 8.3% | 36 100.0% | 15 45.5% | 6 18.2% | 8 24.2% | 3 9.1% | 1 3.0% | 33 100.0% |

第8項目「子育てを手伝ってくれる人」に関しては、まず、そうした人が「いる」「いない」の回答を求めたあと、「いる」と答えた場合には、「その他」を含む10の選択肢から複数を選択できる形式の問いであった。「いない」とした場合は「非該当」として、集計結果を以下に示す。比率の分母は、「いる」と回答した37名である。配偶者36名(97.3%)、実母10名(27.0%)、義母10名(27.0%)、実父5名(13.5%)、義父6名(16.2%)、兄弟姉妹4名(10.8%)、祖父母2名(5.4%)、非該当(「いない」)4名であった。「非該当」、すなわち、子育てを手伝ってくれる人のいない孤立的な利用者が全体の9.8%(4÷41)であった。全体調査に比べて、「非該当」が少なく、義母や義父の支援の比率が高かった。

(3) プレ/ポストアンケートの比較で見えてきたこと

①利用頻度の変化

表4-7に示したように、プレ/ポストアンケートの結果、利用頻度の変化を確認した。ポストアンケートによる利用頻度、及び利用頻度が増えた理由、減った理由の記載状況から、41名のうち、ポストアンケートでプレアンケート時よりも拠点の利用が増えた協力者は21名(51.2%)、減った協力者は16名(39.0%)、変わらなかった協力者は4名(9.8%)であった。増えた理由は、多い順に「居心地が良い」9名、「子ども同士を遊ばせたい」8名、「行くのが習慣になった」8名、行事やイベントへの参加7名、「同じ立場の親同士の交流」5名、「子どもが行きたがる」3名、「その他」3名となっている。利用頻度が減った理由は、「その他」が13名となっていた。記述をみると、「親や子どもの体調不良」が3件、「帰省」が2件、「他の場所にいつている」2件、「冬場で風邪がうつらないように」1件という理由があげられていた。

②拠点利用状況について

プレアンケート調査以降の拠点の利用について聞いた結果は、「行事やイベントに関わらず日常的に利用している」が35人(85.4%)、「行事やイベントを中心に利用している」5人(12.2%)、「無回答」1名(2.4%)であった。プレアンケートで聞いていない設問のため変化については確認できないが、継続利用の多くの

利用者が、行事やイベントに関わらず日常的に利用している状況であることがわかる。

③就労状況の変化

表 4-8 に示した通り、プレアンケートに比較してポストアンケートの結果は、就労者が 8 名(19.5%)に増えており、復職の状況がみてとれる。子育て世代は、結婚や出産という理由でいったん退職するものの、この 3 か月という短い状況の中でも復職する状況が確認されるなど、復帰が早い傾向があると予測される。

(3) プレ/ポストアンケートの比較で見えてきた利用に対する評価・利用による変容について

①基礎集計

利用者 (n=41) を対象にした調査項目のうち、プレアンケートの第 9 項目から第 16 項目 (ポストアンケートでは第 7 項目から第 14 項目) までは、利用している拠点を利用者がどのように評価しているのかを明らかにするために設定した質問である。設定した 8 項目それぞれに関する度数分布および選択肢 (コード化した数値) を反転させた得点によって算出した平均値・標準偏差を表 4-9 に示す。なお、表中「度数分布」のうち、1 は「あてはまる」、2 は「だいたいあてはまる」、3 は「あまりあてはまらない」、4 は「あてはまらない」である。なお、質問紙では、第 10 項目、第 13 項目、第 15 項目がネガティブな表記 (反転項目) にしたため、分析の際には、そのまま反転させずに集計している (以下の表 4-9 の中では、これらの質問をポジティブな表記に変えている)。

表 4-9 拠点利用者の拠点に対する評価に関する集計結果 (第 9 項目～第 16 項目)

| 項目番号 | 項目 | プレアンケート | | | | | | ポストアンケート | | | | | 平均値 (標準偏差) |
|------|-------------------------------|---------------|------------|-----------|-----------|----------|---------------|---------------|------------|------------|----------|----------|---------------|
| | | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | | 平均値 (標準偏差) | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | | |
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 無回答 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 無回答 | |
| 9 | あいさつと笑顔で、親子を温かく迎え入れてくれる | 39 95.1 | 2 4.9 | - - | - - | - - | 4.0 (0.22) | 40 97.6 | 1 2.4 | - - | - - | - - | 4.0 (0.16) |
| 10 | 職員はふだんから親子の交流の場におり、日常的に関わっている | 32 78.0 | 4 9.8 | 2 4.9 | 2 4.9 | 1 2.4 | 3.7 (0.80) | 26 63.5 | 13 31.7 | 1 2.4 | 1 2.4 | - - | 3.6 (0.67) |
| 11 | 多様な親子が利用できる雰囲気がある | 33 80.5 | 7 17.1 | 1 2.4 | - - | - - | 3.8 (0.48) | 32 78.1 | 8 19.5 | - - | 1 2.4 | - - | 3.7 (0.59) |
| 12 | 職員は気持ちや悩みを受け止め、共感してくれる | 27 65.9 | 11 26.8 | 2 4.9 | - - | 1 2.4 | 3.6 (0.59) | 25 61.0 | 14 34.1 | 2 4.9 | - - | - - | 3.6 (0.59) |
| 13 | 解決方法を押しかけられている感じはない | 32 78.1 | 6 14.6 | - - | 1 2.4 | 2 4.9 | 3.8 (0.58) | 28 68.3 | 9 22.0 | 2 4.9 | 1 2.4 | 1 2.4 | 3.6 (0.70) |
| 14 | 子育ての悩みなどを気兼ねなく相談できる | 26 63.5 | 13 31.7 | - - | 1 2.4 | 1 2.4 | 3.6 (0.63) | 24 58.6 | 14 34.1 | 3 7.3 | - - | - - | 3.5 (0.64) |
| 15 | 子ども同士トラブルがなく利用しやすい | 16 39.1 | 13 31.7 | 6 14.6 | 6 14.6 | - - | 3.0 (1.07) | 11 26.8 | 14 34.2 | 14 34.2 | 2 4.9 | - - | 2.8 (0.89) |
| 16 | 子育てを支えられていると感じる | 27 65.9 | 12 29.3 | 1 2.4 | - - | 1 2.4 | 3.7 (0.53) | 22 53.7 | 15 36.6 | 3 7.3 | 1 2.4 | - - | 3.4 (0.74) |

全体的に見ると、全体調査と同様に、利用者の多くは拠点で経験している支援や拠点の支援者から受ける支援を肯定的に評価している。否定的に評価している者の比率（「3」と「4」を合わせた比率）が5%を超えている項目を挙げると、プレ調査の10番、15番、ポスト調査での13番から16番である。10番、13番、14番、15番については、全体調査と同様の傾向がみられた。これらのうち3つの項目は、質問紙上でネガティブな表記であった項目であり、その影響が分布の傾向に若干の影響を与えた可能性がある。また、プレアンケートとポストアンケートの比較では、すべての項目でポストアンケートの方の評価がやや下がっている。このことは利用することでより利用者の自己開示（拠点への印象や思いを自由に話できるようになる）が進んだ結果なのか、利用して6カ月までにある程度の評価が確定しているとみるのか、3カ月ではあまり変化がみられないとみるのか課題が残った。

プレアンケート調査の第17項目から第33項目（ポストアンケート調査では第15項目から第31項目）は、拠点を利用したことによって利用者自身がどのように変容したのか（子どもの変化も含む）を明らかにするために設定した質問である。設定した17項目それぞれに関する度数分布および選択肢（コード化した数値）を反転させた得点によって算出した平均値・標準偏差を表4-10に示す。なお、質問紙では、第23項目、第28項目、第31項目がネガティブな表記になっているため、分析の際、これらの項目については、そのまま反転させずに集計している（以下の表4-10の中では、これらの質問をポジティブな表記に変えている）。

まず、プレ/ポストアンケートどちらかでも平均値が3点を下回っている項目は5つあり、それらは17番、20番、23番、28番、30番である。23番と28番は質問紙上でネガティブな表記になっていた影響の可能性を否定できない。17番「子どもの友達が増えた」は全体調査の時には3以上の項目であったことを考えると、利用6カ月未満では子どもの友達が増えるまでには至っていない可能性もある。23番「自分の本当の気持ちを話せる」に関しては、個人差もあると推測されるが、ポストアンケートで評価が減少していることから、話したくても話せない状況におかれている利用者についてより配慮が必要であることを示唆するものである。これらに対して、20番「他の親子の力になりたいと思うようになった」と29番「子育て以外のことにも関心が広がった」については、全体調査とは異なり、ポスト調査においてやや評価が上がった項目となったのは注目に値する。30番「他の子をあやしたり、抱いたりするようになった」は、17番同様に利用6カ月未満の初期の利用者にとってはハードルが高いものになっている可能性が示唆される。

表 4-10 拠点利用による利用者の自己変容にかかわる評価に関する集計結果（第 17 項目～第 33 項目）

| 項目 番号 | 項目 | プレアンケート | | | | | | ポストアンケート | | | | | 平均値 (標準 偏差) |
|----------|--|---------------|------------|------------|----------|----------|-------------------|---------------|------------|------------|-----------|----------|-------------------|
| | | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | | 平均値 (標準 偏差) | 上段:度数分布 下段:比率 | | | | | |
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 無回 答 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 無回 答 | |
| 17 | 子どもの友だちが増えた | 8 19.5 | 13 31.7 | 16 39.1 | 3 7.3 | 1 2.4 | 2.7 (0.89) | 10 24.4 | 13 31.7 | 15 36.6 | 4 7.3 | - - | 2.7 (0.92) |
| 18 | 子育てをしている親と知り合えた | 24 58.5 | 15 36.6 | 2 4.9 | - - | - - | 3.5 (0.60) | 22 53.7 | 15 36.6 | 3 7.3 | 1 2.4 | - - | 3.4 (0.74) |
| 19 | 大人と日常的な会話を する機会が増えた | 17 41.5 | 21 51.2 | 3 7.3 | - - | - - | 3.3 (0.62) | 18 43.9 | 20 48.9 | 1 2.4 | 1 2.4 | 1 2.4 | 3.4 (0.67) |
| 20 | 他の親子の力になりたい と思うようになった | 5 12.2 | 22 53.7 | 12 29.3 | 1 2.4 | 1 2.4 | 2.8 (0.70) | 9 22.0 | 25 61.0 | 6 14.6 | 1 2.4 | - - | 3.0 (0.69) |
| 21 | わが子なりの成長に 気づき、個性や可能性 を感じる | 28 68.3 | 12 29.3 | 1 2.4 | - - | - - | 3.7 (0.53) | 28 68.3 | 13 31.7 | - - | - - | - - | 3.7 (0.47) |
| 22 | 困ったことがあっても 解決できると思える ように | 21 51.3 | 18 43.9 | - - | 1 2.4 | 1 2.4 | 3.5 (0.64) | 17 41.5 | 20 48.8 | 3 7.3 | 1 2.4 | - - | 3.3 (0.72) |
| 23 | 自分の本当の気持ち を話せる | 16 39.0 | 18 44.0 | 6 14.6 | - - | 1 2.4 | 3.3 (0.70) | 9 22.0 | 21 51.1 | 9 22.0 | 2 4.9 | - - | 2.9 (0.80) |
| 24 | 手がかかっても、わ が子が愛おしいと思 えるようになった | 33 80.6 | 6 14.6 | 1 2.4 | 1 2.4 | - - | 3.7 (0.63) | 29 70.8 | 11 26.8 | - - | 1 2.4 | - - | 3.7 (0.62) |
| 25 | 子育てでつらいのは、 自分だけではないと思 えるようになった | 31 75.6 | 8 19.5 | 2 4.9 | - - | - - | 3.7 (0.56) | 25 61.0 | 13 31.7 | 2 4.9 | 1 2.4 | - - | 3.5 (0.71) |
| 26 | 子育てを助けてくれ る人がいると思える ようになった | 26 63.5 | 14 34.1 | - - | - - | 1 2.4 | 3.7 (0.48) | 23 56.1 | 14 34.1 | 4 9.8 | - - | - - | 3.5 (0.67) |
| 27 | 子どもが親以外の大人 とかかわることができる ようになった | 23 56.1 | 15 36.6 | 3 7.3 | - - | - - | 3.5 (0.64) | 24 58.6 | 14 34.1 | 3 7.3 | - - | - - | 3.5 (0.64) |
| 28 | 面倒なことでも行お うと思う | 12 29.3 | 12 29.3 | 13 31.6 | 4 9.8 | - - | 2.8 (0.99) | 10 24.4 | 13 31.7 | 13 31.7 | 5 12.2 | - - | 2.7 (0.99) |
| 29 | 子育て以外のことにも 関心が広がった | 12 29.3 | 18 43.8 | 9 22.0 | 2 4.9 | - - | 3.0 (0.85) | 13 31.7 | 17 41.5 | 9 22.0 | 1 2.4 | 1 2.4 | 3.1 (0.82) |
| 30 | 他の子をあやしたり、 抱いたりするよにな った | 11 26.8 | 17 41.5 | 12 29.3 | 1 2.4 | - - | 2.9 (0.82) | 10 24.4 | 18 43.9 | 10 24.4 | 3 7.3 | - - | 2.9 (0.88) |
| 31 | 自分の情報や経験は、 他の人の役に立つ | 16 39.0 | 20 48.8 | 3 7.3 | 2 4.9 | - - | 3.2 (0.79) | 14 34.1 | 24 58.6 | 2 4.9 | - - | 1 2.4 | 3.3 (0.56) |
| 32 | まわりの人と子育ての 価値観が違ってても よいと思えるよにな った | 22 53.7 | 16 39.0 | 3 7.3 | - - | - - | 3.5 (0.64) | 21 51.3 | 17 41.5 | 1 2.4 | 1 2.4 | 1 2.4 | 3.5 (0.68) |
| 33 | 他の人も子育てを頑 張っていると思う | 39 95.1 | 2 4.9 | - - | - - | - - | 4.0 (0.22) | 37 90.2 | 4 9.8 | - - | - - | - - | 3.9 (0.30) |

②拠点利用頻度と利用者変容との関連性

第17項目～第33項目によって尋ねた「地域子育て支援拠点の利用によってもたらされる利用者側の変容」が、どのような側面によって構成されているのかを明らかにするために、回答者全体（n=41）のデータを全体調査で導き出された因子分析の結果を活用して分析をおこなった。その際、ポストアンケート時の利用頻度による利用者側の変容をみるため、月4回未満の群、月4～8回未満の群、月8回以上の群に分けて一要因分散分析を行った。また、4件法により回答が得られた結果をより強調して傾向を把握するために、1「あてはまる」2「だいたいあてはまる」を1とし、3「あまりあてはまらない」4「あてはまらない」を0とし、2値に置き換えて分析を行った。その結果を表4-11に示す。

表4-11 ポストアンケート時の利用頻度群別の3つの因子得点の比較

| 因子(名) | 群 | n | 平均値 | 標準偏差 | P値 | 有意差 |
|--------------------|---------|----|-------|-------|--------|---------|
| 第1因子 エンパワメント | 月4日未満 | 12 | 0.917 | 0.154 | 0.3775 | |
| | 月4～8日未満 | 17 | 0.963 | 0.086 | | |
| | 月8日以上 | 10 | 0.975 | 0.053 | | |
| 第2因子 交流の広がり・深まり | 月4日未満 | 11 | 0.782 | 0.209 | 0.2312 | |
| | 月4～8日未満 | 17 | 0.776 | 0.199 | | |
| | 月8日以上 | 10 | 0.900 | 0.141 | | |
| 第3因子 自己有用・有能感 | 月4日未満 | 12 | 0.556 | 0.296 | 0.0165 | *P<0.05 |
| | 月4～8日未満 | 16 | 0.792 | 0.240 | | |
| | 月8日以上 | 10 | 0.867 | 0.233 | | |

表4-11から、拠点において利用頻度の高い利用者は、そうでない利用者に比べて、第3因子として導き出された「自己有用・有能感」が以前よりも高まっていると認識していることが明らかにされた。

③拠点に対する評価と拠点利用による変容との関連性

次に、全体調査（本報告書第2章）における調査分析と同様に、支援者の寄り添い型支援が、拠点利用者のどのような成長を導く可能性があるのかを検討できるよう、利用者を2群に分けて検証を行った。すなわち、ポストアンケートにおける第9項目から第16項目までの合成得点（各項目の粗点を単純加算）の平均値を算出し、この値より各自の合成得点が高い利用者を「高評価群」とし、それがこの値よりも低い利用者を「低評価群」とし、第17項目から第33項目までのデータから得られた3つの因子得点をこれら両群間で比較（対応のないt検定）した。その結果を表4-12に示す。

表4-12 拠点における寄り添い型支援に関する高評価群・低評価群別の3つの因子得点の比較

| 因子(名) | 群 | n | 平均値 | 標準偏差 | 統計量(t) | 自由度 | 有意差 |
|--------------------|-----|----|------|------|--------|-----|-------|
| 第1因子 エンパワメント | 高評価 | 25 | 3.72 | 0.27 | 3.39 | 23 | 0.003 |
| | 低評価 | 16 | 3.31 | 0.43 | | | |
| 第2因子 交流の広がり・深まり | 高評価 | 25 | 3.25 | 0.46 | 2.84 | 39 | 0.007 |
| | 低評価 | 16 | 2.81 | 0.53 | | | |
| 第3因子 自己有用・有能感 | 高評価 | 25 | 3.13 | 0.58 | 2.55 | 39 | 0.015 |
| | 低評価 | 16 | 2.69 | 0.49 | | | |

*第2因子、第3因子については分散の等質性が確認されたので「スチューデントのt検定」を、第1因子については等分散が担保されなかったため、「ウェルチの検定」を行っている。

いずれの因子においても、高評価群の平均値が低評価群の平均値より高く、両群の間に危険率 5%未満の有意差が見られている。この結果から、全体調査（本報告書 第 2 章）同様に、拠点において寄り添い型支援を確かに受けていると評価している利用者は、そのように評価していない利用者比べて、自身がエンパワメントされたと感じ、交流の広がりや深まりを実感し、自分が以前よりも有用・有能感を得られていることが明らかになった。

(4) 質的調査(聞き取り調査)

聞き取り調査は、全体調査と同様の手法・手順に従って実施された。結果は全体調査の分類にそって、5箇所の利用者に対する聞き取り調査の内容を確認、検証した。

①安全基地と安全な避難場所の獲得

計画的に外出ができるようになり生活リズムができた、転居してきたばかりだったので地域の情報を教えてもらい助かった、外出が怖かったのに一緒にご飯も食べられる場で衝撃的に楽しく心が楽になった、自分だけではないと思えて気持ちの面で楽になった、というような安心できる居場所の獲得が、気持ちを楽にしていることが語られている。

②親の愛着対象の認識と獲得

最初はスタッフから話しかけてくれた、今はこちらから質問したりできる。母としてダメな部分をここでは話せる、いつも声をかけてもらいホットしている、頼りにしている、いつでも来ていいよというメッセージが伝わるなど、愛着対象としてのスタッフの存在が、利用して6カ月未満の利用者すべてから聞き取ることができた。

③セルフケアの意識

育休中の利用者からは、復帰に向けて生活のリズムができるよう計画的に拠点に通っている、出かけるために掃除・洗濯をメリハリつけてこなしている、拠点に通うというだけでいいサイクルが回りだした、寝る時間・食事・家事・気持ちも前向きになった、ストレスが減って読書をする気になったという発言があった。スタッフや利用者と話することで、生活リズムの安定が図られ、ストレスの発散によりセルフケアの意識が向上する様子がうかがえた。

④養育力の獲得

家にいるときは1対1でイライラしていたが、余裕が生まれてぐずっても気持ちのアピールだと思えるようになった、緊張感が和らいだ、家ではさせられない子ども同士の関わりを見守るようにしている、スタッフや親たちからの助言で子どもとの関わりを実践してみた、今は冷静に対応できている、自分から子どもが離れて遊んでくれるようになった等、情緒的なゆとりの獲得が語られた。多くの方が、子どもに寛容になった、子どもの興味関心に気づくようになった、子どもに対して「ながら対応」をしなくなった、子ども同士の関わりにどう手助けすべきか考えるようになった等、親としての養育力の獲得は多岐にわたることが把握された。

⑤他者に頼る力

職員は、なんでも聞ける頼れる存在となっている。信頼して任せていいと思えたなど、他者に頼っているのだというコメントがあった。

⑥子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得

子どものことをほめてくれる利用者のおじいちゃんに子どもがなついた。今まで男の人がだめだったので驚いたなどはあったが、親同士の分かち合いまでの発言は少なかった。

⑦経験を活かした自己実現への意識の高まり

多くの対象者から、子育てが安定してきて、子育てが楽しいと感じるようになったとの発言があった。また多様な親子の様子を見て、子育ての考え方が緩んだ。あまり頑張らなくてもいいと思えた。自分のために読書の時間をとれるようになった、レジの人にも「ありがとう」や近所の人にも挨拶をするようになったなど自分の成長や寛容な自分を意識できるように変化している様子がわかった。

⑧肯定的な養育イメージの獲得

肯定的な養育イメージは、子どもにやさしい声かけができるようになった、子どもと出かけるのが楽しくなった等の語りからうかがうことができた。

⑨親世代との関係の見直し

自分の両親に拠点での写真や動画を送って安心させ、保育所入所への不安を取り除いた、夫の実家の前に引っ越してきたが過ごしやすいくということが述べられていた。

⑩将来展望の獲得(親としての将来イメージを持つ)

子ども同士の関わりをみて、保育所を活用しながらの職場復帰を前向きにとらえることができた。一方、仕事に関しては、もう少し後でいいと思えるようになった、今は仕事をしていないが、いずれしようと思っているなどの将来展望が語られると同時に、それぞれのタイミングでいいなど自分なりの展望を持てるようになっている。

⑪配偶者との関係の見直し

夫は、拠点に来たことはないが、自分がたくさん伝えているのでかなりの情報通である。子ども中心に夫婦の会話が増えた、よその情報を聞いているとイクメンはそう多くないと思えた、うちの夫はまだましと思えた、拠点に来るようになっていから夫にやさしくなった等、前向きな配偶者との関係の変化が語られた。

⑫職業観の獲得

育休中の方からは、教育関係者なので多様な子育て家庭に出会い、多様な子どもに出会ったことが仕事にも良い影響を及ぼす可能性の指摘があった。仕事するかどうか迷っていたが、今の状態でよいと思えるようになった、いずれ仕事をするときのイメージ作りに役立っているというような発言が見られた。

⑬他者への貢献意識の獲得

拠点で地元のママたちに出会って輪が広がった、地域の行事に出かけることが多くなった、転勤先のこの地域に関心をもってきた、小さい子どもを連れている人がいたら声をかけたくなる、子どもを通じて地域のことを知ることができている、自分の地域に愛着と自信が生まれた等、他者や地域への貢献意識の芽生えが感じられた。

IV. 総括

地域子育て支援拠点の利用者が、拠点スタッフの「寄り添い型支援」によって、「親としてどのような成長」を遂げていくのかを明らかにするため、全国の5拠点における拠点初期利用者が、短期間の利用（3カ月）によってどのように変化するかを中心に、拠点スタッフの「寄り添い型支援」と利用者の「親としての成長」について、支援者と利用者を対象とした質問紙調査、聞き取り調査から得られた結果を整理する。

(1) 初期利用者の「親としての成長」について

本調査は、拠点初期利用者の3カ月後の変化を検証するために、支援者と利用者を対象とした質問紙（量的）調査、聞き取り（質的）調査を行った。量的調査では、全体調査と概ね同様の結果が得られ、拠点に対する評価は全体的に高いものであった。しかし、拠点利用者に拠点に対する評価については3カ月後にすべての項目で評価がやや下がっていた。このことは、利用が進む中で利用者の自己開示（既述と同意）が進んで気兼ねなく評価できた結果なのか、利用3～6カ月で評価が固定してくるということなのか、3カ月間では変化が見られないということなのか、さらに検証が必要である。拠点利用による利用者の自己変容にかかわる評価についても同様に3カ月後の変化はあまり見られない結果となった。

しかし、拠点の利用頻度によって、親としての成長の側面に特徴があることがわかった。プレアンケート時よりもポストアンケート時における利用頻度が増えた利用者は51.2%となっており、その理由は、多い順から「居心地がいい」「子ども同士を遊ばせたい」「行くのが習慣になった」「行事やイベントへの参加」「同じ立場の親同士の交流」「子どもが行きたがる」といったことであった。そこで、ポストアンケート時の利用頻度群別の比較を行ったところ、利用者の親としての成長の3つの側面である、第1因子「エンパワメント」、第2因子「交流の広がり・深まり」、第3因子「自己有用・有能感」のうち、利用頻度が高い利用者群は、第3因子「自己有用・有能感」が、より高まっていることがわかった。

質的調査からは、計画的に外出することで生活リズムができ、一緒にご飯を食べることで楽しさが増し心が楽になったなど、安心の場が得られたことによる日々の生活の充実ぶりが語られていた。また、スタッフに声をかけてもらうことで、今では自分から質問ができる、ダメな部分も話せるようになるなどスタッフを愛着対象とみている様子がわかった。生活全体が良いサイクルで回りだし、気持ちも前向きなるなどのセルフケア意識の向上、子どもとの関わりに余裕や改善がみられ、そしてそのことを自覚し、ありのままの自分でいいと思えるような自己実現意識の高まりなども語られた。さらには、多様な親子との交流により、自分の子育てを客観的に捉え、職業と子育ての将来イメージや、配偶者との関係の見直し等、前向きな関係の変化についても述べられていた。このように、拠点を利用して6カ月程度の初期利用者についても親の成長のプロセスが進化している状況がある程度把握できる結果であった。しかし、利用者同士の交流の深まりや子どもの育ちを分かち合える仲間の獲得に関する聞き取り内容は少なく、このような深まりについては、利用頻度が増すなど一定の時間がかかるものと推察される。

(2) 利用者の「寄り添い型支援」に対する認識と「親としての成長」との関連について

量的調査においては、全体調査同様に、利用者による拠点や支援者に対する評価（利用者調査における第9項目～第16項目）の結果を利用して、「寄り添い型支援」と「親としての成長」の関連性を分析した。その結果、拠点の評価を肯定的に評価している高評価群の方が、低評価群に比べて、「親としての成長」に関する3つの因子得点がすべて有意に高いことが明らかになった。つまり、寄り添い型支援を受けていると意

識している利用者の方が親としての自らの成長を「エンパワメント」「交流の広がり・深まり」「自己有用・有能感」として明確に意識できているという可能性が導きだされた。

聞き取り調査においては、親のニーズを的確に把握しながら対応している支援者の姿がイメージできるものであった。例えば、「話したくても話せない人が多い」と支援者が推測し、利用者からは「支援者から話しかけてくれたので何とか話せるようになった」という発言が見られた。また、親のわが子理解の援助として、支援者が「積極的に子どもに関わり、子どもをほめたり、子どもからのサインの代弁をする」と語り、利用者からは「スタッフや他の親たちからの助言で子どもとの関わりを実践してみたところ、今は冷静に対応できている」というようなコメントが寄せられている。このように、支援者は、親子の現状を見極め、親の成長のプロセスに応じて必要な支援や環境を整えている様子が把握された。

(3) 今後の課題

本調査は、拠点初期利用者の3カ月後の変化を検証するために、支援者と利用者を対象とした質問紙調査、聞き取り調査を行ったが、いずれの調査結果も、全体調査の結果と大きな違いはなかった。量的調査においては、3カ月後大きな変化は見られなかったが、利用頻度によって「自己有用・有能感」といった支援効果が高くなることが予測された。このことから、拠点初期利用者と想定した「利用して3~6カ月程度の利用者」は、ある程度定期的に通う中で、場の力や拠点スタッフの支援により、すでに「親としての成長」がみられていると予測することができる。まとめると以下のようなことになる。

- ・拠点利用による支援は、ある程度定期的に通うことで、利用して3~6カ月であっても「親としての成長」に寄与している。
- ・「寄り添い型支援」を受けていると認識している利用者は、「親としての成長」を感じやすい。特に利用頻度が高い利用者は、その傾向が強まる。

残る課題は以下の通りである。

拠点で提供される支援によって、利用開始後3~6カ月あっても、ある程度定期的に通うことで、「親としての成長」が導かれることを確認するためには、初期の利用者に対するより詳細な調査を実施することが求められる。

調査の結果から、拠点の支援者が捉える「寄り添い型支援」の構造と機能及び展開、こうした「寄り添い型支援」と「親としての成長」との関連がある程度明らかにされるとともに、利用し始めたばかりの保護者がどのようなプロセスを経て「親としての成長」を獲得していくのかについても、示唆的な結果が得られたものの、そのプロセスが十分に明らかにされたとは言い難い。これらの点については、今回の調査研究で把握された分析結果を踏まえて、さらに実証的に検討していくことが必要である。

第5章 文献調査

「寄り添い型支援」に関する文献調査

「寄り添い型支援」の概念自体は、2008年のリーマン・ショック後の生活困難者支援の実践の中で盛んに使われるようになり、当事者の支援ニーズに合わせて継続的なコーディネートを図るパーソナル・サポート・サービスへの取り組みの中で、政府や自治体も言及するようになった[2010年6月・菅首相所信表明]。同じような意味で「伴走型支援」という言葉も使われている。その後、貧困対策にとどまらず、中小企業支援や若者の自立支援、災害復興支援、女性支援、子育て支援などの分野でも援用されるようになったが、概念自体が生まれて日が浅いこともあり、先行研究はあまり多くない。

まず、子育て支援の文脈で「寄り添い型支援」をテーマにした先行研究としては、佐藤まゆみ [2017] が挙げられる。佐藤は、4市の子ども家庭福祉担当者にインタビューし、市町村の支援の特徴を児童相談所の支援と対比させて「寄り添い型」と位置付けた。児相の支援は、対象が抱える問題が重篤であっても明確で、短期的な関わりで方針が確定することが多いのに対し、市町村の支援は「比較的軽微」な状態にある子どもや保護者に対応するが、主訴が不明確で、方針が定まりにくく、支援の効果も判断しにくい、としている。

このほか、武田玲子 [2016] は、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」制定を受けて始まった学習支援事業における虐待予防の可能性を探るため、「寄り添い型学習支援」へのインタビューを行った。また、池田恭子、福島喜代子 [2014] は、婦人保護施設における「伴走型支援」を、母子統合への支援の文脈で扱っている。

寄り添い型支援・伴走型支援といったカテゴリーは、ニート問題などを背景とした若者の自立支援の文脈で語られることも多い。全国社会福祉協議会[2016]は、新潟県のNPOの若者への「伴走型支援」が、高齢者や地域にもプラスの影響をもたらしている事例を紹介している。また、天地洋介[2018]や川崎孝明ら [2014]は、大学における学生支援部局の寄り添い型支援・伴走型支援をテーマにしている。

一方、こうした個別の社会福祉的施策に先行する形で始まった生活困難者支援の文脈では、多くの先行研究が存在する。まず、2013年の生活困窮者自立支援法成立に至る過程で、伴走型支援の意義を強調した文献として、湯浅誠[2010]、大杉友祐[2012]、奥田知志[2014]、奥田知志/稲月正/垣田裕介/堤圭史郎[2014]およびその書評などがある。さらに、同法成立の前後の現場での支援をとりあげたものとして、大阪・あいりん地区の事例を扱ったありむら潜[2012]、大阪・東淀川区の事例を扱った谷口伊三美[2016a, b]、福岡市の事例を扱った稲月正[2016]などがある。さらに、同法から広げて生活保護や多重債務者への寄り添い型支援をテーマにしたものとして、内田充範[2018]、堤圭史郎[2013]などが挙げられる。

また、東日本大震災の復興の過程で、「全国的に社会的排除のリスクが急速に高まっている」として、生きにくさ、暮らしにくさを抱える人々に対して電話による相談を受け、悩みを傾聴し、必要に応じ同行支援もする「寄り添い型相談支援事業が2013年度から厚労省の事業として始まった。これについて取り上げた研究として、加納恵子[2013]などがあり、より対象を広げた地域福祉における「伴走型支援」については中山徹[2012]、靫島一匡[2012]、津富宏[2013]、竹端寛[2015]、千葉俊輔[2017]らを取り上げている。

なお、やや文脈は異なるが、「伴走型支援」は中小企業支援においても取り上げられることが増えている。この関係では、衣笠公浩[2015]、永田瞬、井上真由美 [2016]、伊藤和良[2016]などの研究がある。

【一覧】

- 佐藤 まゆみ[2017],「市町村における子ども家庭福祉行政実施体制の評価と課題」,『和洋女子大学紀要』57, pp.119-131, 和洋女子大学
- 武田 玲子[2016],「学習支援事業における児童虐待予防の可能性:寄り添い型学習支援の支援者へのインタビューより探る」,『研究所年報』46, pp.35-48, 明治学院大学社会学部附属研究所
- 池田 恭子, 福島 喜代子[2014],「婦人保護施設における伴走型支援:ライフステージごとの課題と母子統合への支援」,『ソーシャルワーク研究』3, pp.67-76
- 全国社会福祉協議会[2016]「若者への伴走型支援で高齢者も地域も元気に:新潟県 特定非営利活動法人 にいがた若者自立支援ネットワーク・伴走舎 [人と人をつなぐ実践]」,『月刊福祉』99, pp.11, 全国社会福祉協議会
- 天池 洋介[2018],「学生支援部局との連携による,「合理的配慮」の実践ーニーズの把握と伴走型支援、ユニバーサルデザイン型教育の構築ー」,『日本福祉大学全学教育センター紀要』6, pp.93-102, 日本福祉大学全学教育センター
- 川崎 孝明, 川嶋 健太郎, 川口 恵子[2014],「大学における寄り添い型学生支援体制の構築-中途退学防止の観点からの実践的アプローチ」,『尚絅大学研究紀要.A 人文・社会科学編』46, pp.75-89, 尚絅大学
- 湯浅 誠[2010],「講演・雇用保険でもなく、生活保護でもない第2のセーフティネットと伴走型支援(特集・今、キャリア形成に問われていること--若者から50代までの経路の中で)」,『Business labor trend』, pp.9-13, 労働政策研究・研修機構
- 大杉 友祐[2012],「生活困窮者に対する伴走型支援への展望[特集社会福祉法人の存在意義]」,『月刊福祉』95, p.12
- 奥田 知志[2014],「基調講演・困窮孤立世帯に対する伴走型支援とはなにか:生活困窮者支援の現場から(平成25年度生活福祉学科公開講座・都市の高齢困窮者支援の最前線)」,『京都女子大学生生活福祉学科紀要』10, pp.28-33,
- 奥田知志/稲月正/垣田裕介/堤圭史郎[2014],「生活困窮者への伴走型支援」,明石書店
- 書評[2015]「この一冊『生活困窮者への伴走型支援』奥田知志/稲月正/垣田裕介/堤圭史郎著」,『週刊社会保障』69, p.28, 法研
- 益田 仁[2015],「書評『生活困窮者への伴走型支援:経済的困窮と社会的孤立に対応するトータルサポート』奥田知志・稲月正・垣田裕介・堤圭史郎著」,『社会分析』42, pp.219-221, 日本社会分析学会
- 野田 博也[2014],「奥田知志・稲月正・垣田裕介・堤圭史郎著 生活困窮者への伴走型支援:経済的困窮と社会的孤立に対応するトータルサポート」,『社会福祉学』55, p.3, 一般社団法人日本社会福祉学会
- ありむら 潜[2012],「ワンストップ型, あいりん地域トータルケア・システム構築の提案:あいりん総合センター建て替えと併せて(特集「西成特区構想」への提言)」,『ホームレスと社会』7, pp.74-77, 明石書店
- 谷口伊三美[2016a],「包括的な伴走型支援の展開:大阪市東淀川区の生活困窮者自立支援の取り組み [特集 生活困窮者支援の現場から:生活困窮者自立支援法施行から1年]」,『公的扶助研究』83, pp.3-6, 全国公的扶助研究会

- 谷口伊三美[2016b],「包括的な伴走型支援の展開:大阪市東淀川区の取り組みから[特集 実施された生活困窮者自立支援法は現実に生活困難を解決するのか:現場実践から課題を検証する]」,『福祉のひろば』191, pp.14-17, 大阪福祉事業財団
- 稲月 正[2016],「生活困窮者への伴走型支援:福岡市におけるパーソナルサポート・モデル事業の成果と課題[シンポジウム特集社会的支援と連帯]」,『社会分析』43, pp.131-138, 日本社会分析学会
- 内田 充範[2018],「生活保護自立支援プログラムが構想した自立の三類型:釧路モデルを基盤とした総合的・継続的・寄り添い型支援への展開」,『山口県立大学学術情報』11, pp.99-109, 山口県立大学
- 堤 圭史郎[2013],「多重債務世帯への社会的介入:「伴走型支援」を通じた当事者の主観的意味への働きかけ[特集 家族形成と社会再生産]」,『社会分析』40, pp.5-20
- 加納 恵子[2013],「排除型社会と過剰包摂:寄り添い型支援事業の地域福祉的意味[特集生きる「場」と関係の創出:社会的包摂を可能とする地域福祉]」,『地域福祉研究』41, pp.52-62, 日本生命済生会
- 中山 徹[2012],「援助技術伴走型支援士育成事業」,『ホームレスと社会』6, pp.106-109, 明石書店
- 齋島 一匡[2012],「ひとびとの声に耳を傾けて:伴走型支援の現場から(特集・再生へ向け、今、直視すべきことーあの日から1年)」,『社会運動』384, pp.14-18, 市民セクター政策機構
- 津富 宏[2013],「静岡方式で行こう:地域を創る伴走型支援」,『所報協同の発見』246, pp.97-106, 協同総合研究所
- 竹端 寛[2015],「誰にとって、どのような、「多重」、「複合」?:当事者主体の、「寄り添い型支援」の実現に向けて[特集 多重・複合問題:地域と縦割りをどう超えるか]」,『福祉労働』145, pp.8-17, 現代書館
- 千葉 俊輔[2017],「地域づくり活動への伴走型支援について[特集地域シンクタンクの時代:地域人材が進める地方創生]」,『地域開発』622, pp.12-16, 日本地域開発センター
- 衣笠 公浩[2015],「企業成長におけるナンバー2 の役割と機能に関する予備的考察」,『商大ビジネスレビュー』5, pp.1, 兵庫県立大学大学院経営研究科
- 永田瞬, 井上真由美 [2016],「中小企業への伴走型支援活動:高崎商工会議所での聞き取り調査記録」,『産業研究』51, pp.87-94, 高崎経済大学地域科学研究所
- 伊藤 和良[2016],「「川崎モデル」と称される 中小企業伴走型支援の生成と展開について[特集地方創世と知財]」,『日本知財学会誌』12, pp.3, 日本知財学会

資 料 編

I. 量的調査 調査票

1. 地域子育て支援拠点の支援者アンケート

厚生労働省 平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
「地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究」

地域子育て支援拠点の支援者アンケート

(1)あなたが勤務する地域子育て支援拠点とあなたの業務についてお答え下さい。

1. あなたが勤務する地域子育て支援拠点の名称を記して下さい

2. 上記の所在地・連絡先を記して下さい

〒 _____ 都道府県 _____

住所 _____

TEL _____ FAX _____ メールアドレス _____

3. 上記の運営主体に、あてはまるものに○をつけて下さい（1つ選択）

1. 自治体直営 2. NPO法人 3. 社会福祉法人 4. 社会福祉協議会 5. 学校法人
6. 株式会社 7. 任意団体 8. その他()

4. 上記の実施場所に、あてはまるものに○をつけて下さい（1つ選択）

1. 保育所 2. 認定こども園 3. 幼稚園 4. 公共施設・公民館 5. 児童館 6. 単独施設
7. 空き店舗・商業施設 8. 民家・マンション等 9. その他()

5. 上記の1日あたりの従事者数に、あてはまるものに○をつけて下さい（1つ選択）

1. 1人 2. 2人 3. 3～4人 4. 5～9人 5. 10人以上

6. 1日あたりの利用親子の組数に、あてはまるものに○をつけて下さい（1つ選択）

1. 5組未満 2. 5～10組未満 3. 10～20組未満 4. 20～50組未満 5. 50組以上

7. あなたの勤務日数に、あてはまるものに○をつけて下さい（1つ選択）

1. 3日以下 2. 4日 3. 5日 4. 6日

8. あなたの1日の勤務時間に、あてはまるものに○をつけて下さい（1つ選択）

1. 3時間未満 2. 3～6時間未満 3. 6～8時間未満 4. 8時間以上

9. あなたが現在の地域子育て支援拠点に勤務してきた期間に、あてはまるものに○をつけて下さい（1つ選択）

1. 1年未満 2. 1～2年未満 3. 2～3年未満 4. 3～4年未満
5. 4～5年未満 6. 5～6年未満 7. 6～7年未満 8. 7～10年未満 9. 10年以上

(2) あなたの日々の支援について、1～4のうち最もあてはまる番号に○をつけてください。

| 設 問 | | 1 あては まる | 2 だいたい あてはま る | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらな い |
|-----|---|----------------|------------------------|-------------------------|----------------------|
| 10 | 親子の交流を通して親同士の支え合いや子ども同士の育ち合いを促している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 地域の連携や交流を図るなどの活動に取り組んでいる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 | 親及び子どもの性別、出身地、民族、国籍、障がいなどにかかわらず、すべての親子の支援を対象としている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 | 親子の孤立を防ぎ、子育ての不安感を軽減するように働きかけている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 | 利用者全体の動きをよく把握し、利用者同士がつながれるよう心掛けている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15 | 個別の相談に応じたケースの記録、日報や活動記録などを作成、支援の検証や改善につなげている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16 | 定期的にミーティングやケース会議を持ち、相互に利用者理解を深め、職員間で協力し、支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 17 | 子育て等に関する相談や援助を行っている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18 | 日頃から利用者に関わり、気兼ねなく相談に応じられるよう、声をかけている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19 | 利用者との日常的な会話や態度などの様子を通して、家庭での子育てや生活背景の理解に努めている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20 | 相談の際は、相づちや視線に配慮しながら、受容と共感的な態度で接している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 21 | 子どもの個性や発達を理解し、親とともに成長を見守っている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22 | 利用者同士が同じ課題について語り合う機会を意識的に設けている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23 | 利用者に対して子育てに関する情報を幅広く収集し、情報の提供を行っている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24 | 子育てや子育て支援に関する講習などを月一回以上実施している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25 | 子ども一人ひとりの最善の利益を尊重している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26 | 親が支えを得て子育てに取り組む、子どもに向き合うゆとりと自信を持てるように支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 27 | 利用者のこれまでの経験や体験（職業を含む）を活かしつつ親として成長できるように支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 28 | 利用者の悩みを理解し、その軽減や解決のための方法を共に考え、最終的に本人の自己決定を尊重している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 29 | 子どもが様々な人たちとの関係性の中で、他者への信頼感を高められるように支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 30 | 利用者がいつでも支援者に手助けを求めることができるように、水平・対等な関係を築いている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 31 | 利用者が他の子どもにも気づき、意識し、他の親とともに子育てする姿勢が育つよう、関わっている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 32 | 親への支援を通し、支援者が自らの成長を感じ、またそれを支援に活かしている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 33 | 利用者同士が、今後も同じ地域で支え合いながら子育てをしていくことを視野に入れて、支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 34 | 他の子の成長を利用者が我が子のことのように共感性をもって接していけるように、支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |

アンケートは以上です。ご記入いただいた本紙は専用封筒に入れて、**10月25日までに、ポストに投函下さい。**ご協力ありがとうございました。

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 研究代表者 坂本純子

2. 地域子育て支援拠点の利用者アンケート

厚生労働省 平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
「地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究」

地域子育て支援拠点の利用者アンケート

(1)あなたとあなたの子育ての状況について質問します。

1. 拠点をいっしょに利用している子どもにとって、あなたは、次のどれにあてはまりますか？
あてはまる番号に○をしてください

1. 母 2. 父 3. 祖母 4. 祖父 5. その他 ()

2. あなたの子どもの月齢と、拠点以外に利用している施設があれば○をつけてください。

| 第○子 | 月 齢 | 利用している施設があれば○をつけてください | | | |
|-----|------|-----------------------|-----|--------|---------------|
| | | 保育園 | 幼稚園 | 認定こども園 | その他（施設の種類を記入） |
| 第1子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第2子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第3子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第4子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第5子 | 歳 カ月 | | | | |

3. 現在いっしょに拠点を利用している子どもは、何番目のお子さんですか？あてはまる番号
に○をしてください

1. 第1子 2. 第2子 3. 第3子 4. 第4子 5. 第5子

4. 拠点を利用し始めてから現在の期間にあてはまる番号に○をしてください（1つ選択）

1. 3ヶ月未満 2. 3～6ヶ月未満 3. 6～1年未満 4. 1～2年未満 5. 2年以上

5. 1ヶ月あたりの拠点の利用頻度にあてはまる番号に○をしてください（1つ選択）

1. 月4日未満 2. 月4～8日未満 3. 月8～12日未満 4. 月12日以上

6. あなたの年齢にあてはまる番号に○をしてください（1つ選択）

1. 19歳以下 2. 20～24歳 3. 25～29歳 4. 30～34歳

5. 35～39歳 6. 40～44歳 7. 45～49歳 8. 50歳以上

7. 現在のあなたの就労状況について、いずれかあてはまる番号に○をしてください

1. 働いている 2. 働いていない

→1に○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？（1つ選択）

1. フルタイム 2. パートタイム 3. その他()

→2○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？（1つ選択）

1. 育児休業中 2. 結婚を機に退職 3. 出産を機に退職 4. その他()

8. 子育てを日常的に手伝ってくれる人はいますか？

1. はい 2. いいえ

→1に○をつけた方に伺います。それは次のうち誰ですか？

1. 配偶者 2. 実母 3. 実父 4. 義母 5. 義父 6. 祖父母 7. 兄弟姉妹

8. 隣人 9. 友人 10. その他 ()

(2)あなたとあなたの子育ての状況について質問します。1～4のうち最もあてはまる番号に○をつけてください

| あなたが利用している地域子育て支援拠点について、該当する答え1～4のいずれかに○をしてください | | 1 あては まる | 2 だいた いあて はまる | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらない |
|--|-------------------------------------|----------------|------------------------|-------------------------|------------------|
| 9 | あいさつと笑顔で、親子を温かく迎え入れてくれる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10 | 職員は、ふだんから親子の交流の場におらず、日常的な関わりはほとんどない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 多様な親子が利用できる雰囲気がある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 | 職員は、気持ちや悩みを受け止め、共感してくれる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 | 解決方法を押し付けられているように感じることもある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 | 子育ての悩みなどを気兼ねなく相談できる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15 | 子ども同士、トラブルがあると利用しにくい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16 | 子育てを支えられていると感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 地域子育て支援拠点を利用したことをきっかけに、あなたとあなたの子どもが得られたこと、変わったことなどについて、該当する答え1～4のいずれかに○をしてください | | 1 あては まる | 2 だいた いあて はまる | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらない |
| 17 | 子どもの友だちが増えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18 | 子育てしている親と知り合えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19 | 大人と日常的な会話をする機会が増えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20 | 他の親子の力になりたいと思うようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 21 | わが子なりの成長に気づき、個性や可能性を感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22 | 困ったことがあっても解決できると思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23 | 自分の本当の気持ちを話せないことがある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24 | 手がかかっても、わが子が愛おしいと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25 | 子育てでつらいのは、自分だけでないと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26 | 子育てを助けてくれる人がいると思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 27 | 子どもが親以外の大人とかかわることができるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 28 | 面倒なことは、あまりやりたくないと思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 29 | 子育て以外のことにも関心が広がった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 30 | 他の子をあやしたり、抱いたりするようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 31 | 自分の情報や経験は、他の人の役に立つとは思えない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 32 | まわりの人と子育ての価値観が違ってよいと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 33 | 他の人も子育てをがんばっていると思う | 1 | 2 | 3 | 4 |

アンケートは以上です。ご記入いただいた本紙は専用封筒に入れて、**10月25日までに、ポストに投函下さい。**ご協力ありがとうございました。

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 研究代表者 坂本純子

II. 量的調査の結果

1. 「地域子育て支援拠点の支援者アンケート」調査結果

回収数...(数量)

| | |
|-----|-----|
| 無回答 | 0 |
| 全体 | 259 |

調査区分...(SA)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|-----|-------|
| 1 | WEB調査 | 185 | 71.4 |
| 2 | 郵送調査 | 74 | 28.6 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

(1) 2. 勤務する地域子育て支援拠点の所在地

| No. | カテゴリー名 | n | % | No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|----|------|-----|--------|-----|-------|
| 1 | 北海道 | 6 | 2.3 | 26 | 京都府 | 3 | 1.2 |
| 2 | 青森県 | 4 | 1.5 | 27 | 大阪府 | 18 | 6.9 |
| 3 | 岩手県 | 11 | 4.2 | 28 | 兵庫県 | 5 | 1.9 |
| 4 | 宮城県 | 2 | 0.8 | 29 | 奈良県 | 1 | 0.4 |
| 5 | 秋田県 | 1 | 0.4 | 30 | 和歌山県 | 2 | 0.8 |
| 6 | 山形県 | 2 | 0.8 | 31 | 鳥取県 | 0 | 0.0 |
| 7 | 福島県 | 2 | 0.8 | 32 | 島根県 | 0 | 0.0 |
| 8 | 茨城県 | 2 | 0.8 | 33 | 岡山県 | 2 | 0.8 |
| 9 | 栃木県 | 6 | 2.3 | 34 | 広島県 | 3 | 1.2 |
| 10 | 群馬県 | 0 | 0.0 | 35 | 山口県 | 0 | 0.0 |
| 11 | 埼玉県 | 23 | 8.9 | 36 | 徳島県 | 0 | 0.0 |
| 12 | 千葉県 | 7 | 2.7 | 37 | 香川県 | 4 | 1.5 |
| 13 | 東京都 | 30 | 11.6 | 38 | 愛媛県 | 2 | 0.8 |
| 14 | 神奈川県 | 36 | 13.8 | 39 | 高知県 | 3 | 1.2 |
| 15 | 新潟県 | 2 | 0.8 | 40 | 福岡県 | 9 | 3.5 |
| 16 | 富山県 | 2 | 0.8 | 41 | 佐賀県 | 3 | 1.2 |
| 17 | 石川県 | 4 | 1.5 | 42 | 長崎県 | 2 | 0.8 |
| 18 | 福井県 | 4 | 1.5 | 43 | 熊本県 | 0 | 0.0 |
| 19 | 山梨県 | 4 | 1.5 | 44 | 大分県 | 9 | 3.5 |
| 20 | 長野県 | 4 | 1.5 | 45 | 宮崎県 | 0 | 0.0 |
| 21 | 岐阜県 | 7 | 2.7 | 46 | 鹿児島県 | 6 | 2.3 |
| 22 | 静岡県 | 0 | 0.0 | 47 | 沖縄県 | 0 | 0.0 |
| 23 | 愛知県 | 23 | 8.9 | | 無回答 | 0 | 0.0 |
| 24 | 三重県 | 4 | 1.5 | | 全体 | 259 | 100.0 |
| 25 | 滋賀県 | 1 | 0.4 | | | | |

3. 上記の運営主体に、あてはまるものに○をつけて下さい(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|---------|-----|-------|
| 1 | 自治体直営 | 55 | 21.2 |
| 2 | NPO法人 | 88 | 34.0 |
| 3 | 社会福祉法人 | 73 | 28.2 |
| 4 | 社会福祉協議会 | 8 | 3.1 |
| 5 | 学校法人 | 6 | 2.3 |
| 6 | 株式会社 | 6 | 2.3 |
| 7 | 任意団体 | 6 | 2.3 |
| 8 | その他 | 16 | 6.2 |
| | 無回答 | 1 | 0.4 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

4. 上記の実施場所に、あてはまるものに○をつけて下さい(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|-----------|-----|-------|
| 1 | 保育所 | 53 | 20.5 |
| 2 | 認定こども園 | 13 | 5.0 |
| 3 | 幼稚園 | 0 | 0.0 |
| 4 | 公共施設・公民館 | 59 | 22.8 |
| 5 | 児童館 | 19 | 7.3 |
| 6 | 単独施設 | 34 | 13.1 |
| 7 | 空き店舗・商業施設 | 35 | 13.5 |
| 8 | 民家・マンション等 | 25 | 9.7 |
| 9 | その他 | 20 | 7.7 |
| | 無回答 | 1 | 0.4 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

5. 上記の1日あたりの従事者数に、あてはまるものに○をつけて下さい(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|-----|-------|
| 1 | 1人 | 8 | 3.1 |
| 2 | 2人 | 84 | 32.4 |
| 3 | 3~4人 | 104 | 40.1 |
| 4 | 5~9人 | 45 | 17.4 |
| 5 | 10人以上 | 17 | 6.6 |
| | 無回答 | 1 | 0.4 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

6. 1日あたりの利用親子の組数に、あてはまるものに○をつけて下さい(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|----------|-----|-------|
| 1 | 5組未満 | 19 | 7.3 |
| 2 | 5~10組未満 | 53 | 20.5 |
| 3 | 10~20組未満 | 88 | 34.0 |
| 4 | 20~50組未満 | 64 | 24.7 |
| 5 | 50組以上 | 33 | 12.7 |
| | 無回答 | 2 | 0.8 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

7. あなたの勤務日数に、あてはまるものに○をつけて下さい(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|-----|-------|
| 1 | 3日未満 | 73 | 28.2 |
| 2 | 4日 | 39 | 15.1 |
| 3 | 5日 | 133 | 51.3 |
| 4 | 6日 | 14 | 5.4 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

8. あなたの1日の勤務時間に、あてはまるものに○をつけて下さい(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|---------|-----|-------|
| 1 | 3時間未満 | 6 | 2.3 |
| 2 | 3～6時間未満 | 67 | 25.9 |
| 3 | 6～8時間未満 | 144 | 55.6 |
| 4 | 8時間以上 | 41 | 15.8 |
| | 無回答 | 1 | 0.4 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

9. あなたが現在の地域子育て支援拠点に勤務してきた期間に、あてはまるものに○をつけて下さい(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|---------|-----|-------|
| 1 | 1年未満 | 36 | 13.9 |
| 2 | 1～2年未満 | 38 | 14.7 |
| 3 | 2～3年未満 | 17 | 6.6 |
| 4 | 3～4年未満 | 19 | 7.3 |
| 5 | 4～5年未満 | 29 | 11.2 |
| 6 | 5～6年未満 | 23 | 8.9 |
| 7 | 6～7年未満 | 15 | 5.8 |
| 8 | 7～10年未満 | 33 | 12.7 |
| 9 | 10年以上 | 49 | 18.9 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

(2) 10. 親子の交流を通して親同士の支え合いや子ども同士の育ち合いを促している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 212 | 81.9 |
| 2 | だいたいあてはまる | 47 | 18.1 |
| 3 | あまりあてはまらない | 0 | 0.0 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

11. 地域の連携や交流を図るなどの活動に取り組んでいる

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 143 | 55.3 |
| 2 | だいたいあてはまる | 90 | 34.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 21 | 8.1 |
| 4 | あてはまらない | 5 | 1.9 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

12. 親及び子どもの性別、出身地、民族、国籍、障がいなどにかかわらず、すべての親子の支援を対象としている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 224 | 86.5 |
| 2 | だいたいあてはまる | 33 | 12.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 2 | 0.8 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

13. 親子の孤立を防ぎ、子育ての不安感を軽減するように働きかけている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 216 | 83.4 |
| 2 | だいたいあてはまる | 42 | 16.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 1 | 0.4 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

14. 利用者全体の動きをよく把握し、利用者同士がつながれるよう心掛けている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 198 | 76.4 |
| 2 | だいたいあてはまる | 60 | 23.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 1 | 0.4 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

15. 個別の相談に応じたケースの記録、日報や活動記録などを作成、支援の検証や改善につなげている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 192 | 74.1 |
| 2 | だいたいあてはまる | 59 | 22.8 |
| 3 | あまりあてはまらない | 8 | 3.1 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

16. 定期的にミーティングやケース会議を持ち、相互に利用者理解を深め、職員間で協力し、支援している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 195 | 75.3 |
| 2 | だいたいあてはまる | 58 | 22.4 |
| 3 | あまりあてはまらない | 5 | 1.9 |
| 4 | あてはまらない | 1 | 0.4 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

17. 子育て等に関する相談や援助を行っている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 225 | 86.8 |
| 2 | だいたいあてはまる | 31 | 12.0 |
| 3 | あまりあてはまらない | 3 | 1.2 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

18. 日頃から利用者に関わり、気兼ねなく相談に応じられるよう、声をかけている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 227 | 87.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 30 | 11.6 |
| 3 | あまりあてはまらない | 1 | 0.4 |
| 4 | あてはまらない | 1 | 0.4 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

19. 利用者との日常的な会話や態度などの様子を通して、家庭での子育てや生活背景の理解に努めている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 200 | 77.2 |
| 2 | だいたいあてはまる | 57 | 22.0 |
| 3 | あまりあてはまらない | 1 | 0.4 |
| 4 | あてはまらない | 1 | 0.4 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

20. 相談の際は、相づちや視線に配慮しながら、受容と共感的な態度で接している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 227 | 87.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 31 | 12.0 |
| 3 | あまりあてはまらない | 0 | 0.0 |
| 4 | あてはまらない | 1 | 0.4 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

21. 子どもの個性や発達を理解し、親とともに成長を見守っている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 232 | 89.5 |
| 2 | だいたいあてはまる | 25 | 9.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 2 | 0.8 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

22. 利用者同士が同じ課題について語り合う機会を意識的に設けている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 134 | 51.7 |
| 2 | だいたいあてはまる | 104 | 40.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 19 | 7.3 |
| 4 | あてはまらない | 2 | 0.8 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

23. 利用者に対して子育てに関する情報を幅広く収集し、情報の提供を行っている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 171 | 66.0 |
| 2 | だいたいあてはまる | 85 | 32.8 |
| 3 | あまりあてはまらない | 3 | 1.2 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

24. 子育てや子育て支援に関する講習などを月一回以上実施している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 159 | 61.4 |
| 2 | だいたいあてはまる | 42 | 16.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 41 | 15.8 |
| 4 | あてはまらない | 17 | 6.6 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

25. 子ども一人ひとりの最善の利益を尊重している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 179 | 69.1 |
| 2 | だいたいあてはまる | 74 | 28.6 |
| 3 | あまりあてはまらない | 4 | 1.5 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 2 | 0.8 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

26. 親が支えを得て子育てに取り組み、子どもに向き合うゆとりと自信を持てるように支援している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 171 | 66.0 |
| 2 | だいたいあてはまる | 82 | 31.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 6 | 2.3 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

27. 利用者のこれまでの経験や体験(職業を含む)を活かしつつ親として成長できるように支援している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 137 | 52.9 |
| 2 | だいたいあてはまる | 106 | 40.9 |
| 3 | あまりあてはまらない | 14 | 5.4 |
| 4 | あてはまらない | 1 | 0.4 |
| | 無回答 | 1 | 0.4 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

28. 利用者の悩みを理解し、その軽減や解決のための方法を共に考え、最終的に本人の自己決定を尊重している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 196 | 75.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 60 | 23.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 2 | 0.8 |
| 4 | あてはまらない | 1 | 0.4 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

29. 子どもが様々な人たちとの関係性の中で、他者への信頼感を高められるように支援している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 158 | 61.0 |
| 2 | だいたいあてはまる | 93 | 35.9 |
| 3 | あまりあてはまらない | 8 | 3.1 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

30. 利用者がいつでも支援者に手助けを求められることができるように、水平・対等な関係を築いている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 193 | 74.5 |
| 2 | だいたいあてはまる | 65 | 25.1 |
| 3 | あまりあてはまらない | 1 | 0.4 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

31. 利用者が他の子どもにも気づき、意識し、他の親とともに子育てする姿勢が育つよう、関わっている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 170 | 65.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 79 | 30.5 |
| 3 | あまりあてはまらない | 10 | 3.9 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

32. 親への支援を通し、支援者が自らの成長を感じ、またそれを支援に活かしている

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 163 | 63.0 |
| 2 | だいたいあてはまる | 90 | 34.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 5 | 1.9 |
| 4 | あてはまらない | 1 | 0.4 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

33. 利用者同士が、今後も同じ地域で支え合いながら子育てをしていくことを視野に入れて、支援している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 173 | 66.8 |
| 2 | だいたいあてはまる | 79 | 30.5 |
| 3 | あまりあてはまらない | 7 | 2.7 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

34. 他の子の成長を利用者が我が子のことのように共感性をもって接していけるように、支援している

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|-----|-------|
| 1 | あてはまる | 153 | 59.0 |
| 2 | だいたいあてはまる | 96 | 37.1 |
| 3 | あまりあてはまらない | 10 | 3.9 |
| 4 | あてはまらない | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 259 | 100.0 |

2. 「地域子育て支援拠点の利用者アンケート」調査結果

回収数...(数量)

| | |
|-----|------|
| 無回答 | 0 |
| 全体 | 1322 |

調査区分...(SA)

| No. | カテゴリ名 | n | % |
|-----|-------|------|-------|
| 1 | WEB調査 | 691 | 52.3 |
| 2 | 郵送調査 | 631 | 47.7 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

(1) 1. 拠点をいっしょに利用している子どもにとって、あなたは、次のどれにあてはまりますか？あてはまる番号に○をしてください

| No. | カテゴリ名 | n | % |
|-----|-------|------|-------|
| 1 | 母 | 1296 | 97.9 |
| 2 | 父 | 13 | 1.0 |
| 3 | 祖母 | 9 | 0.7 |
| 4 | 祖父 | 0 | 0.0 |
| 5 | その他 | 2 | 0.2 |
| | 無回答 | 2 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

2-1-1.第1子:月齢:歳...(数量)

| | |
|---------|--------|
| 合計 | 3257.0 |
| 平均 | 2.5 |
| 分散(n-1) | 6.3 |
| 標準偏差 | 2.5 |
| 最大値 | 18.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 25 |
| 全体 | 1297 |

2-1-2.第1子:月齢:力月...(数量)

| | |
|---------|--------|
| 合計 | 6859.0 |
| 平均 | 5.3 |
| 分散(n-1) | 12.2 |
| 標準偏差 | 3.5 |
| 最大値 | 11.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 25 |
| 全体 | 1297 |

2-1-3.第 1 子:利用施設...(MA)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 保育園 | 149 | 11.3 |
| 2 | 幼稚園 | 185 | 14.0 |
| 3 | 認定こども園 | 73 | 5.5 |
| 4 | その他 | 246 | 18.6 |
| | 無回答 | 719 | 54.4 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

2-2-1.第 2 子:月齢:歳...(数量)

| | |
|---------|-------|
| 合計 | 918.0 |
| 平均 | 1.9 |
| 分散(n-1) | 4.9 |
| 標準偏差 | 2.2 |
| 最大値 | 17.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 832 |
| 全体 | 490 |

2-2-2.第 2 子:月齢:カ月...(数量)

| | |
|---------|--------|
| 合計 | 2579.0 |
| 平均 | 5.3 |
| 分散(n-1) | 13.0 |
| 標準偏差 | 3.6 |
| 最大値 | 11.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 832 |
| 全体 | 490 |

2-2-3.第 2 子:利用施設...(MA)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 保育園 | 34 | 2.6 |
| 2 | 幼稚園 | 41 | 3.1 |
| 3 | 認定こども園 | 24 | 1.8 |
| 4 | その他 | 62 | 4.7 |
| | 無回答 | 1165 | 88.1 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

2-3-1.第 3 子:月齢:歳...(数量)

| | |
|---------|-------|
| 合計 | 137.0 |
| 平均 | 1.7 |
| 分散(n-1) | 3.0 |
| 標準偏差 | 1.7 |
| 最大値 | 8.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 1239 |
| 全体 | 83 |

2-3-2.第3子:月齡:カ月...(数量)

| | |
|---------|-------|
| 合計 | 409.0 |
| 平均 | 4.9 |
| 分散(n-1) | 12.2 |
| 標準偏差 | 3.5 |
| 最大値 | 11.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 1239 |
| 全体 | 83 |

2-3-3.第3子:利用施設...(MA)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 保育園 | 9 | 0.7 |
| 2 | 幼稚園 | 7 | 0.5 |
| 3 | 認定こども園 | 8 | 0.6 |
| 4 | その他 | 10 | 0.8 |
| | 無回答 | 1288 | 97.4 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

2-4-1.第4子:月齡:歳...(数量)

| | |
|---------|------|
| 合計 | 12.0 |
| 平均 | 1.1 |
| 分散(n-1) | 0.9 |
| 標準偏差 | 0.9 |
| 最大値 | 2.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 1311 |
| 全体 | 11 |

2-4-2.第4子:月齡:カ月...(数量)

| | |
|---------|------|
| 合計 | 60.0 |
| 平均 | 5.5 |
| 分散(n-1) | 16.9 |
| 標準偏差 | 4.1 |
| 最大値 | 11.0 |
| 最小値 | 0.0 |
| 無回答 | 1311 |
| 全体 | 11 |

2-4-3.第4子:利用施設...(MA)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 保育園 | 2 | 0.2 |
| 2 | 幼稚園 | 0 | 0.0 |
| 3 | 認定こども園 | 0 | 0.0 |
| 4 | その他 | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 1320 | 99.8 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

2-5-1.第5子:月齢:歳...(数量)

| | |
|---------|------|
| 合計 | 5.0 |
| 平均 | 5.0 |
| 分散(n-1) | |
| 標準偏差 | |
| 最大値 | 5.0 |
| 最小値 | 5.0 |
| 無回答 | 1321 |
| 全体 | 1 |

2-5-2.第5子:月齢:力月...(数量)

| | |
|---------|------|
| 合計 | 0.0 |
| 平均 | |
| 分散(n-1) | |
| 標準偏差 | |
| 最大値 | |
| 最小値 | |
| 無回答 | 1322 |
| 全体 | 0 |

2-5-3.第5子:利用施設...(MA)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 保育園 | 0 | 0.0 |
| 2 | 幼稚園 | 0 | 0.0 |
| 3 | 認定こども園 | 1 | 0.1 |
| 4 | その他 | 0 | 0.0 |
| | 無回答 | 1321 | 99.9 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

3. 現在いっしょに拠点を利用している子どもは、何番目のお子さんですか？あてはまる番号に○をしてください

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 第1子 | 1031 | 78.0 |
| 2 | 第2子 | 428 | 32.4 |
| 3 | 第3子 | 84 | 6.4 |
| 4 | 第4子 | 10 | 0.8 |
| 5 | 第5子 | 2 | 0.2 |
| | 無回答 | 1 | 0.1 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

4. 拠点を利用し始めてから現在の期間にあてはまる番号に○をしてください(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|----------|------|-------|
| 1 | 3ヶ月未満 | 167 | 12.6 |
| 2 | 3～6ヶ月未満 | 187 | 14.1 |
| 3 | 6ヶ月～1年未満 | 285 | 21.6 |
| 4 | 1～2年未満 | 328 | 24.8 |
| 5 | 2年以上 | 355 | 26.9 |
| | 無回答 | 0 | 0.0 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

5. 1ヶ月あたりの拠点の利用頻度にあてはまる番号に○をしてください(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|----------|------|-------|
| 1 | 月4日未満 | 434 | 32.9 |
| 2 | 月4～8日未満 | 385 | 29.1 |
| 3 | 月8～12日未満 | 255 | 19.3 |
| 4 | 月12日以上 | 245 | 18.5 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

6. あなたの年齢にあてはまる番号に○をしてください(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 19歳以下 | 3 | 0.2 |
| 2 | 20～24歳 | 14 | 1.1 |
| 3 | 25～29歳 | 217 | 16.4 |
| 4 | 30～34歳 | 520 | 39.3 |
| 5 | 35～39歳 | 374 | 28.3 |
| 6 | 40～44歳 | 166 | 12.6 |
| 7 | 45～49歳 | 17 | 1.3 |
| 8 | 50歳以上 | 8 | 0.6 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

7. 現在のあなたの就労状況について、いずれかあてはまる番号に○をしてください

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 働いている | 210 | 15.9 |
| 2 | 働いていない | 1108 | 83.8 |
| | 無回答 | 4 | 0.3 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

7-1. 1に○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | フルタイム | 90 | 42.9 |
| 2 | パートタイム | 85 | 40.5 |
| 3 | その他 | 32 | 15.2 |
| | 無回答 | 3 | 1.4 |
| | 非該当 | 1112 | |
| | 全体 | 210 | 100.0 |

7-2. ○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？(1つ選択)

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|---------|------|-------|
| 1 | 育児休業中 | 289 | 26.1 |
| 2 | 結婚を機に退職 | 237 | 21.4 |
| 3 | 出産を機に退職 | 427 | 38.6 |
| 4 | その他 | 78 | 7.0 |
| | 無回答 | 77 | 6.9 |
| | 非該当 | 214 | |
| | 全体 | 1108 | 100.0 |

8. 子育てを日常的に手伝ってくれる人はいますか？

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | はい | 1003 | 75.8 |
| 2 | いいえ | 318 | 24.1 |
| | 無回答 | 1 | 0.1 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

8-1. 1に○をつけた方に伺います。それは次のうち誰ですか？

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|--------|------|-------|
| 1 | 配偶者 | 904 | 90.1 |
| 2 | 実母 | 403 | 40.2 |
| 3 | 実父 | 190 | 18.9 |
| 4 | 義母 | 204 | 20.3 |
| 5 | 義父 | 104 | 10.4 |
| 6 | 祖父母 | 35 | 3.5 |
| 7 | 兄弟姉妹 | 98 | 9.8 |
| 8 | 隣人 | 15 | 1.5 |
| 9 | 友人 | 42 | 4.2 |
| 10 | その他 | 16 | 1.6 |
| | 無回答 | 1 | 0.1 |
| | 非該当 | 319 | |
| | 全体 | 1003 | 100.0 |

(2) 9. あいさつと笑顔で、温かく迎え入れてくれる

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 1233 | 93.1 |
| 2 | だいたいあてはまる | 84 | 6.4 |
| 3 | あまりあてはまらない | 1 | 0.1 |
| 4 | あてはまらない | 2 | 0.2 |
| | 無回答 | 2 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

10. 職員は、ふだんから親子の交流の場におらず、日常的な関わりはほとんどない

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 67 | 5.1 |
| 2 | だいたいあてはまる | 50 | 3.8 |
| 3 | あまりあてはまらない | 232 | 17.5 |
| 4 | あてはまらない | 967 | 73.1 |
| | 無回答 | 6 | 0.5 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

11. 多様な親子が利用できる雰囲気がある

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 1018 | 77.0 |
| 2 | だいたいあてはまる | 280 | 21.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 14 | 1.1 |
| 4 | あてはまらない | 7 | 0.5 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

12. 職員は、気持ちや悩みを受け止め、共感してくれる

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 954 | 72.2 |
| 2 | だいたいあてはまる | 333 | 25.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 24 | 1.8 |
| 4 | あてはまらない | 7 | 0.5 |
| | 無回答 | 4 | 0.3 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

13. 解決方法を押し付けられているように感じることもある

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 34 | 2.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 25 | 1.9 |
| 3 | あまりあてはまらない | 247 | 18.7 |
| 4 | あてはまらない | 1014 | 76.6 |
| | 無回答 | 2 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

14. 子育ての悩みなどを気兼ねなく相談できる

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 822 | 62.1 |
| 2 | だいたいあてはまる | 412 | 31.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 70 | 5.3 |
| 4 | あてはまらない | 14 | 1.1 |
| | 無回答 | 4 | 0.3 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

15. 子ども同士、トラブルがあると利用しにくい

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 130 | 9.8 |
| 2 | だいたいあてはまる | 328 | 24.8 |
| 3 | あまりあてはまらない | 492 | 37.3 |
| 4 | あてはまらない | 365 | 27.6 |
| | 無回答 | 7 | 0.5 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

16. 子育てを支えられていると感じる

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 865 | 65.4 |
| 2 | だいたいあてはまる | 393 | 29.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 53 | 4.0 |
| 4 | あてはまらない | 6 | 0.5 |
| | 無回答 | 5 | 0.4 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

17. 子どもの友だちが増えた

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 645 | 48.8 |
| 2 | だいたいあてはまる | 338 | 25.6 |
| 3 | あまりあてはまらない | 238 | 18.0 |
| 4 | あてはまらない | 97 | 7.3 |
| | 無回答 | 4 | 0.3 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

18. 子育てしている親と知り合えた

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 862 | 65.2 |
| 2 | だいたいあてはまる | 322 | 24.4 |
| 3 | あまりあてはまらない | 94 | 7.1 |
| 4 | あてはまらない | 41 | 3.1 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

19. 大人と日常的な会話をする機会が増えた

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 825 | 62.4 |
| 2 | だいたいあてはまる | 365 | 27.6 |
| 3 | あまりあてはまらない | 107 | 8.1 |
| 4 | あてはまらない | 22 | 1.7 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

20. 他の親子の力になりたいと思うようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 416 | 31.5 |
| 2 | だいたいあてはまる | 534 | 40.3 |
| 3 | あまりあてはまらない | 305 | 23.1 |
| 4 | あてはまらない | 63 | 4.8 |
| | 無回答 | 4 | 0.3 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

21. わが子なりの成長に気づき、個性や可能性を感じる

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 874 | 66.2 |
| 2 | だいたいあてはまる | 413 | 31.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 29 | 2.2 |
| 4 | あてはまらない | 3 | 0.2 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

22. 困ったことがあっても解決できると思えるようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 570 | 43.1 |
| 2 | だいたいあてはまる | 590 | 44.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 144 | 10.9 |
| 4 | あてはまらない | 15 | 1.1 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

23. 自分の本当の気持ちを話せないことがある

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 104 | 7.9 |
| 2 | だいたいあてはまる | 346 | 26.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 621 | 46.9 |
| 4 | あてはまらない | 248 | 18.8 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

24. 手がかかっても、わが子が愛おしいと思えるようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 841 | 63.7 |
| 2 | だいたいあてはまる | 413 | 31.2 |
| 3 | あまりあてはまらない | 45 | 3.4 |
| 4 | あてはまらない | 15 | 1.1 |
| | 無回答 | 8 | 0.6 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

25. 子育てでつらいのは、自分だけでないと思えるようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 906 | 68.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 358 | 27.1 |
| 3 | あまりあてはまらない | 40 | 3.0 |
| 4 | あてはまらない | 11 | 0.8 |
| | 無回答 | 7 | 0.5 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

26. 子育てを助けてくれる人がいると思えるようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 734 | 55.5 |
| 2 | だいたいあてはまる | 472 | 35.7 |
| 3 | あまりあてはまらない | 93 | 7.0 |
| 4 | あてはまらない | 18 | 1.4 |
| | 無回答 | 5 | 0.4 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

27. 子どもが親以外の大人とかかわることができるようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 885 | 66.9 |
| 2 | だいたいあてはまる | 350 | 26.5 |
| 3 | あまりあてはまらない | 65 | 4.9 |
| 4 | あてはまらない | 18 | 1.4 |
| | 無回答 | 4 | 0.3 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

28. 面倒なことは、あまりやりたくないと思う

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 166 | 12.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 475 | 35.9 |
| 3 | あまりあてはまらない | 470 | 35.6 |
| 4 | あてはまらない | 204 | 15.4 |
| | 無回答 | 7 | 0.5 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

29. 子育て以外のことにも関心が広がった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 394 | 29.8 |
| 2 | だいたいあてはまる | 522 | 39.4 |
| 3 | あまりあてはまらない | 341 | 25.8 |
| 4 | あてはまらない | 59 | 4.5 |
| | 無回答 | 6 | 0.5 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

30. 他の子をあやしたり、抱いたりするようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 491 | 37.1 |
| 2 | だいたいあてはまる | 539 | 40.9 |
| 3 | あまりあてはまらない | 216 | 16.3 |
| 4 | あてはまらない | 72 | 5.4 |
| | 無回答 | 4 | 0.3 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

31. 自分の情報や経験は、他の人の役に立つとは思えない

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 35 | 2.6 |
| 2 | だいたいあてはまる | 159 | 12.0 |
| 3 | あまりあてはまらない | 709 | 53.7 |
| 4 | あてはまらない | 413 | 31.2 |
| | 無回答 | 6 | 0.5 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

32. まわりの人と子育ての価値観が違ってよいと思えるようになった

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 661 | 50.0 |
| 2 | だいたいあてはまる | 570 | 43.1 |
| 3 | あまりあてはまらない | 70 | 5.3 |
| 4 | あてはまらない | 16 | 1.2 |
| | 無回答 | 5 | 0.4 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

33. 他の人も子育てをがんばっていると思う

| No. | カテゴリー名 | n | % |
|-----|------------|------|-------|
| 1 | あてはまる | 1174 | 88.8 |
| 2 | だいたいあてはまる | 134 | 10.1 |
| 3 | あまりあてはまらない | 9 | 0.7 |
| 4 | あてはまらない | 2 | 0.2 |
| | 無回答 | 3 | 0.2 |
| | 全体 | 1322 | 100.0 |

Ⅲ. 聞き取り調査項目

1. 地域子育て支援拠点の支援者への聞き取り項目

A ヒアリング調査 支援者用

拠点名 _____

ア A、拠点を利用し始めた利用者に対し、1～11 について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか。

ア、1 子連れで外出することについて

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、子連れで外出することについて利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、2 家での子どもの世話（含 教育的働きかけ）

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、家での子どもの世話（含 教育的働きかけ）について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、3 家での育児以外の家事

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、家での育児以外の家事について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、4 子どもからのサインやニーズへの対応について

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、子どもからのサインやニーズへの対応について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、5 その他の日常生活（趣味など）

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、その他の日常生活（趣味など）について利用者の考え方や行動な

どがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、6 働き方について／職場の人との関係

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、働き方について／職場の人との関係について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、7 家族との関係

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、家族との関係について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、8 近所の人（自治会などの関係も含めて）との関係

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、近所の人（自治会などの関係も含めて）との関係について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、9 拠点で出会った利用者との関係（拠点内・外での）

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、拠点で出会った利用者との関係（拠点内・外での）について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、10 拠点のスタッフとの関係について

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、拠点のスタッフとの関係について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

ア、11 その他

A、拠点を利用し始めた利用者に対し、その他について利用者の考え方や行動などがどう変わってほしいと考えていますか？

B、そうした変化がもたらされるために、拠点においてスタッフが行った支援、利用者相互の関係性を用いて行った支援、拠点という場の力を使って行った支援は、具体的にどんなことでしょうか？

- イ A、親への支援を通し、支援者であるあなた自らが、自身の成長を感じますか？そのことからあなたは「自分の役割(1~4)」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？
- B、そうした変化は、この拠点での支援に活かされていますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、1 支援者としての役割

- A、親への支援を通し、支援者であるあなた自らが、自身の成長を感じますか？そのことからあなたは「支援者としての役割」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？
- B、そうした変化は、この拠点での支援に活かされていますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、2 地域の一員としての役割

- A、親への支援を通し、支援者であるあなた自らが、自身の成長を感じますか？そのことからあなたは「地域の一員としての役割」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？
- B、そうした変化は、この拠点での支援に活かされていますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、3 自分自身の家族への接し方

- A、親への支援を通し、支援者であるあなた自らが、自身の成長を感じますか？そのことからあなたは「自分自身の家族への接し方」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？
- B、そうした変化は、この拠点での支援に活かされていますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、4 その他

- A、親への支援を通し、支援者であるあなた自らが、自身の成長を感じますか？そのことからあなたは「その他」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？
- B、そうした変化は、この拠点での支援に活かされていますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ウ、1

地域子育て支援拠点での利用者の「親としての成長」をどのようなものと捉えていますか。

ウ、2

1で答えた利用者の「親としての成長」を促すために、地域子育て支援拠点の支援はどうあるのが望ましいと思いますか。

2. 地域子育て支援拠点の利用者への聞き取り項目

A ヒアリング調査 利用者用

拠点名 _____

(1) あなたとあなたの子育ての状況について質問します。

1. 拠点を一緒に利用している子どもにとって、あなたは、次のどれにあてはまりますか？あてはまる番号に○をしてください

1. 母 2. 父 3. 祖母 4. 祖父 5. その他 ()

2. あなたの子どもの月齢と、拠点以外に利用している施設があれば○をつけてください。

| | | 利用している施設があれば○をつけてください | | | |
|-----|------|-----------------------|-----|--------|---------------|
| 第○子 | 月齢 | 保育園 | 幼稚園 | 認定こども園 | その他(施設の種類を記入) |
| 第1子 | 歳 力月 | | | | |
| 第2子 | 歳 力月 | | | | |
| 第3子 | 歳 力月 | | | | |
| 第4子 | 歳 力月 | | | | |

3. 現在一緒に拠点を利用している子どもは、何番目のお子さんですか？あてはまる番号に○をしてください

1. 第1子 2. 第2子 3. 第3子 4. 第4子 5. 第5子

4. 拠点を利用し始めてから現在の期間にあてはまる番号に○をしてください (1つ選択)

1. 3ヶ月未満 2. 3～6ヶ月未満 3. 6～1年未満 4. 1～2年未満 5. 2年以上

5. 1ヶ月あたりの拠点の利用頻度にあてはまる番号に○をしてください (1つ選択)

1. 月4日未満 2. 月4～8日未満 3. 月8～12日未満 4. 月12日以上

6. あなたの年齢にあてはまる番号に○をしてください (1つ選択)

1. 19歳以下 2. 20～24歳 3. 25～29歳 4. 30～34歳
5. 35～39歳 6. 40～44歳 7. 45～49歳 8. 50歳以上

7. 現在のあなたの就労状況について、いずれかあてはまる番号に○をしてください

1. 働いている 2. 働いていない

→1に○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？ (1つ選択)

1. フルタイム 2. パートタイム 3. その他()

→2○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？ (1つ選択)

1. 育児休業中 2. 結婚を機に退職 3. 出産を機に退職 4. その他 ()

8. 子育てを日常的に手伝ってくれる人はいますか？

1. はい 2. いいえ

→1に○をつけた方に伺います。それは次のうち誰ですか？

1. 配偶者 2. 実母 3. 実父 4. 義母 5. 義父 6. 祖父母 7. 兄弟姉妹

8. 隣人 9. 友人 10. その他

ア A、拠点を利用し始めてから、1～11についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？

B、変わったとすれば、どう変わりましたか？

ア、1 子連れで外出すること

A、拠点を利用し始めてから、子連れで外出することについてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、2 家での子どもの世話（含 教育的働きかけ）

A、拠点を利用し始めてから、家での子どもの世話（含 教育的働きかけ）についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、3 家での育児以外の家事

A、拠点を利用し始めてから、家での育児以外の家事についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、4 子どもからのサインやニーズへの対応

A、拠点を利用し始めてから、子どもからのサインやニーズへの対応についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、5 その他の日常生活（趣味など）

A、拠点を利用し始めてから、その他の日常生活（趣味など）についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、6 働き方について／職場の人との関係（働いている人のみ）

A、拠点を利用し始めてから、働き方について／職場の人との関係についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、7 家族との関係

A、拠点を利用し始めてから、家族との関係についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、8 近所の人（自治会などの関係も含めて）との関係

A、拠点を利用し始めてから、近所の人（自治会などの関係も含めて）との関係についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、9 拠点で出会った利用者との関係(拠点内・外での)

A、拠点を利用し始めてから、拠点で出会った利用者との関係(拠点内・外での)についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、10 拠点のスタッフとの関係

A、拠点を利用し始めてから、拠点のスタッフとの関係についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

ア、11 その他

A、拠点を利用し始めてから、その他についてあなたの考え方や行動などは変わったと思いますか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ A、拠点を利用し始めてから、あなたは「自分の役割(1～5つ 別記)」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、1 親としての役割

A、拠点を利用し始めてから、あなたは「親としての役割」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、2 妻（または夫）としての役割

A、拠点を利用し始めてから、あなたは「妻（または夫）としての役割」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、3 地域の一員としての役割

A、拠点を利用し始めてから、あなたは「地域の一員としての役割」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、4 職業人としての役割

A、拠点を利用し始めてから、あなたは「職業人としての役割」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

イ、5 その他の役割

A、拠点を利用し始めてから、あなたは「その他の役割」に関して、考え方や行動などが変化しましたか？変わったとすれば、どう変わりましたか？

B、そうした変化は、この拠点を利用したことと関係あると思いますか？それは具体的にどんなことでしょうか？

IV. プレ／ポスト 調査票

1. 地域子育て支援拠点の支援者 調査票

厚生労働省 平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

「地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究」

プレ／ポスト調査

地域子育て支援拠点の支援者アンケート

(1) あなたが勤務する地域子育て支援拠点とあなたの業務についてお答え下さい。

1. あなたが勤務する地域子育て支援拠点の名称を記して下さい

2. 上記の所在地・連絡先を記して下さい

〒 _____ 都道府県 _____

住所 _____

TEL _____ FAX _____ メールアドレス _____

3. 上記の運営主体に、あてはまるものに○をつけて下さい (1つ選択)

1. 自治体直営 2. NPO法人 3. 社会福祉法人 4. 社会福祉協議会 5. 学校法人
6. 株式会社 7. 任意団体 8. その他()

4. 上記の実施場所に、あてはまるものに○をつけて下さい (1つ選択)

1. 保育所 2. 認定こども園 3. 幼稚園 4. 公共施設・公民館 5. 児童館 6. 単独施設
7. 空き店舗・商業施設 8. 民家・マンション等 9. その他()

5. 上記の1日あたりの従事者数に、あてはまるものに○をつけて下さい (1つ選択)

1. 1人 2. 2人 3. 3~4人 4. 5~9人 5. 10人以上

6. 1日あたりの利用親子の組数に、あてはまるものに○をつけて下さい (1つ選択)

1. 5組未満 2. 5~10組未満 3. 10~20組未満 4. 20~50組未満 5. 50組以上

7. あなたの勤務日数に、あてはまるものに○をつけて下さい (1つ選択)

1. 3日以下 2. 4日 3. 5日 4. 6日

8. あなたの1日の勤務時間に、あてはまるものに○をつけて下さい (1つ選択)

1. 3時間未満 2. 3~6時間未満 3. 6~8時間未満 4. 8時間以上

9. あなたが現在の地域子育て支援拠点に勤務してきた期間に、あてはまるものに○をつけて下さい (1つ選択)

1. 1年未満 2. 1~2年未満 3. 2~3年未満 4. 3~4年未満
5. 4~5年未満 6. 5~6年未満 7. 6~7年未満 8. 7~10年未満 9. 10年以上

(2) あなたの日々の支援について、1～4のうち最もあてはまる番号に○をつけてください。

| | 設 問 | 1 あては まる | 2 だいた いあて はまる | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらない |
|----|---|----------------|------------------------|-------------------------|------------------|
| 10 | 親子の交流を通して親同士の支え合いや子ども同士の育ち合いを促している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 地域の連携や交流を図るなどの活動に取り組んでいる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 | 親及び子どもの性別、出身地、民族、国籍、障がいなどにかかわらず、すべての親子の支援を対象としている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 | 親子の孤立を防ぎ、子育ての不安感を軽減するように働きかけている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 | 利用者全体の動きをよく把握し、利用者同士がつながれるよう心掛けている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15 | 個別の相談に応じたケースの記録、日報や活動記録などを作成、支援の検証や改善につなげている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16 | 定期的にミーティングやケース会議を持ち、相互に利用者理解を深め、職員間で協力し、支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 17 | 子育て等に関する相談や援助を行っている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18 | 日頃から利用者に関わり、気兼ねなく相談に応じられるよう、声をかけている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19 | 利用者との日常的な会話や態度などの様子を通して、家庭での子育てや生活背景の理解に努めている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20 | 相談の際は、相づちや視線に配慮しながら、受容と共感的な態度で接している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 21 | 子どもの個性や発達を理解し、親とともに成長を見守っている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22 | 利用者同士が同じ課題について語り合う機会を意識的に設けている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23 | 利用者に対して子育てに関する情報を幅広く収集し、情報の提供を行っている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24 | 子育てや子育て支援に関する講習などを月一回以上実施している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25 | 子ども一人ひとりの最善の利益を尊重している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26 | 親が支えを得て子育てに取り組み、子どもに向き合うゆとりと自信を持てるように支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 27 | 利用者のこれまでの経験や体験（職業を含む）を活かしつつ親として成長できるように支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 28 | 利用者の悩みを理解し、その軽減や解決のための方法を共に考え、最終的に本人の自己決定を尊重している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 29 | 子どもが様々な人たちとの関係性の中で、他者への信頼感を高められるように支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 30 | 利用者がいつでも支援者に手助けを求めることができるように、水平・対等な関係を築いている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 31 | 利用者が他の子どもにも気づき、意識し、他の親とともに子育てする姿勢が育つよう、関わっている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 32 | 親への支援を通し、支援者が自らの成長を感じ、またそれを支援に活かしている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 33 | 利用者同士が、今後も同じ地域で支え合いながら子育てをしていくことを視野に入れて、支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 34 | 他の子の成長を利用者が我が子のこのように共感性をもって接していけるように、支援している | 1 | 2 | 3 | 4 |

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

2. 地域子育て支援拠点の利用者 調査票

①1回目調査票

厚生労働省 平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
 「地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究」
 プレ/ポスト調査

地域子育て支援拠点の利用者アンケート①

| | | | |
|-----|---|---|--------------|
| 記入日 | 月 | 日 | 氏名（ニックネーム等可） |
|-----|---|---|--------------|

(1) あなたとあなたの子育ての状況について質問します。

1. 拠点をいっしょに利用している子どもにとって、あなたは、次のどれにあてはまりますか？あてはまる番号に○をしてください
 1. 母 2. 父 3. 祖母 4. 祖父 5. その他 ()
2. あなたの子どもの月齢と、拠点以外に利用している施設があれば○をつけてください。

| | | 利用している施設があれば○をつけてください | | | |
|-----|------|-----------------------|-----|--------|---------------|
| 第○子 | 月 齢 | 保育園 | 幼稚園 | 認定こども園 | その他（施設の種類を記入） |
| 第1子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第2子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第3子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第4子 | 歳 カ月 | | | | |
| 第5子 | 歳 カ月 | | | | |

3. 現在いっしょに拠点を利用している子どもは、何番目のお子さんですか？あてはまる番号に○をしてください
 1. 第1子 2. 第2子 3. 第3子 4. 第4子 5. 第5子
4. 拠点を利用し始めてから現在の期間にあてはまる番号に○をしてください（1つ選択）
 1. 3ヶ月未満 2. 3～6ヶ月未満 3. 6ヶ月～1年未満 4. 1～2年未満 5. 2年以上
5. 拠点を利用し始めてから現在の拠点の利用頻度にあてはまる番号に○をしてください（1つ選択）
 1. 月4日未満 2. 月4～8日未満 3. 月8～12日未満 4. 月12日以上
6. あなたの年齢にあてはまる番号に○をしてください（1つ選択）
 1. 19歳以下 2. 20～24歳 3. 25～29歳 4. 30～34歳
 5. 35～39歳 6. 40～44歳 7. 45～49歳 8. 50歳以上
7. 現在のあなたの就労状況について、いずれかあてはまる番号に○をしてください
 1. 働いている 2. 働いていない
 →1に○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？（1つ選択）
 1. フルタイム 2. パートタイム 3. その他()
 →2に○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？（1つ選択）
 1. 育児休業中 2. 結婚を機に退職 3. 出産を機に退職 4. その他()

8. 子育てを日常的に手伝ってくれる人はいますか？

1. はい 2. いいえ

→1に○をつけた方に伺います。それは次のうち誰ですか？

1. 配偶者 2. 実母 3. 実父 4. 義母 5. 義父 6. 祖父母 7. 兄弟姉妹
8. 隣人 9. 友人 10. その他

(2) あなたとあなたの子育ての状況について質問します。1～4のうち最もあてはまる番号に○をつけてください

号に○をつけてください

| あなたが利用している地域子育て支援拠点について、該当する答え1～4のいずれかに○をしてください | | 1 あては まる | 2 だいた いあて はまる | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらない |
|--|-------------------------------------|----------------|------------------------|-------------------------|------------------|
| 9 | あいさつと笑顔で、親子を温かく迎え入れてくれる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10 | 職員は、ふだんから親子の交流の場におらず、日常的な関わりはほとんどない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 多様な親子が利用できる雰囲気がある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 | 職員は、気持ちや悩みを受け止め、共感してくれる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 | 解決方法を押し付けられているように感じることもある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 | 子育ての悩みなどを気兼ねなく相談できる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15 | 子ども同士、トラブルがあると利用しにくい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16 | 子育てを支えられていると感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 地域子育て支援拠点を利用したことをきっかけに、あなたとあなたの子どもが得られたこと、変わったことなどについて、該当する答え1～4のいずれかに○をしてください | | 1 あては まる | 2 だいた いあて はまる | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらない |
| 17 | 子どもの友だちが増えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18 | 子育てしている親と知り合えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19 | 大人と日常的な会話をする機会が増えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20 | 他の親子の力になりたいと思うようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 21 | わが子なりの成長に気づき、個性や可能性を感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22 | 困ったことがあっても解決できると思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23 | 自分の本当の気持ちを話せないことがある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24 | 手がかかっても、わが子が愛おしいと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25 | 子育てでつらいのは、自分だけでないと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26 | 子育てを助けてくれる人がいると思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 27 | 子どもが親以外の大人とかかわることができるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 28 | 面倒なことは、あまりやりたくないと思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 29 | 子育て以外のことにも関心が広がった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 30 | 他の子をあやしたり、抱いたりするようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 31 | 自分の情報や経験は、他の人の役に立つとは思えない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 32 | まわりの人と子育ての価値観が違ってよいと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 33 | 他の人も子育てをがんばっていると思う | 1 | 2 | 3 | 4 |

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

②2回目調査票

厚生労働省 平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
「地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究」
プレ/ポスト調査

地域子育て支援拠点の利用者アンケート②

* 前回のアンケート実施の3か月以降に記入をお願いします。

| | | | |
|-----|---|---|--------------|
| 記入日 | 月 | 日 | 氏名（ニックネーム等可） |
|-----|---|---|--------------|

(1) あなたとあなたの子育ての状況について質問します。

1. 前回のアンケート時から現在の拠点の利用頻度にあてはまる番号に○をしてください（1つ選択）

1. 月4日未満 2. 月4～8日未満 3. 月8～12日未満 4. 月12日以上

（参考：前回のアンケート時の利用頻度）

2. 1で前回よりも利用頻度が増えた方は、主な理由にあてはまる番号に○をしてください

1. 居心地が良い 2. 同じ立場の親同士の交流 3. 行事やイベントへの参加
4. 子どもが行きたがる 5. 子ども同士遊ばせたい 6. 行くのが習慣になった
7. その他（ ）

3. 1で前回よりも利用頻度が減った方は、主な理由にあてはまる番号に○をしてください

1. 居心地がよくない 2. 拠点以外で友達ができた 3. 行事やイベントが少ない
4. 子どもが行きたがらない 5. 子ども同士うまく遊べない 6. 必要性を感じない
7. その他（ ）

4. 前回のアンケート時以降の拠点利用について、いずれかあてはまる番号に○をしてください

1. 行事やイベントに関わらず日常的に利用している
2. 行事やイベントを中心に利用している

5. 現在のあなたの就労状況について、いずれかあてはまる番号に○をしてください

1. 働いている 2. 働いていない
→ 1に○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？（1つ選択）
1. フルタイム 2. パートタイム 3. その他（ ）

→ 2に○をつけた方に伺います。次のどれにあてはまりますか？（1つ選択）

1. 育児休業中 2. 結婚を機に退職 3. 出産を機に退職 4. その他（ ）

6. 子育てを日常的に手伝ってくれる人はいますか？

1. はい 2. いいえ

→ 1に○をつけた方に伺います。それは次のうち誰ですか？

1. 配偶者 2. 実母 3. 実父 4. 義母 5. 義父 6. 祖父母 7. 兄弟姉妹
8. 隣人 9. 友人 10. その他

(2) あなたとあなたの子育ての状況について質問します。1～4のうち最もあてはまる番号に○をつけてください

| あなたが利用している地域子育て支援拠点について、該当する答え1～4のいずれかに○をしてください | | 1 あては まる | 2 だいた いあて はまる | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらない |
|--|-------------------------------------|----------------|------------------------|-------------------------|------------------|
| 7 | あいさつと笑顔で、親子を温かく迎え入れてくれる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8 | 職員は、ふだんから親子の交流の場におらず、日常的な関わりはほとんどない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9 | 多様な親子が利用できる雰囲気がある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10 | 職員は、気持ちや悩みを受け止め、共感してくれる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 | 解決方法を押し付けられているように感じることもある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 | 子育ての悩みなどを気兼ねなく相談できる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 | 子ども同士、トラブルがあると利用しにくい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 | 子育てを支えられていると感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 地域子育て支援拠点を利用したことをきっかけに、あなたとあなたの子どもが得られたこと、変わったことなどについて、該当する答え1～4のいずれかに○をしてください | | 1 あては まる | 2 だいた いあて はまる | 3 あまり あては まらない | 4 あては まらない |
| 15 | 子どもの友だちが増えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16 | 子育てしている親と知り合えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 17 | 大人と日常的な会話をする機会が増えた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18 | 他の親子の力になりたいと思うようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19 | わが子なりの成長に気づき、個性や可能性を感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20 | 困ったことがあっても解決できると思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 21 | 自分の本当の気持ちを話せないことがある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22 | 手がかかっても、わが子が愛おしいと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23 | 子育てでつらいのは、自分だけでないと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24 | 子育てを助けてくれる人がいると思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25 | 子どもが親以外の大人とかかわることができるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26 | 面倒なことは、あまりやりたくないと思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 27 | 子育て以外のことにも関心が広がった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 28 | 他の子をあやしたり、抱いたりするようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 29 | 自分の情報や経験は、他の人の役に立つとは思えない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 30 | まわりの人と子育ての価値観が違ってよいと思えるようになった | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 34 | 他の人も子育てをがんばっていると思う | 1 | 2 | 3 | 4 |

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

◆本調査研究の報告書は、下記の NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会のホームページにて公開しています◆
<http://kosodatehiroba.com>

